



Title	18世紀アイヌ押韻文：ルウェサニウンク 叙事詩その頭脚韻と不完全韻
Author(s)	丹菊, 逸治
Citation	1-77
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/86213
Type	research report
File Information	18c-ainu.pdf



[Instructions for use](#)

18 世紀アイヌ押韻文

ルウェサニウシクル叙事詩その頭脚韻と不完全韻

丹菊 逸治

北海道大学アイヌ・先住民研究センター

アイヌ・先住民言語アーカイヴプロジェクト報告書 2020

目次

梗概.....	1
1. はじめに.....	2
2. 詩連構成.....	4
3. アイヌ叙事詩の押韻構造.....	5
3-1. 4行詩連.....	6
3-1-1. 4行詩連における行頭・行末の母音韻の種類.....	6
3-1-2. 母音の出現比率による影響.....	7
3-1-3. 母音の出現比率を考慮した場合.....	9
3-1-4. 同一語句による母音一致を除外した押韻出現比率.....	10
3-1-5. 最後から2番目の母音の一致率.....	11
3-2. 3行詩連における行頭・行末の母音韻.....	12
3-3. 5行詩連における行頭・行末の母音韻.....	13
3-4. 6行詩連・7行詩連における行頭・行末の母音韻.....	14
3-5. 2行詩連における行頭・行末の母音韻.....	17
4. 不完全韻.....	18
4-1. 行頭で複数の母音が一致.....	18
4-2. 行末で複数の母音が一致.....	18
4-3. 行頭と行末で複数の母音が一致.....	18
4-4. 複数の子音による一致.....	19
4-5. 間に他の行が挟まる.....	19
4-6. 複数の母音の素性が一致.....	19
4-7. 対応する部分の長さが異なる例.....	20
4-8. 3つ以上の行が少しずつ類似している例.....	21
5. 「散発的な韻」.....	22
5-1. 行頭・行末における子音韻.....	22
5-2. 同じ音の多用.....	23
5-3. 繰り返し語句・対句.....	23
5-4. 交差配列.....	24
5-5. 韻文特有の関係節表現.....	24
6. おわりに.....	25
引用文献.....	26
資料：「ルウェサニウシク叙事詩」.....	28

18 世紀アイヌ押韻文

丹菊 逸治

梗概

1792 年成立のアイヌ語彙集『もしほ草』巻末に掲載されているカナ書き叙事詩「ルウェサニウングル叙事詩」(全 546 行) の詩連構成と押韻について検討した。

(1) 詩連構成は 4 行詩連を中心とする。この詩連構成は現代とほぼ同じである。1 行の音節数は 6.8 音節 (全 546 行で 3711 音節ある) であり、現代の韻文とほぼ同じである。

(2) 詩連内部で行頭韻を踏む。現代の韻文とほぼ同じ行頭押韻文である。ただし現代と異なり行末韻は義務的ではない。

- ① 4 行詩連では、行頭で偶然生じる率 90.0%よりやや多めの 96.4%の母音韻がみられる。
- ② 4 行詩連では、現代と異なり偶然以上の行末韻はみられない。
- ② 3 行詩連では作為的な押韻はないようである。
- ③ 5 行詩連では、作為的な行頭韻が存在する可能性がある。

(3) 詩連内部で不完全韻を踏む。現代とほぼ同じである。

(4) いわゆる「散発的な押韻」がある。現代とほぼ同じである。

1. はじめに

1792年に成立したと推定され1804年に刊本となった、アイヌ語通訳上原熊次郎によるアイヌ語辞書『もしほ草』(上原1792)には巻末に「ユーガリ 浄瑠璃の事」としてアイヌ語の叙事詩1編が全文掲載されている。18世紀アイヌ語韻文のほとんど唯一にして最大の資料である。本稿はその詩連構造と押韻形式を確認する試みである。

『もしほ草』は1972年に国書刊行会から影印本が刊行されており、現在でも古書店等で入手可能である。また2021年現在、早稲田大学図書館、函館市中央図書館などで高精細写真がインターネット公開されており、誰でも読むことができる。金田一京助、浅井了、田中聖子・佐々木利和らによる先行研究でも高く評価されており、その存在は有名なのだが、なぜか今まで日本語訳されたことはないようである。

山本多助・山本文利の編集によるアイヌ語同人誌『アイヌ・モシリ』(1957-1963)の第4号(1958年6月刊)に全文が原文カナ表記のままで掲載されている¹が(釧路アイヌ文化懇話会編1998)、同誌は原則としてアイヌ語雑誌であるため日本語訳は付されていない。同誌創刊号で山本多助は各地のアイヌが自分たちの文章・伝承を寄せる場とするという編集方針を示し、基本的にはその通りの編集になっている。第2・3号に「ユリワカ・ニシパ(シサム・ウエベケレ)」として百合若物語のアイヌ語訳(山本多助訳)が掲載されるなど、同誌には他文化の物語のアイヌ語訳もいくつか掲載されているが、江戸時代の資料の特集は第4号のみである。第4号には『もしほ草』掲載の諸作品²のほかに大田南畝『一話一言』(1779~)の「蝦夷国の歌」(巻六)「蝦夷人唄 ユウカラ」(巻三十三)、『もしほ草』掲載の「チャーラケ」なども掲載されているが、その掲載意図はいまひとつはっきりしない。『もしほ草』では、掲載アイヌ語資料には和訳が付される(語彙、短文その他)か、アイヌ語文の隣に大意を表す漢字が傍訳としてふってあり、おそらくそれらを利用して意味が確認できたためか、『アイヌ・モシリ』に掲載された際にも、カタカナ表記は山本多助による合字(特殊文字)を用いた表記に統一されている。表記が統一されているということは元の語形が推定できた、ということであろう。

だが、『アイヌ・モシリ』掲載分では「蝦夷国の歌」「蝦夷人の唄」および『もしほ草』の巻末叙事詩は原表記のまま掲載されている。元のアイヌ語形の推定が必ずしも容易ではなかったためであろう。『もしほ草』巻末の叙事詩は原文では全546行中、最初の51行分までしか訳が付されていない。そのためこれも元の語形が推定できなかった部分があったのであろう。難解な個所を山本多助らがどのように解釈したのか知りえないのはいささか残念ではある。

いずれにせよ、『アイヌ・モシリ』の編集方針からみても、この叙事詩は全体としてみれば、意味が通じるしっかりしたアイヌ語の文章と判断されたからこそ掲載されたものであ

¹ 山本多助・山本文利編 ([1958]1998 : 90-99) に掲載。

² 山本多助・山本文利編 ([1958]1998 : 84-89) に掲載。

ろう。さらにいえば、他の作品と異なり、内容が必ずしも完全には解釈できなくとも原表記のまま掲載するだけの価値があると判断されたということであろう。

金田一京助以来、現在までのアイヌ語研究者たち、そしてまた『アイヌ・モシリ』の読者たち、1972年以降のアイヌ語学習者たちも、分からない箇所もそれなりに考察しつつこの叙事詩を読んできたはずである。日本語訳がなされなかったのは、誰も読まなかったからではなくて、読んだうえで翻訳の困難さを実感したからであろう。

本稿の主眼は韻文形式、特に詩連と押韻の確認である。だが、やはり読んだうえでの作業であることに変わりはない。アイヌ語の母語話者である山本多助らさえ保留したというのに、ここで私の拙い読解の試みを公開するのは気がひけるが、詩連と押韻に関する判断の根拠を示すためには必要なことだと判断した。欲を言えば今後、より高度な知識を有した専門家によるしっかりした翻訳が公開されることを望みたい。

この叙事詩にタイトルは付されていない。多くのアイヌ口承文芸作品と同様に、もともとタイトルは存在しなかったと思われる。『アイヌ・モシリ』第4号（1958年6月刊）に掲載された際にも、タイトル代わりに「ユーガリ 浄瑠璃の事」という『もしほ草』内の項目名がそのまま日本語で付されていた。本稿では、主人公の出身地にもとづく呼び名 **Ruwesaniunkur** ルエサニウンクルをとって、仮にアイヌ語で「ルエサニウンクル・ユカラ」と呼び、その日本語訳として「ルエサニウンクル叙事詩」と呼んでおくことにする。

2. 詩連構成

本作品には丹菊（2018、2020）で現代の叙事詩について指摘した4行1詩連構造がみられる。「ルウェサニウクル叙事詩」全体は2～7行からなる詩連（文もしくは節）を単位として構成されている。全546行、詩連数は合計142である。2行詩連から7行詩連までの各種詩連の出現比率は以下である。

「ルウェサニウクル叙事詩」の各種詩連の数と割合

行数	詩連数	比率
1	0	0.00 %
2	7	4.93 %
3	47	33.10 %
4	59	41.55 %
5	20	14.08 %
6	8	5.63 %
7	1	0.70 %
合計	142 (546行)	99.99 %

4行詩連が最も多く、次いで多いのが3行詩連である。この2種だけで約75%を占める。平賀サタモによる20世紀の叙事詩作品（平賀[1959]1993）の場合は以下である。

平賀（[1959]1993）の各種詩連の数と割合

行数	詩連数	比率
1	2（結句「pakno」を含む）	0.6 %
2	47	15.1 %
3	87	28.0 %
4	104	33.4 %
5	48	15.4 %
6	16	5.1 %
7	6	1.9 %
合計	311連（1153行、57分）	99.5 %

全体の構成は現代とあまり変わらない。長さは平賀（[1959]1993）の半分程度だが、単一のエピソードとしてみれば、特別に短いというほどでもない（数千行にわたる叙事詩作品の場合は基本的に複数のエピソードで構成されている）。

3. アイヌ叙事詩の押韻構造

ここからは、丹菊（2018）で現代の叙事詩について提案し、丹菊（2020）で確認した押韻構造がみられるかどうか、4行詩連、5行詩連、3行詩連、2行詩連について確認していく。基本的には「各詩連内部で行頭・行末の母音が複数の行同士で一致する」というものである。村崎（1989:6、2001:9）による樺太方言文芸の押韻に関する指摘、Philippi（[1979]1982）による押韻に関する指摘が先行研究となる（丹菊 2020：10）。

「ルウェサニウクル叙事詩」の冒頭部には以下のような「詩連内部での行頭の母音、行末の子音の音の一致」がみられる。

001	タ子シ子ニ	T ane sinen ne	そのとき 1 人
002	ハテキヲカイ	p atek okay	だけで暮らしていた
003	子ータウエベケレカ	ne yta uwepeker ka	どこの話も
004	イラムシカレ	e ramuskare	知らずにいた
005	シヨイタ	S oyta	外へ
006	アシヌワ	asin w a	出て行って
007	スカル	nuka r	見た
008	ヲロタアナキ子	o ro ta anakne	すると
009	チヨリカイコタン	c(i)=orookay kot an	私の住む村の
010	ウシレプケタ	usi repke ta	湾の沖の方には
011	ワタラシ子フ	watara sine p	岩が 1 つ
012	ロシケワヲカイ	roski wa ok ay	立っていた

これらは「押韻」の可能性がある。しかし、アイヌ語の母音数は 5 つであり、こうした「詩連内部の行頭行末での母音の一致」の多くは偶然の産物であろう。現代の叙事詩の場合、行頭で偶然以上の母音の一致が見られ、行末でも行頭よりやや弱いものの同じ傾向がある。本稿では「ルウェサニウクル叙事詩」に同じ傾向がみられるかどうか検討する。

3-1. 4行詩連

3-1-1. 4行詩連における行頭・行末の母音韻の種類

丹菊（2020）で示した通り、4行詩連における行頭母音韻の種類は以下の5通りである。

- ① 「2行のみ」：4行中2行の行頭が同じ母音、残りの行頭母音がそれぞれ別の母音
- ② 「2行2組」：4行中2行の行頭が同じ母音、残りの行頭母音が別の母音で一致
- ③ 「3行のみ」：4行中3行で行頭が同じ母音
- ④ 「4行一致」：4行全ての行頭が同じ母音
- ⑤ 「4行全相違」：4行全ての行頭が違う母音

各母音が同じ確率で行頭に来るとき、これらの一致が偶然生じる可能性は以下である。

表1. 4行詩連の行頭で各種押韻が偶然生じる確率（各母音の出現比率が同じ場合）

押韻種別	確率 (%)
2行のみ	57.6
2行2組	9.6
3行のみ	12.8
4行一致	0.8
4行全相違（押韻なし）	19.2
合計	100

アイヌ語は5母音の言語であるため、並んだ4行において行頭・行末で母音が一致する確率は非常に高く、偶然に任せても8割を超える。したがって詩連内部における行頭の「押韻」の多くは自然に生じたものであろう³。しかし、それに加えて意図的に押韻がなされてもいるとすれば、比率は偶然によるよりその分だけ高くなるはずである。

³ 詩形式はしばしばその言語の特徴を活かす形で成立する。したがって「偶然生じることが多いから押韻ではない」と判断するのは早急であろう。偶然以上生じているか否かが重要である。

3-1-2. 母音の出現比率による影響

「ルウェサニウングル叙事詩」の4行詩連における行頭母音押韻の数と比率は以下である。

表2. 「ルウェサニウングル叙事詩」の4行詩連（59連）の行頭母音韻の数と比率

押韻種別	出現数	比率*	偶然生じる確率
2行のみ	31	52.54 %	57.6
2行2組	9	15.25 %	9.6
3行のみ	13	22.03 %	12.8
4行全一致	4	6.78 %	0.8
4行全相違（押韻なし）	2	3.39 %	19.2
合計	59	100 %	100

実際には、行頭での出現数が多い母音と少ない母音がある。現代の録音でも例えば母音 u は行頭での出現数が少ない（虚辞の u を除く）。「ルウェサニウングル叙事詩」における各母音の数と比率は以下のようになっている（原文でも虚辞は省略されているようである）。

表3. 「ルウェサニウングル叙事詩」全546行における母音出現率

母音	行頭	行末
a	231 (42.3%)	205 (37.5%)
e	46 (8.4%)	161 (29.5%)
i	155 (28.4%)	80 (14.7%)
o	66 (12.1%)	32 (5.9%)
u	48 (8.8%)	68 (12.5%)
合計	546 (100%)	546 (100.1%)

表4. 「ルウェサニウングル叙事詩」4行詩連（59連236行）における母音出現率

母音	行頭	行末
a	102 (43.2%)	86 (36.4%)
e	25 (10.6%)	59 (25.0%)
i	60 (25.4%)	43 (18.2%)
o	29 (12.3%)	14 (5.9%)
u	20 (8.5%)	34 (14.4%)
合計	236 (100.0%)	236 (99.9%)

つまり「ルウェサニウクル叙事詩」において行頭では母音 a が明らかに多く、40%以上を占める。これは平賀 ([1959]1993) など現代のアイヌ叙事詩と同じだが、やや強い傾向である。

表 5. 平賀 ([1959]1993) の 4 行詩連における行頭母音の出現数と比率

母音	行頭	行末	最後から二番目	参考：全母音
a	404 (35.0%)	323 (28.1%)	448 (38.9%)	1841 (33.0%)
e	221 (19.2%)	307 (26.7%)	155 (13.5%)	1099 (19.7%)
i	261 (22.7%)	167 (14.5%)	128 (11.1%)	864 (15.5%)
o	178 (15.5%)	199 (17.2%)	223 (19.4%)	982 (17.6%)
u	87 (7.6%)	155 (13.5%)	197 (17.1%)	799 (14.3%)
合計	1151 (100%)	1151 (100%)	1151 (100%)	5585 (100.1%)

(丹菊 2020 より)

表 6. 平賀 ([1959]1993) の 4 行詩連における行頭母音の出現数と比率

母音	行頭
a	136 (32.7%)
e	81 (19.5%)
i	102 (24.5%)
o	69 (16.6%)
u	28 (6.7%)
合計	546 (99.99%)

(丹菊 2020 より)

したがって「ルウェサニウクル叙事詩」では偶然「押韻」が生じる比率も少しばかり高くなるはずである。次節ではそれを考慮した数字を示す。

3-1-3. 母音の出現比率を考慮した場合

母音の出現比率を考慮した上での4行詩連における行頭押韻の出現率は以下である。

表7. 「ルウェサニウングル叙事詩」の4行詩連における行頭母音韻の出現率

押韻種別	出現数	比率*	期待される数	期待される比率 (母音種比率考慮)
2行のみ	31	52.5 %	28.7	48.6
2行2組	9	15.3 %	7.4	12.5
3行のみ	13	22.0 %	14.5	24.5
4行全一致	4	6.8 %	2.3	4.0
4行全相違(押韻なし)	2	3.4 %	6.1	10.4
合計	59.00	100.0 %	59.0	100.0

表8. 「ルウェサニウングル叙事詩」の4行詩連における行末母音韻の出現率

押韻種別	出現数	比率*	期待される数	期待される比率 (母音種比率考慮)
2行のみ	29	49.2 %	31.3	53.1
2行2組	8	13.6 %	7.2	12.2
3行のみ	13	22.0 %	11.8	20.1
4行全一致	1	1.70 %	1.4	2.3
4行全相違(押韻なし)	8	13.6 %	7.2	12.3
合計	59.00	100.1 %	58.9	100.0

平賀 ([1959]1993) では同一詩連内で同一語句が何度も出現する、「繰り返し語句」が用いられる傾向が強かった。行頭や行末で繰り返し語句が用いられれば、母音も一致する。だが、厳密に言えばそれらは「押韻」ではない。押韻というのは異なる語句で母音を一致させる技法である⁴。「ルウェサニウングル叙事詩」では同一語句の使用は少ない。一応、念のため次節で繰り返し語句を含む詩連を除外した数字を示す。

⁴ もちろん、同一語句による一致も母音のみの一致も効果は同じである。したがって、技法として区別されてはいない可能性が高い。ここではあくまで意識的に押韻しているか否かの客観的な確認のために区別する。

3-1-4. 同一語句による母音一致を除外した押韻出現比率

詩連内部で繰り返し語を用いる例は現代に比べて少なめだが、繰り返し語が行頭にある詩連が3、行末にある詩連が1ある。それらを除いた場合の行頭行末押韻の出現率は以下のようなになる。これが最終的に信頼できる数字ということになる。

表9. 「ルウェサニウクル叙事詩」の4行詩連における、繰り返し語句によらない行頭母音韻の出現率

押韻種別	出現数	比率	期待される数	期待される比率 (母音種比率考慮)
2行のみ	30	53.6 %	26.9	48.0 %
2行2組	8	14.3 %	7.0	12.5 %
3行のみ	12	21.4 %	14.1	25.2 %
4行全一致	4	7.1 %	2.4	4.2 %
4行全相違(押韻なし)	2	3.6 %	5.6	10.0 %
合計	56	100.0 %	56.0	99.9 %

表10. 「ルウェサニウクル叙事詩」の4行詩連における、繰り返し語句によらない行末母音韻の出現率

押韻種別	出現数	比率*	期待される数	期待される比率 (母音種比率考慮)
2行のみ	29	50.9 %	30.0	52.7 %
2行2組	6	10.5 %	7.0	12.2 %
3行のみ	13	22.8 %	11.7	20.5 %
4行全一致	1	1.8 %	1.4	2.5 %
4行全相違(押韻なし)	8	14.0 %	6.9	12.1 %
合計	57	100.0 %	57	100 %

行頭では偶然生じる押韻の比率 90.0%より多めの 96.4%が実際に押韻している。ある程度の作為が働いているであろう。何も無いところから 96%にするわけではないが、結果的に 96%の詩連が押韻されるのだから、ほぼ義務的とみなしてよい。

行末では偶然の比率 87.9%に対し実際の比率が 86.0%であり、むしろ下回っている。作為的な押韻はなされていないと思われる。

なお、4行詩連のうち、行頭押韻がみられないのは以下の2詩連のみである。

(16)

060	タンニフカシ。	<u>tannep kasi</u>	刀の上に
061	テツラレト。	<u>tekrarire(?)</u>	手をかけて(?)
062	ツ° カイシケ。	<u>tuykasike(?)</u>	そうしながら
063	イタコマレ。	<u>itakomare</u>	彼は言葉を発した

(57)

216	ユプケレチ。	<u>yupke réra</u>	強風に
217	アンコノイ。	<u>an=konoye</u>	もつれて
218	リコプイチャ。	<u>rikopuyca</u>	天窓
219	コヤ>アチム。	<u>koyayacimu(?)</u>	の前で息が止まり(?)

(16)は3行にわたって子音 t による行頭子音韻が踏まれており、(57)では子音 k の繰り返しが含まれている。これは Philippi ([1979]1982: 29) で指摘されている「散発的な韻」であり、それがあつたために行頭・行末韻が不要になっているのではないと思われる。平賀 ([1959]1993) でも類似の現象が見られる (丹菊 2020: 74-75)。

3-1-5. 最後から2番目の母音の一致率

4行詩連において行末ではなく最後から2番目の母音に押韻があるか確認する。現代の叙事詩の歌い方では、各行とも最後の2音節がほぼ同じリズムになるため「最後から2番目の母音」を一致させる技法がありうる (ただし、現代では確認できていない)。実際には「ルウェサニウクル叙事詩」でも「最後から2番目の母音」に偶然以上の一致はみられない。

表 11. 「ルウェサニウクル叙事詩」の4行詩連における行末から2番目の母音の一致率

押韻種別	出現数	比率*	期待される数	期待される比率 (母音種比率考慮)
2行のみ	33	55.9 %	31.5	53.4
2行2組	6	10.2 %	6.5	11.0
3行のみ	10	16.9 %	11.3	19.2
4行全一致	1	1.7 %	1.4	2.3
4行全相違(押韻なし)	9	15.3 %	8.3	14.1
合計	59	100.0 %	58.9	100.0

3-2. 3行詩連における行頭・行末の母音韻

行頭に繰り返し語句のない3行詩連は46ある。これらでは作爲的な押韻はしていないようである。

表 12. 「ルウェサニウクル叙事詩」の3行詩連における、繰り返し語句によらない行頭母音韻の出現率

押韻種別	出現数	比率	期待される数	期待される比率 (母音種比率考慮)
2行のみ	24	52.2	26.0	56.5
3行全一致	4	8.7	5.8	12.7
3行全相違(押韻なし)	18	39.1	14.1	30.8
合計	46	100.0	46.0	100.0

表 13. 「ルウェサニウクル叙事詩」の3行詩連における、繰り返し語句によらない行末母音韻の出現率

押韻種別	出現数	比率*	期待される数	期待される比率 (母音種比率考慮)
2行のみ	25	54.3	25.8	56.2
3行全一致	4	8.7	4.4	9.6
3行全相違(押韻なし)	17	37.0	15.8	34.3
合計	46	100.0	46.0	100.1

なお、平賀 ([1959]1993) では3行詩連においても行頭母音の出現比率は偶然よりやや高くなっているが、4行詩連ほどではない(丹菊 2020: 76)。なぜ4行詩連と3行詩連の間にこのような差異があるのか今のところうまく説明できない。ひょっとすると3行詩連は4行詩連の間の「つなぎ」として作られたものであって、押韻しないいわば「地の文」なのかもしれない。

3-3. 5行詩連における行頭・行末の母音韻

5行詩連は20例と数が少ない。行頭で繰り返し語句がないものは17例、行末で繰り返し語句がないものは18例しかない。いちおう押韻の出現比率を確認しておく。

表 14. 行頭に繰り返し語句がない5行詩全17例において、行頭押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（実際の母音比率による修正後）

押韻種別	実際の出現数と比率	偶然生じる確率
2行のみ	1 (5.9%)	2.9 (17.3%)
2行2組	5 (29.4%)	4.6 (26.9%)
3行のみ	5 (29.4%)	4.3 (25.2%)
3行と2行	2 (11.8%)	2.9 (16.9%)
4行のみ	4 (23.5%)	2.0 (11.5%)
5行全一致	0 (0%)	0.2 (1.3%)
5行全相違（押韻なし）	0 (0%)	0.1 (0.8%)
	17 (100.0%)	17.0 (99.9%)

表 15. 行末に繰り返し語句がない5行詩連全18例において、行末押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（実際の母音比率による修正後）

押韻種別	実際の出現数と比率	偶然生じる確率
2行のみ	3 (16.7%)	3.0 (16.5%)
2行2組	5 (27.8%)	4.3 (23.6%)
3行のみ	5 (27.8%)	4.6 (25.5%)
3行と2行	5 (27.8%)	3.1 (17.4%)
4行のみ	0 (0.0%)	2.5 (14.1%)
5行全一致	0 (0.0%)	0.4 (2.0%)
5行全相違（押韻なし）	0 (0.0%)	0.2 (0.9%)
	18 (100.1%)	18.1 (100.0%)

母数が少ないので確実なことは言いにくいだが、行頭では4行の母音が一致している詩連が4あるのに対し、行末でそのような例はない。偶然生じる比率は2なので、作為的である可能性はあるだろう。平賀（[1959]1993）においても4行で一致する詩連が偶然よりやや高くなっているのと同じ傾向である（丹菊2020：79）。

3-4. 6行詩連・7行詩連における行頭・行末の母音韻

6行詩連は8例あるが、うち半数には4行以上の母音の一致が見られる。これは作為的な押韻であろう。7行詩連は1例のみである。以下に9例全てを押韻数とともに示す。

(1) 第31詩連 (行頭に3行・2行、行末に3行・2行の押韻)

114	シヤンプツング。	Sanputunkur	サンプトウンクルの
115	シ子ツレシ子。	sine tures ne	たった1人の
116	クラツレシ。	kor a tures	妹が
117	トモチヌカル。	tomoci nukar	巫術を
118	イキエカラカ。	i=ekaraka(r)	した
119	キワ子ヤキ子。	ki wa ne yakne	そうしたら

(2) 第37詩連 (行頭に2行・3行、行末に4行の押韻)

137	イコロコタン。	i=kor kotan	彼の村
138	カムイジンキ。	kamuy cinkew(?)	神なる先祖(?)の
139	アナルゲセ。	anrukese	その後を
140	コライブン。	koraypun(?)	与えるのも(?)
141	イヤイヌケシテ。	iyaynukeste	できなくなる(?)』
142	キワ子ヤツキ子。	ki wa ne yakne	そうしたら

(3) 第39詩連 (行頭に3行・2行、行末に3行・3行の押韻)

148	カムイツ°ミ。	kamuy tumi	『神の戦争が
149	イコアナツカ。	i=koanacka	私に起こったとしても
150	ハシヨロミチヤシ。	pas or mina=as	笑って
151	チシキゲチユ。	cisikikeciw(?)	目で刺す(?)
152	セムコラチ。	semkoraci	かのように
153	イエガラワ子ヤ。	i=ekar wa neya	であろうし、この

(4) 第 70 詩連 (行頭に 4 行、行末に 3 行・2 行の押韻。繰り返し語句あり)

263	ツ° ミアニ。	tumi ani	戦争で
264	チラメイラト。	cirameirara	私を馬鹿にした (?)
265	イエガラカ。	i=ekarka(r)	ことをした
266	キイロキケ。	ki rok ike	そうしたものだから
267	チアンノツ° イ。	sianno tuye	本当に切って
268	ア子ガラカ。	an=ekarka(r)	しまった

(5) 第 102 詩連 (行頭に 2 行・2 行、行末に 2 行・2 行の押韻)

390	イタカンテツ。	itak=an tek	私がそういうと
391	ムテムシ。	mut emus	彼は刀の
392	シヤンニツチカン。	san nici kan	先に出る柄も
393	ヲテツキライ。	otekkiray-	指の櫛で
394	シアリキボ。	-sirikipo(?)	自分の脇の下の (?)
395	コダメタイ。	-kotametaye	刀を抜き

(6) 第 123 詩連 (行頭に 2 行・2 行、行末に 3 行・2 行の押韻。繰り返し語句あり)

472	タトランバ。	tata ranpa(ra)	切ったヤナギを (?)
473	アカイアンコロカ。	a=kaye aan kork a	私は折ったのだが
474	子一子ガイキ。	ne ene kayki	どこでも
475	子バシコルゲセ。	nep askor kese	どんな酒の残りも (?)
476	チアラギシデツカ。	ciarkistekka	美しくて (?)
477	ヲカイアナイ子。	okay=an ayn e	暮らしていたがやがて

(7) 第 125 詩連 (行頭に 4 行、行末に 5 行の押韻。繰り返し語句あり)

482	カーニポーレフン。	kani pore(?) hum	金属のような音 (?)
483	シツラレ。	siturare	とともに
484	アバコバケ。	apa kopake	戸口の方に
485	ヤイツ° イバレ。	yaytuypare	進んでくる
486	アウコバケ。	aw kopake	屋内の方に
487	ヲシライ。	osiraye	行った

(8) 第 136 詩連 (行頭に 5 行、行末に 4 行の押韻。繰り返し語句あり)

517	タ子アナキ子。	tane anakne	「今こそは
518	アツ° イバイ子。	atuy pa (h)ene	海の上手と
519	アツイゲセ子。	atuy kes (h)ene	海の下手と
520	アンコヤイトバレ。	an=koyaytupare-	私は心配する
521	イシヤムグ <u>ホツ</u> 。	-isam-kohok	ことなく交易する
522	アンラムクシユ。	an=ramu kusu	私はそう思ったので

アイヌ語は 5 母音しかないので、6 行詩連では最低 1 組は同じ母音の行が生じる。したがって (5) のように「行頭に 2 行・2 行、行末に 2 行・2 行の押韻」という詩連は押韻しているとは言い難い。少なくとも作為的ではないであろう。だが、(2) (4) (7) (8) など 4 行あるいは 5 行で母音が一致しているものは、偶然にしては例が多過ぎよう。

(9) 第 97 詩連 (7 行詩連。行頭に 4 行・2 行、行末に 3 行・3 行の押韻)

367	ルウエシヤニウングル。	Ruwesani un kur	ルウエサニ村の人は
368	ツ° ムグルカムイ。	tumkor kamuy	強い神が
369	ツ° ミアニ。	tumi ani	戦いをもって
370	アツタムシユイ。	attamsuye	刀をふるうのも
371	イシラボツカリーレ。	isirapokkarire	彼らには劣る
372	ンベㇿケリ。	npepeker	との噂が
373	アスワクシユ。	as wa kusu	たったので

第 372 行の「ンベㇿケリ」の「ン」は音韻としてはおそらく「u」であろう。そうすると行頭には 4 行と 2 行の 2 組の押韻があることになる。これらも作為的であろう。

3-5. 2行詩連における行頭・行末の母音韻

2行詩連は7例である。いずれも繰り返し語句を含んでいない。2行詩連では行頭母音韻は「2行一致（押韻している）か、2行不一致（押韻していない）か」の2通りしかない。行頭で押韻している詩連が2、行末で押韻している詩連が1、押韻がみられない詩連が4である。これも数が少ないが一応確認しておく。

表 16. 2行詩連（7例）で行頭に押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（母音の比率を加味して修正）

押韻種別	実際の出現数・比率	押韻が偶然生じる確率
2行一致	2 (28.6%)	2.5 (35.7%)
2行不一致	5 (71.4%)	4.5 (64.3%)
合計	7 (100.0%)	7.0 (100.0%)

表 17. 2行詩連（7例）で行末に押韻が偶然生じる確率と実際の出現数・比率（母音の比率を加味して修正）

押韻種別	実際の出現数・比率	押韻が偶然生じる確率
2行一致	1 (14.3%)	3 (42.9%)
2行不一致	6 (85.7%)	4 (57.1%)
合計	7 (100.0%)	(100.0%)

行頭においては偶然生じる比率とほぼ一致する。押韻の作為はみられない。行末においては偶然の比率を下回る。たった7例の2行詩連では、作為的な押韻は確認できないかもしれない。

なお、第133詩連（第510-511行）、第134詩連（第512-513行）は tuykasike「そうしながら」の用法から2つの2行詩連と推定したが、語形からすると1つの4行詩連かもしれない。

(133)	510	ヒリカイ <u>メツ</u> 。	pirka imek	良い分け前
	511	イコボンバ。	i=kopunpa	私に配膳した
(134)	512	ツイガシケ。	tuykasike	そうしながら
	513	イタコマレ。	itakomare	(彼女は) 語った

4. 不完全韻

現代のアイヌの叙事詩では、「行と行の間で複数の音の並びが何となく似ている」という現象がみられる。丹菊（2020）では「不完全韻」と呼んでいる。同じ現象が「ルウェサニウシクル叙事詩」でもみられる。これらのどこまでが作為的なものかわからないが、少なくとも一部は作為的であろう。全 142 詩連中 111 詩連（78.2%）にみられる。

4-1. 行頭で複数の母音が一致

003 子ータウエベケレカ。 neyta uwepeker ka どこの話も
004 イラムシカレ。 eramuskare 知らずにいた

	行頭母音韻	母音	母音	×	母音		
003	ney	ta	u	we	pe	ker	ka
004	e	ra	mus	ka	re		

4-2. 行末で複数の母音が一致

224 タシヤタメキレ。 tasa tamekire 彼は応戦して刀をふるい（？）
225 ヌイラヨチ子。 nuy rayoci ne それは炎の虹のように

			母音	×	母音	行末母音韻
224	ta	sa	ta	me	ki	re
226		nuy	ra	yo	ci	ne

なお、ta と ra は母音 a が一致するだけでなく、子音 t と子音 r も調音点が舌先だという共通性がある。おそらく、ki と ci、re と ne においても、子音同士の調音位置の共通性が念頭に置かれているのであろう。

4-3. 行頭と行末で複数の母音が一致

251 キロㇿブデ子。 kiroroptene(?) 全力で（？）
252 アシヲトㇿ。 a=siwototo 並べて置いた（？）

		母音	母音	母音	子音		
003		ki	ro	rop	te	ne	ka
004	a	si	wo	to	to		

4-4. 複数の子音による一致

- 211 ヲマイシヨカタ。 omay so ka ta 席にいた
 212 カモイ子アング。 kamuy ne an ku(r) 神なる人の

		子音・子音	母音	母音	
211	o	may	so	ka	ta
212	ka	muy	ne	an	kur

- 089 チコアシユルクル。 cikoasurkor 知らされていた
 090 アイガラカフ。 an=eikarkar 私は聞かされていた

				子音	子音・子音
089	ci	ko	a	sur	kor
090	a	ne	i	kar	kar

4-5. 間に他の行が挟まる

- 452 リコシマクリ。 rikosmakur 飛び上がった影に
 453 ア子タンカリレ。 an=etankarire 刀を回して
 454 ア子タメムコ。 an=etamemko- 刀の半分
 455 セプコシヤヌ。 -sepkosanu ぱたりと音がして

	前舌	子音・母音	母音	行末母音韻
452	ri	kos	ma	kur
455	sep	ko	sa	nu

この例ではさらに、ri と sep の母音 i と母音 e も前舌母音という共通性がある。

4-6. 複数の母音の素性が一致

同じ母音でなくとも、母音 u と o、母音 e と i のように前舌・後舌が一致する場合がある。これも作弄的な一致である可能性がある。

- 214 アンタメツ° イ。 an=tametuye を搔っ切った
 215 シロシマモイレ。 sirosma moyre 倒れて静かになった (?)

			子音	後舌性	母音
214	an	ta	me	tu	ye
215	si	ros	ma	moy	re

- 525 アンツ° レシ。 an=turesi 私の妹を
 526 アノライナ。 an=oraye na 私は押しやるのである

	行頭母音韻	舌先子音・ 後舌母音	子音	前舌性	
525	an	tu	re	si	
526	an	o	ra	ye	na

4-7. 対応する部分の長さが異なる例

- 443 モナツガン子。 monak kanne 目を覚まし
 444 イガツロツペ。 ikasi rok pe 上に座り (?)
 445 チャツシヤヲツカレ。 cassaotkare 逃げ出した

		母音	母音	母音	子音 母音	母音
443				mo	nakkan	ne
444	i	ka	si	ro-	-k	pe
445		cas	si	ot	ka	re

上記は歌うタイミングを表したものではなく、概念的に 443 monak kanne の母音「o-a-a-e」と 445 の後半部-otkare の母音「o-a-e」がどちらも「o-a-e」という母音の順であること、その 2 行に挟まれた 444 の後半部-rokpe が「o-e」という類似した母音配列になっていること、を表したものである。また、443 の monak と 444 の rok も類似している。

- 326 ヲシマガワ。 osi maka wa 後ろに (後から入って?)
 327 ロシケアンベ。 roski an pe 立っているもの
 328 アンコシツキライ。 an=kosikkiray(?) 私は横目で見た (?)

		母音	子音 母音	母音	
326		o	si	makawa	
327		ro-	ski	an	pe
328	an	ko	sikki	ray	

先の例と同じく母音の順が同じである。また、327 の-ski と 328 の-sikki も類似しているとみなしてよいであろう。

4-8. 3つ以上の行が少しずつ類似している例

461	チツ° イバケウエ。	ci=tuypa kewe	私が切った死体を
462	アヌコアンバ。	an=ukoanpa	私は共に持って
463	ソイコバケ。	soy kopake	外の方へ
464	アノシライ。	an=osiraye	私は行った。

	行頭母音韻	u,o/y,i	子音・母音	母音	母音
461	ci	tuy		pa	kewe
462	a	nu	ko	an	pa
463		soy	ko	pa	ke
464	a	nosi		ra	ye

全体として行と行の音が「似ている」状態になっている。なお、上記も歌うタイミングを表したのではない。音の順とその類似を表したものである。

5. 「散発的な韻」

Philippi (1979: 29) はアイヌ韻文において頭韻 (alliteration) が「散発的」(sporadically) にみられ、しかも意識的なものである、と指摘している。彼が指摘したのは以下のような例である (以下の例は Philippi 1979: 29 から、英訳・太字も引用元のままである)。

husko as ras The long standing posts---
 ras emaknakur- the posts stood bending
 -roski kane up backward;
 asir as ras and the newly standing posts---
 ras esanakur- the posts stood bending
 -roski kane up forward.

6 行詩連において 4 行で行頭子音韻が踏まれている。確かにこのようなものが偶然で生じるとは思えない。同じく偶然と思えない例が「ルウェサニウクル叙事詩」にもみられる。

5-1. 行頭・行末における子音韻

(33)

123	カシシヨイキ。	kasi si(?) oyki	私が助太刀 (?)
124	ア子イカラカ。	an=eikaraka(r)	する
125	キクンベ子グシ。	ki kun pe ne kus	であろうがゆえ

(40)

154	モシリゲセシユ。	mosir kesesiw	国の端まで
155	カモイシンジツ。	kamuy sinrici	神の先祖 (の血筋を?)
156	コシヒラシヤク。	kosipirasare	広がらせしめも
157	キワ子ヤキ子。	ki wa ne yakne	したならば

(71)

269	クホロワノ。	tap orowano	これから
270	イ子イ子カ。	enene ka	このように
271	子フチシヤシユルカ。	nep cis=as korka	何を泣いたところで
272	チアラキンテツカ。	ciarkintekka	美しい (?)
273	イキコロカイキ。	iki korokayki	としても

5-2. 同じ音の多用

(1 3 1)

502	アノイベシユ。	an=oype su	私たちの鍋
503	ツ° ヘイチクベ。	tupe ikikpe(?)	結んだ (?)
504	カラバレホ。	karpape po	そうしておいた
505	ヲツペツ° イガ。	uwokpe tuyka	結び目 (?) の上に
506	イシユバカ。	isupa(?) ka	煮もして

(1 1 1)

424	マクアアシヤツ。	mak aahak(?)	深い奥から (?)
425	キイタカゼ。	ki itak katu(?)	言ったこと
426	ヤイガン子。	yaykanne(?)	のように思われた。

5-3. 繰り返し語句・対句

現代より頻度は少ないが、現代同様に繰り返し語句や対句を用いた表現がみられる。

518	アツ° イバイ子。	atuy pa (h)ene	海の上手と
519	アツイゲセ子。	atuy kes (h)ene	海の下手と
484	アバコバケ。	apa kopake	戸口の方に
485	ヤイツ° イバレ。	yaytuypare	進んでくる
486	アウコバケ。	aw kopake	屋内の方に

aynu と kamuy は同じ母音配列 (a-u) で意味的な対比 (人間と神) を含むため、現代では多用されるが、やはりここでもみられる。

(2 0)

077	アイヌツ° ミ。	aynu tumi	人間の戦争は
078	ア子ヌㇿカ。	an=enunuka(?)	私は十分にやったから (?)
079	カムイツ° ミ。	kamuy tumi	神の戦争を
080	ア子タンギガ。	an=etankika(?)	私はともにしようとして
	(?)		

5-4. 交差配列

行の配列に交差配列がみられる。

(1 1 7)

447	ハンイツ° イマ。	<u>han</u> ituyma	遠くないところで
448	アニコヌ <u>ヤツ</u> 。	<u>an=ikonu</u> yak	聞いてみると
449	セテツカヨ子。	setek kay onne	起き上がることも (?)
450	アニヨグニ。	<u>an=iyokuni</u> (?)	私は入れることも (?)
451	アヤイノイケシテ。	<u>a=yaynuykeste</u>	私は出来なくて

ここでは 447 han ituyma と 451 a=yaynukeste、448 an=ikonu yak と 450 an=iyokuni(?) がそれぞれ不完全韻をなす、ABCBA という交差配列になっている。交差配列はアイヌ口承文芸の広範に用いられる技法のようである。大喜多 (2012) はアイヌ語の文章構成について指摘しており、丹菊 (2018) では押韻構成について指摘している。

5-5. 韻文特有の関係節表現

363	バイウシヤアツ° イ。	paye usa atuy	いくつもの海 (?)
364	アツイラボキ。	atuy rapoki	海の手を

これは押韻ではないが、韻文でのみ用いられ、口語ではみられない表現である。この例では、口語ならば paye usa atuy rapoki 「いくつもの海の手」ですむが、韻文では paye usa atuy atuy rapoki 「いくつもの海 海の手」というように名詞を繰り返す。これらは金田一 (1908)、田村 (1987) などで韻文の特徴として指摘されている。

6. おわりに

以上、1792年成立といわれる「ルウェサニウクル叙事詩」の詩連構造と押韻を検討した。基本的には現代の例えば平賀サタモによる叙事詩（平賀[1959]1993）などと共通する4行1連構造と行頭韻・不完全韻による韻文形式である。18世紀末の作品ながら行末韻の欠如を除けば20世紀中葉の叙事詩と驚くほど共通性が高い。アイヌ押韻文が150年以上にわたり安定した構造を保っていたことがわかる。

平賀サタモらがやや弱いながらも用いている行末韻（脚韻）はみられないようであるが、今後、他の叙事詩作品の詩形式を子細に検討していくうちに、それが個人差（あるいは作品差）なのか、あるいは地域・時代によるものかある程度分かってくることを期待したい。

引用文献

- 浅井亨 (1972) 「加賀屋文書の中のチャコルベ」『北方文化研究 6』 北海道大学
- 上原熊次郎 (1804) 『もしほ草』 (1792 年成立といわれる) (金田一京助解説・成田修一撰
1972 『アイヌ語資料叢書 藻汐草』 国書刊行会 を用いた)
- 大田南畝 (1779~a) 「蝦夷人唄」『一話一言 卷三十三』 (『日本随筆大成 別巻 5』 吉川弘
文館 1978 を用いた)
- 大田南畝 (1799~b) 「蝦夷国の歌」『一話一言 卷六』 (『日本随筆大成 別巻 1』 吉川弘文
館 1978 を用いた)
- 大喜多紀明 (2012) 「『アイヌ神謡集』に掲載されたカムイユカラについての考察 修辭論的
視点より」『人間生活文化研究 22』 大妻女子大学人間生活文化研究所
- 奥田統己編 (1999) 『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集』 (CD-ROM つき) 札幌学院大学
- 萱野茂 (2002) 『萱野茂のアイヌ語辞典 [増補版]』 三省堂
- 金成マツ著・金田一京助訳注 (1961) 『ユーカラ集 2』 三省堂
- 金成マツ著・金田一京助訳注 (1964) 『ユーカラ集 4』 三省堂
- 金成マツ著・金田一京助訳注 (1965) 『ユーカラ集 5』 三省堂
- 金田一京助 (1908) 「アイヌの文学」『中央公論』 1・2・3 月、23-1-2-3 (『金田一京助全
集 第 7 巻 アイヌ文学 I』 三省堂 1992)
- 久保寺逸彦 (1977) 『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』 岩波書店
- 久保寺逸彦 (2021) 『久保寺逸彦著作集 4 アイヌ語・日本語辞典稿』 草風館 (遺稿となっ
た辞書稿をそのままのレイアウトで刊行)
- 佐々木利和・鈴木建治・谷本晃久編著 (2013) 『にかほ市象潟郷土資料館所蔵 森家旧蔵「蝦
夷方言藻汐草 全」 翻刻・改題』 北海道大学アイヌ・先住民研究センター報告書
- 佐藤知己 (1990) 「武四郎のアイヌ語学 嘉永三年「蝦夷語」について」松浦武四郎研究会
編『北への視角』 北海道出版企画センター
- 佐藤知己 (1995) 『「蝦夷言いろは引」の研究 解説と索引』 北海道大学文学部言語学研究室
- 佐藤知己 (2007) 「『藻汐草』の「一冊本」について」『北海道大学文学研究科紀要 121』 北
海道大学
- 佐藤知己 (2009) 「18 世紀前半のいくつかのアイヌ語資料について」『北海道大学文学研究
科紀要 127』
- 田中聖子・佐々木利和 1985 「近世アイヌ語資料について とくに『もしほ草』をめぐっ
て」『松前藩と松前』 24 (佐々木利和『アイヌ史の時代へ 余瀝抄』 北海道大学
出版会 2013)
- 田村すゞ子 (1987) 『アイヌ語音声資料 4 福満・鶴川の歌謡』 早稲田大学語学教育研究所
- 田村すゞ子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館
- 丹菊逸治 (2018) 『アイヌ叙景詩鑑賞』 北海道大学アイヌ・先住民研究センター報告書

- 丹菊逸治 (2020) 『アイヌ韻文の行頭韻』北海道大学アイヌ・先住民研究センター報告書
- 知里真志保 (1953a) 『分類アイヌ語辞典 第1巻 植物篇』日本常民文化研究所 (1976『知里真志保著作集 別巻1』平凡社 所収を用いた)
- 知里真志保 (1953b) 『分類アイヌ語辞典 第2巻 動物篇』日本常民文化研究所 (1976『知里真志保著作集 別巻1』平凡社 所収を用いた)
- 知里真志保 (1954) 『分類アイヌ語辞典 第3巻 人間篇』日本常民文化研究所 (1975『知里真志保著作集 別巻2』平凡社 所収を用いた)
- 知里真志保 (1956) 『地名アイヌ語小辞典』楡書房 (1984 北海道出版企画センターによる復刻版を用いた)
- 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館
- バチラー、ジョン (1938) 『アイヌ・英・和辞典 第四版』岩波書店 (Batchlor, John, 1938, *An Ainu-English-Japanese Dictionary 4th edition, Tokyo*)
- 服部四郎編 (1964) 『アイヌ語方言辞典』岩波書店
- 平賀サタモ ([1959]1993) 「村焼き国焼き2」田村すゞ子『アイヌ語音声資料8』早稲田大学語学教育研究所 (口演・録音は1959年、文字化されたテキストと録音が1993年に刊行されている)
- 深澤美香 (2017) 『加賀家文書におけるアイヌ語の文献学的研究』千葉大学大学院人文社会科学部科学研究科博士後期課程2016年度博士論文 (インターネット公開)
- 村崎恭子 (1976) 『カラフトアイヌ語 資料篇』国書刊行会
- 村崎恭子 (1989) 『樺太アイヌ語口承資料1』昭和63年度科学研究費補助金(一般研究(C))研究成果報告書「樺太アイヌ語の記述的研究」(課題番号62510266)
- 村崎恭子 (2001) 『樺太アイヌの昔話』草風館
- 山本多助・山本文利編 ([1958]1998) 『アイヌ・モシリ』第4号(復刻版 釧路アイヌ文化懇話会1998『アイヌ・モシリ [幻のアイヌ語誌復刊]』を用いた)
- Philippi, Donald L, [1979]1982, *Songs of Gods, Songs of Humans: The Epic Tradition of the Ainu*, Princeton University Press

資料：「ルウェサニウクル叙事詩」

資料について

上原熊次郎による『もしほ草』（上原 1804）の巻末に「ユーガリ 浄瑠璃の事」として収録されているアイヌ語叙事詩である。語り手は不明である。『もしほ草』は 1792 年成立と考えられている（田中聖子・佐々木利和 1985）。「ルウェサニウクル叙事詩」というタイトルは丹菊が付したものである。

基本的に金田一・成田（1972）を用いたが、函館市中央図書館デジタル資料館「蝦夷方言藻汐草」「蝦夷方言藻汐草 下」（URL <http://archives.c.fun.ac.jp/>）も適宜活用した。また、秋田県にかほ市象潟郷土資料館所蔵版（佐々木・鈴木・谷本 2013）を用いた）に異同がある場合は注記した。

凡例

（1）番号（丹菊による）、原文カナ、アイヌ語推定形（ローマ字表記、丹菊による）、丹暫定訳（丹菊による）の順で示した。各行末には「。」が付されているが、脱落している場合には詩連後の（※）にその旨付記した。原文カナ表記の下線部は原文のまま、CVC 音節であることをオプショナルに表す（「マツ」は *matu* でなく *mat* もしくは *mak*）。

（2）各詩連の後に（ ）内、もしくは（※）内に示したものは丹菊による注記である。

（3）詩連ごとに 1 行空けてある。これは原資料にはない。

（4）ローマ字に付した下線は詩連内部にある「不完全韻」の部分である。ただし、2 組以上の不完全韻がある場合も下線を種類分けしてはいない。

（5）ローマ字の太字部分は行頭行末韻でも不完全韻でもない、特殊な押韻の部分である。

注釈内では以下のように示した文献がある（それ以外の文献は本文文献と同じ）。それらの文献名の後に「:」を置かずページ数を数字のみで示した。例えば「中川辞書 50」は「中川（1995: 50）」のことである。文献名を示さずに置いた 3 桁の数字は行番号である。例えば「070 を参照」は「第 070 行を参照」のことである。

にかほ本：佐々木利和・鈴木建治・谷本晃久編著（2013）『にかほ市象潟郷土資料館所蔵 森家旧蔵「蝦夷方言藻汐草 全」翻刻・改題』北海道大学アイヌ・先住未研究センター報告書

中川辞書：中川裕（1995）『アイヌ語千歳方言辞典』（草風館）

田村辞書：田村すゞ子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』（草風館）

久保寺辞書稿：久保寺逸彦（2020）『久保寺逸彦著作集 4 アイヌ語・日本語辞典稿』（草風館）

バチラー辞書：バチラー、ジョン（1938）『アイヌ・英・和辞典 第四版』岩波書店 (Batchlor, John, 1938, *An Ainu-English-Japanese Dictionary* 4th edition, Tokyo)

萱野辞書：萱野茂（2002）『萱野茂のアイヌ語辞典 [増補版]』三省堂

方言辞典：服部四郎編（1964）『アイヌ語方言辞典』岩波書店

奥田語彙集：奥田統己編（1999）『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集』（CD-ROM つき）札幌学院大学

知里辞典植物篇：知里真志保（1953）『分類アイヌ語辞典 第 1 巻 植物篇』日本常民文化研究所（1976『知里真志保著作集 別巻 1』平凡社 所収を用いた）

知里辞典動物篇：知里真志保（1953）『分類アイヌ語辞典 第 2 巻 動物篇』日本常民文化研究所（1976『知里真志保著作集 別巻 1』平凡社 所収を用いた）

知里辞典人間篇：知里真志保（1954）『分類アイヌ語辞典 第 3 巻 人間篇』日本常民文化研究所（1975『知里真志保著作集 別巻 2』平凡社 所収を用いた）

地名小辞典：知里真志保（1956）『地名アイヌ語小辞典』楡書房（1984 北海道出版企画センターによる復刻版を用いた。1973『知里真志保著作集 3』平凡社 でのページも示した

原文カナ表記についての注記

概略

ハ行は h/p/w の3つの可能性がある。ラ行は r だけもしくは r+母音。「シ」は si もしくは音節末 s。「ツ」は tu もしくは音節末 t。「ム」は mu もしくは音節末 m。チャは ca。チュは cu もしくは ciw。チョは co。フは音節末 p もしくは hu、pu、まれに po。

(1) 母音 e と母音 i の混同

① e (エ段カナ) が期待されるのに i (イ段カナ) で表記されている例が少数ある。
eramuskari イラムシカレ、roski wa okay ロシケワヲカイ、newsar siri ne 子ウシヤラシリニ

② i (イ段カナ) が期待されるのに e (エ段カナ) で表記されている例が少数ある。
eramuskari イラムシカレ

③ ye (イエ) が期待されるのに、i (イ) で表記されている例がほとんどである。
cikoyayeyamu(?) チコヤイヤム、a=kotamsuye アコタムシユイ

(2) 母音 u (ウ段カナ) が期待されるのに o (オ段カナ) で表記されている例が少数ある。
kamuy kuri anak カモイグリアナツ

(3) 音節末子音

音節末 s→シ (si と表記の区別なし) eramuskari イラムシカレ、us repke ta ウシレプケタ

音節末 m→ム (mu と表記の区別なし) isam no po イシヤムノボ

音節末 t→ツ (tu と区別するため、しばしば前のカナから下線が引かれるが必ずではない)
nosit humi an シノツフミアン、matkosam(?) マツコシヤム

音節末 r→①ル、②ラ、③レ (ru, ra, re と表記の区別なし)

①nukar ヌカル、②casi kanpar チヤシカンバラ、kouekarpa コウエカラバ、③kamuy utar カモイウタレ

音節末 k→①キ、②ツ (ki, tu と区別するため、しばしば前のカナから下線が引かれるが必ずではない)、③ツキ

①patek ハテキ、anakne アナキネ、②kamuy kuri anak カモイグリアナツ、i=sikasma yak イシカシマヤツ、③osma yakne ヲシマヤツキ子

音節末 p→①プ、②フ、(いずれも pu, hu と区別するため、しばしば前のカナから下線が引かれるが必ずではない)

①ar sine p ne アロシ子プニ、us repke ta ウシレプケタ

②iwa tapkasi イワタフカシ、watara sinep ワタラシネフ

音節頭 p→①ハ行カナ、②パ行カナ、③バ行カナ

①riko puyca ta リコフイチャタ、②tumi atpake ツ° ニアツパケ、③neyta uwepeker ka 子ータウエベケレカ

子音 w→①ワ行カナ、②ハ行カナ、①orowa kayki ヲロワカイキ、②orowa arki、ヲロハアラキ

(4) 特殊なカナ表記

(1) 引き棒(「ー」)で、①母音直後の半子音要素、②高アクセント母音を表す。

①neyta uwepekere ka 子ータウエベケレカ、②cokay kasi チョーカイチャシ

(2) ガ行・ダ行カナでおそらく子音 t, k, の有声化を表している。

maknatara マツナダラ、tam osma hum ka タモシマフンガ

(3) tu には「ツ°」「ツ」が、まれに「ト°」「ト」が用いられる。

an=tametuye アンタメツ° イ、an=kotuye アヌコツイ、ci=tuye kemnuka チト° イゲヌカ。

an=koyaytupare-isam-kohok アンコヤイトバレイシヤムグホツ、an=etametukka ア子タメドツカ。

(4) 「シ+ヤ行」で「口蓋化した s+母音」を表記(同じ語でも s が口蓋化していなければサ行で表記されていると思われる)。

soyta シヨイタ cf. soy kopake ソイコバケ

(5) 「チ+ヤ行」で「子音 c+母音」を表記。cokay casi チョーカイチャシ

(6) 下線を引き CVC 音節であることをオプショナルに表す。(3) を読まれたい。

行番号	原文カナ	丹菊による推定語形	丹菊による試訳	原文「傍訳」
(1)				
001	タ子シ子ニ	Tane sinen ne	そのとき 1 人	此 独
002	ハテキヲカイ。	patek okay	だけで暮らしていた	而已 居
003	子ータウエベケレカ。	<u>neyta uwepeker ka</u>	どこの話も	何 説
004	イラムシカレ。	<u>eramuskare</u>	知らずにいた	不 知
(2)				
005	シヨイタ。	Soyta	外へ	外
006	アシヌワ。	asin wa	出て行って	出
007	スカル。	nukar	見た	見
008	ヲロタアナキ子。	oro ta anakne	すると	然 所
(3)				
009	チヨリカイコタン。	<u>c(i)=orookay kotan</u>	私の住む村の	吾 邑
010	ウシレプケタ。	<u>usi repke ta</u>	湾の沖の方には	江 洋
011	ワタラシ子フ。	watara sine p	岩が 1 つ	岩
012	ロシケワヲカイ。	<u>roski wa okay</u>	立っていた	立 居
(4)				
013	ワタラキタイケ。	<u>Watara kitayke</u>	岩の頂上には	岩 頭
014	カンナカムイ。	<u>kannakamuy</u>	雷神が	龍
015	ノシツフミアン。	nosit humi an	遊んでいる音がした。	戯 声 有
(5)				
016	ヲロハアラキ。	<u>Orowa arki</u>	それから、やってきた	然 夫
017	カモイグリアナツ。	kamuy kuri anak	神の影は	龍 影 敷
018	チヨーカイチャシ。	<u>c(i)=ookay cási</u>	私がいる館に	我 城
019	チャシカンバラ。	cási kanpar	館の口に	郭 外
020	コウエカラバ。	kouekarpa	集まった	捲
(6)				
021	タンベバテキ。	<u>Tanpe patek</u>	そればかりを	此而已
022	子ウシヤラシリニ。	newsar siri ne	楽しみに	悦
023	アンギガン子。	<u>an=ki kanne</u>	して	有事
024	ヲカイアン。	okay=an	暮らしていた	居 有

- 001 タ子シ子ニ:tane sinen ne「今一人で」。ニは ne か。n は 2 つあると思われるが反映されていない。また、読点が付されていないが本来はあるべきである。誤写と思われる。
- 002 ハテキヲカイ:patek okay「だけで暮らしていた」。前行のタ子シ子ニ tane sinen ne「そのとき 1 人で」を受ける。なお「ハテキ」という表記については 021 を参照。
- 003 子ータウエベケレカ:子ータは neyta か。ここでいう uwepeker は「他所との噂話」というようなことか。つまり他所との交際がないことを示しているのであろう。
- 004 イラムシカレ:eramuskare「知らない」。地域によって少しずつ語形が異なる。eramiskari(方言辞典 160 幌別・沙流・帯広)、eramuskare(方言辞典 160 美幌)、erameskari(方言辞典 160 旭川)など。パチラー辞書には iramuskare の語形もみえる。「Iramushkare, イラムシカレ, 了解セヌ. v.t. Not to understand. Syn: Eramushkare. Erampeutek. Iramishkare.」(パチラー辞書 199)。いずれも i と e の母音の違いであり、それがこのカタカナ表記とどう対応しているのかはここでは即断は難しい。
- 005 シヨイタ:005-007 の 3 行は 1 行当たりの音節数が少ない。どのように歌ったのかや疑問である。
- 007 スカル:nukar「見た」。「ス」は「ヌ」の誤記と思われる。
- 008 フロアアナキネ:oro ta anakne「すると」。oro ta は「ここで」。具体的なその空間のことも、時間的に用いて接続詞的に用いることもできる。ここではどちらかはっきりしない。anakne「については」はいわゆる「とりたて詞」である。ここではたんに音節数を増やす(3 音節→6 音節)ために置かれているのかもしれない。語末以外の音節末子音 k は「キ」と表記される。017 を参照。
- 009 チヨリカイコタン:*ci-or-o-okay kotan「私が住む村<私>がそこ<に>いる 村」。リは口の誤写か。連動詞*or okay は現代語では未出。
- 010 ウシレペケタ:usi repke ta「その湾の沖の方には」。「ウシ」が us「湾(概念形)」なのか usi「その村の湾(所属形)」なのかは判別しがたい。ここでは後者にとっておく。
- 015 ノシツフミアン:*nosit humi an「遊ぶ音がする」。傍訳に「戯」とあるので、動詞 sinot「遊ぶ」の音韻転倒による*nosit という語形かと思われる。
- 017 カモイクリアナツ:kamuy kuri anak「神の影は」。カモイは kamuy「神」だと思われるが、なぜカムイではなくカモイと表記されたのかは不明。「カモイ」は慣用的な表記だったのかもしれない。アナツは取り立て詞 anak「~は」。このテキストでは語末 k は基本的にツで表記されている。例外は 021 タンベバテキ tanpe patek、キワ子ヤキ子 ki wa ne yak ne(119, 129, 136, 142, 147, 157)、132 コハキシヤマ kopak sama だけである。ただしバテキ patek は*pateki という語形なのかもしれない。021 を参照。
- 018 チョーカイチヤシ:*c=ookay cási「私がいる 館」。チョーカイは人称代名詞 cókay もしくは ciokay ではなく、現代語では未出の他動詞*ookay「~にいる」と思われる。009 にみられるやはり現代語で未出の連動詞*or o-okay とも符合する。次の 019 の cási「館」に連体修飾する。これら 018-019 チョーカイチヤシ/チヤシカンバラ:*cookay cási/cási kanpar「私のいる館の口」のように名詞を 2 回繰り返す関係節形式は現代の叙事詩でも共通する。
- 019 チヤシカンバラ:cási kanpar「館の 口」。cási「館」と kanpar「口」だが、kanpar が所属形 kanpar-o(ho)になっていない理由は不明。なお「ン」はおそらく横線が後から追加されており「シ」のように見える。にかほ本にこの横線はなく「ン」のままである。
- 021 タンベバテキ:tanpe patek「それ ばかり(を)」。patek の語末子音 k がキと表記されているのはアナツ anak(017, 527)、シヤツ sak(066, 424)、ヤツ yak(162, 448)、デツ(188)あるいはテツ tek、イメツ imek(510, 536)、ホツ hok(521)などを考えると奇妙である。わざわざ「バテツ」でなく「バテキ」となっているのは(これが慣用表記でないとすれば)実際に*pateki という語形だったためかもしれない。「だけ」を表す語に沙流・千歳方言などでは takup がある。patek が所属形を持たない副詞であるのに対し、この語は takupi という所属形を持つ副助詞である。patek も本来は*pateki という所属形を持っていたのかもしれない。ただし音節末子音 k でも「ヲシマヤツキ子」(osma yakne)など行末以外ではキの表記もみられる。所属形ではないはずの 002 が「ハテキヲカイ」(patek okay)と表記されているのは音節末子音 k が行中になっているためかもしれない。
- 022 子ウシヤラシリニ:newsar siri ne「楽しむ様子で」。newsar は「楽しい気持ちである」の意。「おもしろい(興味のある): néwsar 《人を喜ばせる》」(方言辞典 163 帯広)、「ほがらかな: néwsar」(方言辞典 296 帯広)。ただし日高地方では「よもやま話をする」の意である。「ネウサラ newsar【動1】よもやま話をする。ウエペケレ ヤカムイユカラなどを聞かせあつて、つれづれのなぐさめにする」(中川辞書 307)。「newsar ネウサラ【名】(おもしろい)話(ユーカー、神謡、昔話等の総称)」「☆参考 もとは「自動」昔話などを話して楽しむ。しかしその用例は未出」(田村辞書 413)。

(7)				
025	ヘン子子プカ。	<u>henne nep ka</u>	何も	非 何
026	ア子ヲベツチャ	<u>an=eopetca(?)</u>	渡って行かずに (?)	故
027	ヲカイアナイケ	<u>okay=an ayke</u>	暮らしていたが	居 時

(8)				
028	タンシ子ト。	<u>Tan sine to</u>	ある日	此 日
029	アヌンチャシ。	<u>an=un cási</u>	私がいる館	外 城
030	チャーシカンハラ。	<u>cási kanpar</u>	館の口で	城 棟
031	ケウコシヤヌ。	<u>kewkosanu</u>	大きな音がして	震 動

(9)				
032	タプツラノ。	<u>tap turano</u>	それと同時に	是 共
033	リコフイチャタ。	<u>rikopuyca ta</u>	天上窓 (?) から	家内
034	カモイタム子。	<u>kamuytam ne</u>	神の刀のように	神 刀
035	アベニケプ子。	<u>ape nikep ne</u>	火の輝きのように	火 光
036	<u>マツコシヤム。</u>	<u>matkosam(?)</u>	ぱっと立ち昇った (?)	発 散

(10)				
037	エヤリシヨ子	<u>eyarisone(?)</u>	向かい座に	客 坐
038	アイノヘ子ワ	<u>aynu he ne wa</u>	人間だろうか	蝦夷者 與
039	シロシマフンガ。	<u>sirosma hun ka</u>	座っている様子で	落 音
040	リンコシヤヌ。	<u>rinkosanu</u>	チャラチャラと音がする	鳴」

(11)				
041	フミアシグニプ。	<u>humi as kuni p</u>	音をたてるものは	鳴 物
042	アノヤ子ト。	<u>an=oyanene</u>	何かと思って	莫 焉
043	インカラアニケ。	<u>inkar=an ike</u>	見てみると	看

(12)				
044	イ子コタンタ。	<u>ine kotan ta</u>	どこの村の	孰 所
045	モカイゲウエ。	<u>kamuy kewe</u>	神なる姿か	神 形
046	アシユルゲセ。	<u>asur kese</u>	噂の端に (聞く)	告
047	チアラゲシデツカ。	<u>ciarkesitekka(?)</u>	美しい (?)	女神

(13)				
048	カムイ子アンタ。	<u>kamuy ne an ta</u>	神なるもの	靈 形
049	カ子コソンツ°。	<u>kane kosontu</u>	金の小袖を	金 襦※
050	ツーペレペ。	<u>tu pe re pe</u>	2つも3つも	二 三
051	アヌボケチユ。	<u>an=upokeciw</u>	着ていた	着

(※襦は糸偏)

- 025 ヘン子ブカ: *henne nep ka*「何も(～ない)」。[*Henne-nep-ka*, ヘンネネブカ, 何モナシ. *adv. Nothing.*] (パチラー辞書 1938:158)。*henne* は樺太方言の否定副詞 *hanne* と同系の語か。ここでは次行の動詞を否定している。「*ham, hane, hanne(hamne)* 樺太語の否定形 / *Ham chi-wante* 我知らず / *hane auwante* 私は知りませぬ (南方方言)」(久保寺辞書稿 82)。
- 026 ア子ヲベツチャ: **an=eopecta*「渡って行く(?)」。この行は語形も意味も不詳。傍訳には「故」とあるがよくわからない。語形は **aneopetca* もしくは **anepeca* と思われるが意味がよくわからない。*an=* は人称接辞、*e* は他動詞形成接辞だが、**opetca*, **opeca* は不明。*opes*「通っていく」と関係あるか。「オペシ *opes*【動2】～に沿って行く(中川辞書 127)」、「*opes* オペシ【他動/後副】*o-pes* その尻・...に沿って下へ行く」①【他動】...に沿って下へ行く(田村辞書 474)。
- 028 タンシ子ト: *tan sineto*「ある日」。*tan* は *tane*(北海道)、*tani*(樺太)などと同じく「今」転じて「さて」というような意味か。*tay sine to* が *Pilsudski*(1912:13)にもみられる。後続子音が *s* なので *tan* でも *tay* でもどちらでもありうる。
- 029 アヌンチャシ: *an=un cási*「私が・いる 館」。傍訳に「外 城」とあるのは *anun*「他所の」と解釈したか。確かに *anun*「よその、他の」という語もあるが文脈と合致しないように思われる。自分自身の家を指す *a=un cise*「私の家」などと同じ表現ではないか。
- 031 ケウコシヤヌ: *kewkosanu*「大きな音がした」。「*kukosanu* どしんと音が一つした」(久保寺辞書稿 146)。「*Keukosanu*, ケウコサヌ, 物ノ割レ音. *v.i. To give forth a very great noise as something breaking.*」(パチラー辞書:248)
- 033 リコフィチャタ: **rik-o-puy-ca*「高み・にある・穴・口(?)」[*rikoma puy =rikun puyar*(樺)天窓(久保寺辞書稿 268)と同系語か。*ca* は「口」か。
- 035 アペニケプ子: *ape nipek ne*「火の 光 のように」。*nipek* は「光」である。「光 / *nipek*, *-ihi* (方言辞典 224 宗谷)、「光 / *nikeh*, *-pihi* (方言辞典 224 樺太)」。なお、日高では語形がやや異なり *nipek* である。「ニペク, 一キ *nipek*, *-i*【名】光(中川辞書 299)、「ニペク *nipek*【名】【概】(所は *nipeki*(hi) ニペキ(ヒ)) 光、輝き、明るみ、つや」(田村辞書 420)。
- 036 マツコシヤム: **matkosamu*「立ち上がる(?)」。これは *matkosanu*「立ち上がる」(北海道各地)の同形語か。*-kosanu* という語未形式は 031「ケウコシヤヌ」、040「リンコシヤヌ」、417「イラツコシヤヌ」、455「セブコシヤヌ」にみられる。いずれも末尾は「ヌ」であり「ム」ではない。末尾が「ム」となっているのは、他に 210「セブコシヤム」、223, 420「セフコシヤム」だけである。
- 037 エアリシヨ子: **ear-so-ne*「向かいの(?)・席として(?)」。*ear* は *ar* と、**ear-so* は *ar-so*「向いの・席」と同意か。「アラソ, 一ケ *arso*, *-ke* 【位名】向かい側の座; < *ar*「片方の」*so*「座」。」(中川辞書 21)。*ne* は格助詞「～として、～に」か。ただしこのような用法は珍しい。
- 038 アイノヘ子ワ: アイノは *aynu* と思われる。アイノはアイヌの慣用的表記か。最後は *wa* ではなく *ya* のほうが現在では適切。
- 039 シロシマフンガ: *sirosma hum ka*「座っている 様子 も」。フンつまり *hun* は *hum* の語末子音が *n* に中和したか。この現象は樺太方言等でみられる。最後の *ka* は現在ではなくてもよい。*sirosma* は「座っている」か。ただし傍訳には「落」とある。「シロシマ *sirosma*【動1】べたっと座る。座って動かなくなる。倒れる; < *sir*「大地」*osma*「～(場所)に突っ込む」。」(中川辞書 227)。「*sirosma* シロシマ【自動】[*sir-osma* 地・に突進する] 地に落ちる。 *kamuy sirosma* カムイ シロシマ (1)(神が)地に落ちる、雷が落ちる。(2)熊が死ぬ。」(田村辞書 657)。
- 040 リンコシヤヌ: *rinkosanu*「大きな音がした」。「*rimkosanu* どつと一度音がする。(*-kosampa*) りんと一つ音がする。」(久保寺辞書稿 269)。*rin*<*rim* か。*rim* は大きな音を表す擬音語。
- 042 アノヤ子ト: *an=oyanene*「私は嫌だと思ふ」。「*oyanene* いぶかしい、遺憾に思ふ」(久保寺辞書稿 233)。*an=* は人称接辞。
- 044 イネコタンタ: *ine kotan ta*「どこの村か(?)」。*ine* は疑問副詞「どう、どこ」か。現在なら *ine an kotan ta* のように動詞が必要。
- 045 モカイゲウエ: *kamuy kewe*「神なる姿」。原文カナにしたがえば語形は **mokay kewe* だが、「モカイ」は「カモイ」の誤記つまり *kamuy*「神」ではないか。にかほ本は「モカイ」を「カムイ」とする。であれば *kamuy kewe*「神の身体」。
- 047 チアラゲシデツカ: **ciarkestekka*(?)「美しい(?)」。原文傍訳に「女神」とあるが現代語では見当たらない表現のようである。なお、この表現は複数回出現する。272 チアラキンテツカ、321 チアライデツカ、476 チアラギシデツカ。文脈からは「美しい」「素晴らしい」などの意ではないかと思われる。パチラー辞書、久保寺辞書稿は *ciar* だけで「美しい」の意とするが根拠は不明である。「*Chiara*, チアラ, 美シ, 輝ケル *adj. Bright. Beautiful.*」(パチラー辞書 72)、「*chiar* 立派ノ、美シク飾ツタノ～*suop=chitonte suop*」(久保寺辞書稿 37)。*ci=* は人称接辞、*-tek* は「さつと～する」という意味の接尾辞、*-ka* は他動詞化接尾辞だとすると、*ci=arkes-tek-ka* 全体のうち意味不明な部分はむしろ **arkes* と考えるべきかもしれない。
- 048 カムイネアンタ: *kamuy ne an ta*「神 として ある こそ」。現在であればおそらく最後は *ta* ではなく *kusu* であろう。
- 049 カ子コソソツ: **kosontu*「小袖」。北海道方言形 *kosonte* より樺太方言形の *kosonto* に似る。「コソソテ *kosonte*【名】小袖。輸入物の上等の着物; < 日本語(中川辞書 183)、「*kosonte* コソソテ【名】< 日本語>小袖、「金メールの入った美しい立派な絹の着物(男子のみ着る)」(田村辞書 341)、「*kosonto* 小袖(樺太) < *kosonte*」(久保寺辞書稿 164)。「にかほ本は「ツ」を「ブ」とする。
- 050 ツーペレペ: *tu pe re pe*「2つのもの、3つのもの」。現代口語では *tu p re p* であろうが、母音の後で *p* ではなく *pe* が用いられるのは現代でも韻文ではありうる。「にかほ本は「ツ」を「ツ」とする。
- 051 アヌボケチユ: *an=*u-pok-eciw*「着る」か。*an* は人称接辞と思われるが現在なら不要。現在の *u-tom-eciw*「着る」に当たるか。「*Utomechui*, ウトメチウ, *Utomechiure*, ウトメチウレ, 重著スル。例セバ, ウエンヤラツツシヤイネ ナイネウトムチウレ, 多クノ古キ襤褸ヲ著ル.*v.i. To wear, as many clothes. As: -Wen yarar tush yaine-yaine utomchiure, "wearing many old ragged garments."*」(パチラー辞書 546)。

(14)

052	キムイカシタ。	<u>kimuy kasi ta</u>	頭には
053	カ子ホンカサ	kane pon kasa	金の小兜
054	イヤケイムイカ。	<u>i=yaykimuyka</u>	その頭に
055	ラゝバカン子。	rarpa kanne	被っていた

(15)

056	ツマムカシタ。	<u>tumamu kasi ta</u>	身体の上には
057	カムイコロベ。	<u>kamuy kor pe</u>	神の道具 (刀のことか) を
058	イヤイツマムカ。	<u>i=yaytumamu ka</u>	その身体に
059	クツポケチユ。	<u>kutpokeciw</u>	帯びていた

(16)

060	タンニフカシ。	<u>tannep kasi</u>	刀の上に
061	テツラレゝ。	<u>tekrarire(?)</u>	手をかけて (?)
062	ツ° カイシケ。	<u>tuykasike(?)</u>	そうしながら
063	イタコマレ。	<u>itakomare</u>	彼は言葉を発した

(17)

064	タンルウエシヤニ。	tan Ruwesani	「このルウェサニ村
065	アロシ子プニ。	ar sine p ne	ただの1人で
066	ヤゝハシヤツ。	yayapasak	親類がいない
067	イキコロカイキ。	iki kor kay ki	のであるが

(18)

068	ツイマガン子。	<u>tuyma kanne</u>	遠くに
069	クルイセモシリ。	Kuruyse mosir	クルイセの島
070	モシリバケ。	<u>mosir pake</u>	島の先が
071	イワニレワ。	<u>iwa nere wa</u>	小山になっていて
072	イウランコバシテ。	<u>i=urankopaste</u>	そこを選んで

(19)

073	タンベクシユ。	tanpe kusu	そのために
074	イコヲタン。	<u>ikootan(?)</u>	下された (?)
075	イワタフカシ。	iwa tapkasi	その小山 (霊山) の上に
076	ヲランチムツペ。	<u>oran cimutpe</u>	降ろされた刀

(20)

077	アイヌツ° ミ。	<u>aynu tumi</u>	人間の戦争は
078	ア子ヌゝカ。	<u>an=enunuka(?)</u>	私は十分にやったから (?)
079	カムイツ° ミ。	<u>kamuy tumi</u>	神の戦争を
080	ア子タンギガ。	<u>an=etankika(?)</u>	私はともにしようとして (?)

- 054 イヤケイムイカ:i=*yay-kimuyka「その=自らの・頭の上」か。ヤの後でイが脱落している理由は不詳。最初の i=は現在なら不要。にかほ本は「イヤケイムイ」とする。「キムイカ、ーシーケ kimuyka, -si, -ke【位名】への頭の上」(中川辞書 158)。
- 055 ラバカン子:rarpa kanne「押さえつけて」。054を受ける。「rarpa ララ パ【他動】【複】(単は rari ラリ) (二人以上/二つ以上)を押えつけて」(田村辞書 563)。なおこの資料ではほとんどの場合「カ子」(460 のみ)ではなく「カン子」(055、179、257、325、534)と表記されているので kane ではなく kanne という語形なのかもしれない。
- 057 カムイコロベ:kamuy kor pe「神の 持つ 物」=宝物全般を指すが、059 で kutpokeciw「帯にさす」とあるので刀のことか。
- 058 イヤイツマムカ:i=yay-tumamu ka「彼の・自分の胴体の 上」。i=はここでは 3 人称の人称接辞。現在の用法では不要。「I- 人称接辞(目的格) 1) 雅語第 I 人称単複目的格(神謡-un(単・複)) 2) 口語第 I 人称複包括形目的格 3) 口語第 II 人称敬相複目的格(4) 汎称目的格 (A)事物を指す(動>II vi) 主格 目的格(K124 (B)詠嘆の主語を作る (K126, 知 156 iramasure, iramkursere, iramshitnere etc. (5) 主格第 I 人称 a'の代りに i-sampe ka i-hachirkar 我が心臓もよろけるばかり=a-sampe が i-()となるのは押韻による (6) 主格第 III 人称接頭辞として i-yupi(彼の兄)」(久保寺辞書稿 104)で久保寺が「(6)として指摘しているものであろう。なお、太田満氏の御教示によれば浦河方言では現在でも i=に明確な 3 人称用法があるそうである。北海道方言では所属形は tumam-a だが、樺太方言では tumam-uhu, tumam-aha の両形がある。「トマム、ーマ tumam 2, -a【名】胴」(中川辞書 280)、「tumam2 トマム【名】【概】(所は tumama(ha)トママ(ハ))胴(腰から肩まで、背骨の長さの部分)」(田村辞書 733)、「tumam, -uhu~aha (n) 腰」(村崎 1976:219)。
- 059 クツポケチユ:kutpokeciw「帯びていた」。「クツポケチユ kutpokeciw【動2】~を帯にさす;<kut「帯」pok「~の下」e「~(場所)に」ciw「~を刺す」」(中川辞書 165)、「kutpokeciw【他動】[kut-pok-e-ciw 帯・の下・に・さす](刀)を腰に(帯/ベルトの下に)さす」(田村辞書 370)。
- 061 テツラレ: *tek-rari-re「手をかけるく手で押さえつける」か。「rarire 下へ押チツケル。圧シツケサス。 / ramrarire 心ヲクバル、オシツケサス。 / shik~。 続イテユク / ayai~」(久保寺辞書稿 262)。また「sikrarire【他動】[sik-rari-re 目・を押える・させる](次の慣用表現で)...を目をこらしてじっと見る。」(田村辞書 634)など。
- 062 ツ カイシケ:tuykasike「そうしながら」。「カイ」は「イカ」の誤記で全体は「ツ イカシケ」であり、177「ツイカシケ」、512「ツイガシケ」と同じく tuykasike「そうしながら(同時に、そのうえで)」であろう。あるいは、原文カナのまま解釈するとすれば、語形は tuyka uske か。「ツカ」は tuka「刀の柄」、「イシケ」は uske か。だとすれば「柄のところ」というような意味になりうるか。
- 064 タンルウエシヤニ:tan Ruwesani「このルウエサニ村。Ruwesani ルウエサニ, Ruwesani ルウエサンは「ruwesani【名】[ru-w-e-san 道・(挿入音)・で・浜手の方へ出る] [雅]浜辺。」(田村辞書 594)にあるように普通名詞としても用いられるが、この作品では地名のようである。367も参照。この作品では 064「タンルウエシヤニ」、105「タンルウエサニ」、358「タンルウエシヤニ」、367「ルウエシヤニウングル」、384「タンルウエシヤニ」、523「ルウエシヤヌグ」の合計 6 回登場する。
- 066 ヤバシヤツ:*yay-apasak「自ら・身寄がない」か。「apa [n]親類 apa sakpe。」(久保寺辞書稿 19)、「apa-sak 親類もない。寄辺なき / ~hekachi」(久保寺辞書稿 19)。シヤツは下線があるので 1 音節つまり sak であろう。
- 067 イキコロカイキ:iki kor kayki「したのだが」。文脈からはここは 1 人称でよさそうなのである。なぜ 3 人称になっているのか不明。なお、逆接なのでこの詩連に入ると思われる。
- 072 イウランコバシテ:i=*u-rankopaste「そこを選んで」(?)。「Uramkopashte, ウラムコバシテ, 選抜スル. vi. To choose out from among others.」(パチラー辞書 539)。k の前で m が n になるのは樺太方言等に見られる。
- 074 イコラタン:ikootan「下された(?)」。語形も意味もよくわからない。語形は*i-ko-otan かあるいは、もしかすると i-ka-oran「その上に降りる」か。
- 077 アイヌツミ:aynu tumi「人間の戦争」。ここから 4 行は「人間の戦争を~、神の戦争を~」という対句になっているが、肝心の「~」の部分不詳。文脈からは「人間の戦争を終え、神の戦争をしよう」というような意味ではないかと思われる。
- 078 ア子ヌカ:*an=enunuka「私は十分にやった(?)」。この語句は不詳だが、*enunuka で「十分にやった」というような意味か。語頭の an=は人称接辞。「ヌケ nunuke【動2】~を哀れむ。~を大事にする。」(中川辞書 303)、「enunuke エヌケ【複他動】[e-nunuke (それ)について...を大事によく遇する] (そのこと)で(人)を厚遇する」(田村辞書 103)、「イヌカシキ inunukaski【間投】かわいそうに。気の毒に」(中川辞書 41)、「inunukaski イヌカシキ【自動】[< inunukeaski] かわいそうである。」(田村辞書 237)と関係あるか。
- 080 ア子タンギガ:不詳だが、語形は an=*etankika で「一緒にする」というような意味か。語頭の an=は人称接辞。「tamke 一緒ニスル」(久保寺辞書稿 317)。

(2 1)

081	タンベクシユ。	<u>tanpe kusu</u>	そのために
082	イヤアシユクシヤクノ。	i= <u>yay-siyuk-sak no</u>	鎧もなしで
083	カムイツ° ミ	<u>kamuy tumi</u>	神の戦争が
084	イコホフニ。	i= <u>kohopuni</u>	降りかかっていた

(2 2)

085	ンベㇿケレ。	Npepekere(?)	いろいろな由来話 (?)
086	ツイマアシユル。	tuyma <u>asur</u>	遠くの噂を
087	アヌプ子クシユ。	a= <u>nu p ne kusu</u>	私は聞いていたから

(2 3)

088	ウライケアシユル。	<u>urayke asur</u>	殺し合いの噂を
089	チコアシユルクル。	<u>cikoasurkor</u>	知らされていた
090	ア子イガラカフ。	an= <u>eikarkar</u>	私は聞かされていた

(2 4)

091	▲アノヤ子子フ。(※)	an= <u>oyanene p</u>	私が嫌だと思っのは
092	ヤイモシリシナ。	<u>yaymosiresina</u>	自分の国を隠す
093	子アクシタフ。	ne akus <u>tap</u>	ことだから、

(横に「▲カキヨフカヨ。」と追加あり)

(2 5)

094	アンコロモシリ。	an= <u>kor mosir</u>	私の国
095	レーヘダフ。	rehe tap	名前は
096	ウラㇿモシリ。	Ú <u>rarmosir</u>	ウララモシリ (霞の国)

(2 6)

097	イユラチノ。	i= <u>koraci no</u>	あなたと同じく (?)
098	アラバシヤクベ。	arapasakpe	全く身寄りがない者
099	ア子イクシユ。	a= <u>ne (h)i kusu</u>	で私はあるので

(2 7)

100	ウライアニ。	<u>uray ani</u>	戦争で (?)
101	イグルガシケ。	i= <u>kurkasike</u>	私の上に (あなたの上に)
102	チタモマレ。	<u>citamomare</u>	刀を振り下ろそうと
103	ア子カラカリ。	an= <u>ekarkar i</u>	したのである

- 082 イヤアシユクシヤクノ: *i=ya[y]-siyuk-sak no「私の・自分の・装束・もなく・て」か。この i=の用法は奇妙。「siyuk シユク【自動】[si-y-uk 自分・(挿入音)・を受け取る] (?)①(よい)着物を着る。②(動名詞として) (よい)着物を着ること、装束。」(田村辞書 672)
- 084 イコホフニ: i=kohopuni「私・に降りかかったく私・に向かって飛び込んだ」。「kohopuni コホフニ【他動】[ko-hopuni ...に・立ち上がる]①...に(対して)立ち上がる、夢中で...する。(「攻める」の訳語として出た)」(田村辞書 319)。
- 085 シンベケレ: upepekere(?)「知らせや噂(?)」。原文カナからみると音形は *npepekere のようになるか。アイヌ語に語頭が np-となることはないので、「ンベ」という表記は不可解である。語形的には「尋ねる／pisí; 'upépekennu《質問する》; nú」(方言辞典 57 帯広)、「尋ねる／'inú; 'upépekenu《ものを尋ねる》」(方言辞典 57 宗谷)に近い。文脈から見ると日高などの諸方言の uwepeker「散文説話」(ジャンル名)と同系統語か。しかし「ウエベケレ」という語形は別に 003「子ータウエベケレカ」にみられる。
- 089 チコアシユルクル: *ci-ko-asur-kor「知らせる」か。美幌方言に「知らせる[報告]／núre[他]; 'asurkor」(方言辞典 58 美幌)がある。田村辞書には asur の例文として「asur kor wa ek アスル コロ ワ エク 知らせを持って来る。」(田村辞書 30)をあげる。また、現在の多くの方言で ko-asur-ani「～に知らせる」という語形がある。「コアスラニ koasurani【動2】 ～に危急を知らせる」(中川辞書 117)、「koasurani コアスラニ【他動】 [ko-asur-ani ... (のところに)・知らせを持って行く] (人)にあぶないことやせつぱつまっていることの知らせを届ける、...に危急を知らせる」(田村辞書 315)など。なお、ここでは非人称形であり、人称は次の 090 で示される。
- 090 ア子イガラカフ: an=i=ekarakar「彼らが・私に・した」か。最後のフはラの誤記と思われるが、下線が引かれている理由はよくわからない。他の箇所の表記(たとえば 093)ではこのような場合は音節末子音 p であるが、ここではそうではないように思われる。アニエガラカフ an=i=ekarkar でなくア子イガラガフ *an=e=ikarkar となっているのは聞き誤りか。あるいはこのような配列もあったのかもしれない。「Eikarakara, エイカラカラ, 私ノメニ作ツタ, ph. He made it for me.」(バチラー辞書 107)。
- 091 ▲アノヤ子子フ: an=oyanene p「不定人称が・遺憾に思う・こと(は)」か。「oyanene いぶかしい、遺憾に思ふ」(久保寺辞書稿 233)、「oyanene 好まず」(久保寺辞書稿 233)、「oyanene 嫌ひなる事」(久保寺辞書稿 233)。横に「▲カキヨフカヨ。」と追加されているが意味は不明である。そのままローマ字化すると kakiyopkayo だが解釈が困難である。k=aki okkayo「私の弟である男性(?)」であろうか。よくわからない。
- 092 ヤイモシリシナ: *yay-mosir-esina(?)「自分の祖国のことを他人に対して隠す」。esina「～が～を隠す」(他動詞)に yay-mosir-「自分の国」(?)が抱合されて自動詞になっている(さらに名詞として次行の ne が受ける)。「エシナ esina 【動2】 ～を隠す。～を秘密にする。ヤイコタン オロ エシナ アナク エアイカブ クス yaykotan or esina anakeaykap kusu 自分の村を隠すこともできないので [N9003061.FN]」(中川辞書 84)、「ヤイコタネシカルン yaykotanesikarun【自動】[yay-kotan-esikarun 自分・村・を懐かしく思い出す] 故郷を思い出す、故郷を懐かしむ。」(田村辞書 857)。
- 093 子アクシタフ: ne akus tap「だからこそ」。現代語同様に akusu の末尾母音脱落により akus となったものか。なお、横に「カキヨフカヨ」との書き込みがあるが不詳。なお、この行は前行の自動詞 *yaymosiresina を名詞として ne で受けている。
- 096 ウラモシリ: *Úrar-mosir「霞の国」か。架空の地名と思われる。
- 097 イユラチノ: i=koraci no「あなたと同じく(?)」。*iyu-ratci-no「(?)・穏やか・に」では意味が取れない。ユはコの誤記で、i=koraci no「あなた・と同じ ように」ではないか。「コラチ koraci 【副】 かのよう; 目的格人称接辞をとる」(中川辞書 191)
- 098 アラバシヤクベ: *ar-apa-sak-pe「全く・親戚・無い・者」か。066 ヤハシヤツ *yay-apa-sak と類語か。
- 099 ア子イクシユ: a=ne (h)i kusu「で私はあるので」。
- 100 ウライアニ: *uray ani「殺し合い(?)」で。uray「やな(築)」では意味が通じない。urayke「戦争」と同義で *uray という語形があったのではないか。
- 102 チタモマレ: *ci-tam-oma-re「不定人称・刀・を入れる・させる」。ci~re は韻文的表現で、これがなくても同義。つまり tam-oma「刀・を入れる」と同義であろう。
- 103 ア子カラカリ: an=ekarkar i「私は・した・のだ」。現代では最後の i は付けられないほうが多いように思われるが、ここでは次の行にコビユラ ne があるため、形式名詞があったほうが適切。

(28)			
104	子グンベリシユ。	<u>ne kun pe kusu</u>	であるから
105	タンルウエサニ。	<u>tan Ruwesani</u>	このルエサニ村に
106	チコシレバ。	<u>cikosirepa</u>	着いた
107	イチエガラカラ。	<u>i=ekarkar(?)</u>	のである
(29)			
108	イコロコタン。	<u>i=kor kotan</u>	彼の村は(?)
109	シヤンブツ°ンク。	<u>Sanputunku(r)</u>	サンプトゥンクルが
110	ヲガイコロカ。	<u>okay korka</u>	暮らしていたのだが
(30)			
111	カムイツ°シ。	<u>kamuy tumi</u>	神の戦争
112	ア子アフチカラ。	<u>an=eapcikar(?)</u>	なるものが起きた(?)
113	キアクシユ。	<u>ki akusu</u>	それゆえに
(31)			
114	シヤンブツング。	<u>Sanputunkur</u>	サンプトゥンクルの
115	シ子ツレシ子。	<u>sine tures ne</u>	たった1人の
116	クラツレシ。	<u>kor a tures</u>	妹が
117	トモチヌカル。	<u>tomoci nukar</u>	巫術を
118	イキエカラカ。	<u>i=ekaraka(r)</u>	した
119	キワ子ヤキ子。	<u>ki wa ne yakne</u>	そうしたら
(32)			
120	ラムレデンノ。	<u>ramuritenno</u>	『安心なことに
121	カムイツ°ミ。	<u>kamuy tumi</u>	神の戦争が
122	イコアツカ。	<u>i=koat ka(?)</u>	我らに起こるけれど(?)
(33)			
123	カシシヨイキ。	<u>kasi si(?) oyki</u>	私が助太刀(?)
124	ア子イカラカ。	<u>an=eikaraka(r)</u>	する
125	キクンベ子グシ。	<u>ki kun pe ne kus</u>	であろうがゆえ
(34)			
126	タンメノコ。	<u>tan menoko</u>	この女を
127	チコヲシウエ。	<u>cikoociwe(?)</u>	そこに送る
128	イキエガラガ。	<u>i=ekarka(r)</u>	のだ
129	キワ子ヤキ子。	<u>ki wa ne yakne</u>	そうしたら

- 104 子グンベリシユ: *ne kun pe kusu*「であるからく・あるだろう・こと・だから」。リはクの誤記と思われる。kuni p(西方言形)ではなく kun pe(東方言形)が用いられている。
- 105 タンルウエサニ: *tan Ruwesani*「このルエサニ村(に)」。にかほ本はサではなく「シヤ」とする。現代語と同様に[s][j]どちらの音もありえたのであろう。064も参照。
- 107 イチエガラガラ: *i=ekarkar*「したのである」。原文カナの表記の「チ」は不自然である。イチがエチ *eci*=だとすると、語形は *eci=ekarkar*「あなたたちは・した」となるが文意が通じにくい。また全編でエチ *eci*=は他に使用されていない。ekarkar「～をする」は自動詞で構成された行の後に置かれることが多く、現代韻文でも多用されるが、ここで主語が「私」であるならアエカラカ *a=ekarkar*となるはずである。
- 350 イキカラガラ、431 イエガラガラ、446 イエガラガラ、があることから、イチエガラガラのイチもイキの誤記という可能性が高い。もしそうなら、イキエガラガラ *i=ekarkar*となるが、その場合 2 番目の i はたんに母音が引き延ばされただけだと思われる。
- 108 イコロコタン: **i=kor kotan*「彼・の 村」か。文脈からみてこの i は 3 人称接辞なのかもしれない。場所格助詞 *ta* がいないのは少々不自然。
- 109 シャンプツヅンク: *Sanputunku(r)*「サンプツの人」もしくは *Sanputu(u)nku(r)*「サンプトウの人」。ツ^oの半濁点は *tu* であることを明確にするためと思われる(常にあるわけではない)。末尾の *r* が脱落していると思われる。Sanput(u)という地名および、その名を關した英雄 Sanputunkur は現代の叙事詩にも主人公の味方としてしばしば登場する。この作品で Sanput サンプツという地名は 109「シャンプツヅンク」、114「シャンプツヅンク」、144「シヤンツヅンマ」、514「シヤシプツヅンタ」、539「シヤンプツヅンマ」の合計 5 回登場する。
- 110 ラガイコロカ: *okay korka*「いた のだが」。意味は取れるがあまり自然な文ではない。逆接になる必要はないように思われる。もしかしたら直前で *ratecitarano*「穏やかに」などの句が抜けているか。
- 111 カムイツ^シ: *kamuy tumi*「神の 戦争」シはミの誤記と思われる。神々がお互いに戦う戦争。121「カムイツ^ミ」と同じであろう。
- 112 ア子アフチカラ: 不詳だが、語形は *an=*eapcika(?)*か。文脈から見て「(戦争などが)勃発する」の意か。ひよっとすると *an=eye a p ci=kar*「と呼ばれるものを私がした」かもしれないが不明。
- 115-116 シ子ツレシ子 クラツレシ: *sine tures ne kor a tures*「1 人の妹として持っていた妹」。ただし現代で全く同じ表現は確認できない。
- 117 トモチヌカル: **tomoci nukar*「巫術 を見る」。一見似た語句としては「*tomochikokanu* 委任する、お任せする」(久保寺辞書稿 331)があるが、語構成も異なる(おそらく *tomo cikokanu*)であろう。知里真志保は「夷諺俗話とゆう本の中に、狐狸・木鼠・蛇の類を使うことをソーヤ(宗谷)辺でワトモチと云ったと見えている。」(知里辞典人間篇 642)と指摘する。おそらく *topoci* と関係した語であろう。「Topochi, トポチ, 木霊ノ名, n. The name of the god of trees. It is said to mean also "bad magic." It is also said to be an old word meaning "wise," and also "quick."」(パチラー辞書 507)、「*topochikor-kuru* 巫術に長けたもの / *tusu kuru·tusu matainu* <*topochi* 眷属神? / *sine pon* ~ ひとりの若い女神」(久保寺辞書稿 333)。
- 118 イキエカラカ: *i=ekarka(r)*「そのようにした」か。この *i* も 3 人称単数形の人称接辞なのかもしれない。にかほ本は「エ」を「エ」とする。
- 120 ラムレデンノ: *ramu-riten-no*「安心して」。「ラムリテン *ramuriten* 【動1】安心する。ほっとする。気分がよくなる;<*ramu* 「～の心が」*riten*「柔らかい」」(中川辞書 409)。にかほ本は「デ」を「テ」とする。
- 122 イコアツカ: **i=ko-at ka*「私たち・に対して・起こる も」(?)。ただし、ここに *ka* があるのはやや不自然。149「イコアナツカ」ならば *i=ko-an(y)akka*「私たち・に対して・ある・としても」でわかりやすい。ナ^oの脱字という可能性もあるか。なお、**koat* が単独で使用できるどうかは不詳。「罰が当たる / *paci ko'at*」(方言辞典 74 帯広)の例があるがここでは *paci* は抱合されているかもしれない。
- 123 カシヨイキ: **kasi si oyki(?)*「～を助太刀する(?)」*ka(-si) oyki* は「助ける」「看病する」という意味の連動詞。それと同義か。間に挟まっている *si* は不詳だが再帰接辞 *si*-か、あるいは *ka-si*「～の上」の語尾を繰り返したものか。
- 124 ア子イカラカ: *an=eikarka(r)*「私がそうする」。直前の動詞を受ける。ここでの「私」あるいは不定人称が誰を指すのかは不明。文脈からは主人公と解釈できる。
- 125 キクンベ子クシ: *ki kun pe ne kus*「するであろうから」。直前の動詞を受ける。
- 127 チコヲシウエ: **ci-ko-o-siwe(?)*「そこに追いやる(?)」。**osiwe* は *ociwe* と同じか。*siwe* は「Shiwe, シウエ, チウエト同ジ。Same as chiwe, "to be carried away with," (as with desire.)」(パチラー辞書 475)。*ociwe* は各地の方言で「捨てる」の意。「投げる / *'ociwe* [他] (たとえば石等を遠くへ)」(方言辞典 133 樺太)、「捨てる / *'ociwe* [他]」(方言辞典 142 帯広)、「なくす[失う] / *'ociwe* [他]; *turáynu* [他] 《見当たらない》」(方言辞典 151 帯広)、「*ochiwe* 追ひやる」(久保寺辞書稿 213)。

(35)

130	ツイマモシクワ。	<u>tuyma mosir wa</u>	遠い島からの
131	カモイウタレ。	<u>kamuy utar</u>	神々の
132	コハキシヤマ。	<u>kopak sama</u>	その近くに
133	アイヤヨヤレ。	<u>ay=yayomare</u>	私は突進し

(36)

134	セイエムコタウキ	<u>yayemkotawki</u>	私は親族を切り殺して
135	ア子イガラカ	<u>an=eikarka(r)</u>	しまうのだ
136	キワ子ヤキ子。	<u>ki wa ne yakne</u>	そうしたら

(37)

137	イコロコタン。	<u>i=kor kotan</u>	彼の村
138	カムイジンキ。	<u>kamuy cinkew(?)</u>	神なる先祖 (?) の
139	アンルゲセ。	<u>anrukese</u>	その後を
140	コライブン。	<u>koraypun(?)</u>	与えるのも (?)
141	イヤイヌケシテ。	<u>iyaynukeste</u>	できなくなる (?)』
142	キワ子ヤツキ子。	<u>ki wa ne yakne</u>	そうしたら

(38)

143	イタキ子クシユ。	<u>itak (h)i ne kusu</u>	そう言ったので
144	シヤンツ°ンマ。	<u>San(pu)tunmat</u>	サンプトウンマツ姫は
145	トモチヌカル。	<u>tomoci nukar</u>	巫術を
146	イキエガラカ。	<u>i=ekaraka(r)</u>	した
147	キワ子ヤキ子。	<u>ki wa ne yakne</u>	そうしたら

(39)

148	カムイツ°ミ。	<u>kamuy tumi</u>	『神の戦争が
149	イコアナツカ。	<u>i=koanakka</u>	私に起こったとしても
150	ハシヨロミチヤシ。	<u>pas or mina=as</u>	笑って
151	チシキゲチユ。	<u>cisikikeciw(?)</u>	目で刺す (?)
152	セムコラチ。	<u>semkoraci</u>	かのよう
153	イエガラワ子ヤ。	<u>i=ekar wa neya</u>	であろうし、この

(40)

154	モシリゲセシユ。	<u>mosir kesesiw</u>	国の端まで
155	カモイシンジツ。	<u>kamuy sinrici</u>	神の先祖 (の血筋を?)
156	コシヒラシヤク。	<u>kosipirasare</u>	広がらせしめも
157	キワ子ヤキ子。	<u>ki wa ne yakne</u>	したならば

- 130 ツイマモシクワ: *tuyma mosir wa*「遠い 国 から」。クはりの誤記と思われる。
- 131 カモイウタレ: *kamuy utar*「神々」。にかほ本では「カムイウタレ」とする。
- 133 アイヤヨヤレ: *ay=yay-omare*「私は突進する<私は=自らを・入れる>」。ヤはマの誤記と思われる。「Yaiomare, ヤイオマレ, 入ル(市ニ). v.i. To enter, as a town. (Lit: To put one's self in).」(バチラー辞書 568)。
- 134 セイエムコタウキ: **yay-emko-tawki*「親族を切る(?)」。セはヤの誤記と思われる。yay-は再帰接辞、emko「半分」、tawki「切る」だがバチラー辞書によれば、yay'emko で「親族」というような意味があるらしい。「Yaiemko, ヤイエムコ, 親族, 兄弟姉妹, 同胞. n Relations. Brothers & sisters.」(バチラー辞書 560)。
- 138 カムイジンキ: **kamuy cinkew*「神なる 先祖(?)」。ジンキはそのままとれば cinki「裾」だが、それでは意味が通じない。cikew「先祖」かと思われる。最後の子音 w が短く発音されたために聞き誤ったか。なお cinkew は北海道方言では「腰、腰骨」のことだが、樺太方言では「親」の意である。「chinkeu < chin 脚, keu 骨 sut 足のつけ根 (名) (1)根(2)親, 祖(樺ニモ)」(久保寺辞書稿 42)。「親/cinkew, -ehe(また"親元"「父母・祖父母の総称」; 'o'usi(「親元」))」(方言辞典 39 樺太)、「cinke'utarikehe 先祖」(村崎 1976: 122) 知里真志保は樺太方言の方法は転用とみなしている。「chinkew (-e) 親(6) chinkew (-he)[cin-keu ちンケウ]《カラフト》親。【もと脚の義, それから植物の根を云い, さらに親の義になったらしい。 < chin (脚)+ kew (骨) 〕」(知里辞典人間篇 491)。
- 139 アンルゲセ: *anrukese*「その後を」。「an rukese すぐその後を」(久保寺辞書稿 17)。おそらく an < ar「全くの」であろう。
- 140 コライブン: 不詳。*koraypun(?)「与える(?)」か。「Koraye, コライエ, 與フ. v.t. To give. Syn: Korara.」(バチラー辞書 269)。「Koraipa, コライパ, 用意スル. v.t. To make ready. Prepare.」(バチラー辞書 268)などと関係あるか。いずれにせよ 3 音節では短すぎるので、最終文字ンがニの誤記である可能性も考えるべきであろう。その場合は*ko-ray-puni(?)「捧げる(?)<~に対して・ひどく・持ち上げる」というような意味になるか。ここでは仮に「与える」としてみた。
- 141 イヤイヌケシテ: *e:yay-niwkes-te*「できなくなる(?)<そのことで・自ら・できなく・させる>」か。「eyayniwkeste エヤイニウケシテ【他動】[e:yay-niwkes-te ...で・自分・し損なう・させる] ...で負けるのはくやしい、...で負けたくない。」(田村辞書 156)では意味が合わないかもしれない。340「キフセヌイゲシ」も参照。
- 143 イタキ子クシユ: *itak (h)i ne kusu*「そう言ったので」。itak nu kusu「言葉を聞いて」の可能性もあるか。
- 144 シヤンツンマ: *San(pu)t un ma(t)*「サンプトゥン姫(<サンプツ の 女性)」。地名 Sanput は 5 回登場するが、-pu-の脱落はこの箇所のみ。mat「女性」の語末 t の脱落は、109 シヤンツンク Sanput un ku(r)「サンプツの人」における kur「~の人」の語末 r の脱落と並行的である。
- 145 トモチヌカル: **tomoci nukar*「巫術 を見る」か。117 参照。
- 149 イコアナツカ: *i=ko-an (y)akka*「私たち・に対して・ある・としても」。この位置での y の脱落は現代でも珍しくない。
- 150 ハシヨロミチヤシ: *pas or mina=as*「口(?)・において・笑う・私たちが」。チはナの誤記と思われる。にかほ本の「嘲り笑う」の項目に「ハシヨロミナ」とある。「ほほえむ【微笑】/paróromina」(方言辞典 22 幌別)と同系語か。あるいは pasirota「罵る」と関係あるか。
- 151 チシキゲチユ: 不詳。ci=sik-ik(?)-eciw「私たちは・目・(?)・に刺す」。いずれにせよ、次の行が semkoraci「かのように」なので、何らかの態度を表していると思われる。
- 153 イエガラワ子ヤ: *i=ekar wa neya*「私たちはそうして その」。最後の neya「その」は次の行の mosir「国」にかかるか。にかほ本は「ガ」を「カ」とする。
- 154 モシリケセシユ: *mosir kes-eciw(?)*「国 の端・を突く(?)」。国土に広がる、というような意味か。
- 155 カモイシンジツ: *kamuy sinrici*「神なる 先祖(の血筋?)」。シンジツという表記と実際の音価の関係については池上二良(2004: 198-199)に言及がある。次行の sipirasa「広がる」の意味上の主語となっているので、「先祖」そのものというより「先祖の血筋」のことだと思われる。
- 156 コシヒラシヤク: *ko-si-pirasa-re*「~に対して~をして広がらせる」(<~に・自ら・広げる・させる>)。クはりの誤記と思われる。pirasa「~を広げる」は他動詞、sipirasa「広がる」は自動詞。使役接尾辞-re による他動詞 sipirasare は「~を広げる」になる。「Shipirasare, シピラサレ/Shipirasasare, シピラササレ, 弘み, 弘ゲル. v.t. To circulate. To scatter.」(バチラー辞書 462)。

(4 1)

158	アイノシンケウ。	<u>aynu cinkew</u>	人間の先祖
159	ヲタン子ヤキ子。	<u>otanne yakne</u>	長く続き
160	イツレンカムイ。	<u>i=turen kamuy</u>	我が守護神に
161	アイヌガリナウ。	<u>aynu kar inaw</u>	人間の作るイナウが
162	ゴワシワ子ヤツ。	<u>koas wa ne yak</u>	立つならば

(4 2)

163	モシリケシタ。	<u>mosir kes ta</u>	国の端に
164	カモイバセプ子。	<u>kamuy páse p ne</u>	重き神となり
165	アイノコタン。	<u>aynu kotan</u>	人間の村を
166	イシカシマヤツ。	<u>i=sikasma yak</u>	守護するなら

(4 3)

167	ツバセカムイ。	<u>tu páse kamuy</u>	2つの重き神が
168	イツカツシヤマ。	<u>i=sikasma</u>	我らを守護し
169	コラメチユ。	<u>korameciw</u>	心配してくださる
170	キナンコンナ。	<u>ki nankonna</u>	であろう。』

(4 4)

171	アリアンへ。	<u>ari an pe</u>	ということを
172	カムイへ子ワ。	<u>kamuy he ne wa</u>	神だろうか
173	イヤツシヨク。	<u>i=(?)atu siyok(?)</u>	吐露したのだった (?)

(4 5)

174	イタクツ°ラ。	<u>itak tura</u>	言いつつ
175	アベツ°イシヤム。	<u>ape tuysam</u>	火の近くに
176	イホラリ。	<u>ehorari</u>	座っていた

(4 6)

177	ツイカシケ。	<u>tuykasike</u>	そうして
178	イエタン子フカ。	<u>i=etannep ka</u>	刀を
179	タラバカン子。	<u>tarap a kane(?)</u>	夢にこそ見て (?)

- 158 アイノシクウ: aynu cinkew「人間 の先祖(の血筋?)」。cinkew は「腰、腰骨」ではなく、おそらく樺太方言と同様の「親」の意であり、転じて「先祖」の意として用いられているのであろう(138 の註を参照)。次行 otanne「長くなる」の主語となっているので、「先祖」そのものというより、「先祖の血筋」を意味すると思われる。
- 159 ヲタン子ヤキ子: otanne yakne「長くなる ならば」。otanne は現代沙流方言では「陰茎が長い」の意というが(田村辞書、萱野辞書)、現代樺太方言ではたんに「長い」の意である。なお、158-159 の 2 行は次の 3 行と密接な関係にあるので、同一の詩連とみなしてよいであろう。「otanne オタンネ【自動】[o-tanne その尻・長い] ①陰茎が長い(=ciyehe tanne チェヘ タンネ)(田村辞書 492)、「オタンネ【o-tanne】陰茎が長い」(萱野辞書 172)。「長い/otánne」(方言辞典 271 宗谷)、「長い/otanne」(方言辞典 271 樺太)。
- 162 ゴワシワ子ヤツ: koasi wa ne yak「～に対して立つならば」。koas「～に対して・立つ」。あるいは koasi「～に対して～を立てる」かもしれない。どちらなのかカナ表記からは判別できない。
- 163 モシリケシタ: mosir kes ta「国の端に」。にかほ本にはモリシとあるが誤りか。
- 164 カモイバセ子: kamuy páse p ne「神の(うちで)重き者となる」。
- 166 イシカシマヤツ: i=sikasma yak「守護するならば」。現代沙流方言では sikkasma「～を見守る」(他動詞)だが、方言辞典には宗谷方言として sikasma の語形が見える。i=は少なくとも意味的には 3 人称接辞か。にかほ本はエシカシマとするが、esikkasma「～で～を見守る」では意味が通らない。「sikkasma シッカシマ【他動】...をしまつてちゃんととっておく、...を保存/保管する」(田村辞書 629)、「シッカシマ sikkasma【動2】～を見守る。」(中川辞書 212)、「守る/sikásma; púnkine は(”番兵”)」(方言辞典 51 宗谷)。
- 167 ツパセカムイ: tu páse kamuy「2つの重き神が」。このような多数を表す表現では tu「2つ」は re「3つ」に後続されることが多いが、単独で用いられることもある。
- 168 イツカツシヤマ: 不詳。だが、文脈から見て 166 の「イシカシマ」と類似した語形と思われる。可能性としては(1)1 つ目のツはシの誤記で i=sika(?) sama「彼を・見守る(?)・傍ら」。(2)正しくはイツカツシマヤツ i=sikkasma ya(k)「彼を・見守る ならば」などが考えられるであろう。
- 169 コラメチユ: ko-rameciw「心配する」。直訳すれば「～に対して・心が刺さる」つまり「心配する、見守る」というような意味であろう。「rameciw【他動】[ram-e-ciw 心・そこに・ささる] →kurpok(ke) rameciw」(田村辞書 556)。「kurpok(ke) rameciw【連他動】[kurpok(ke) ram-e-ciw ...の下・心・そこに・ささる] (人)の問題を考えてどうなるのだろうかかと心配している。」(田村辞書 366)。
- 171 アリアンヘ: ari an pe「ということ」。「Arianbe, アリアンベ, 其ノ様ナモノ. ph. Such a thing. A thing that is.」(バチラー辞書: 50)。
- 172 カムイヘ子ワ: kamuy he ne wa「神でもあるのだろうか(?)」。現代沙流方言などでは～he ne ya という言い方がある。それと類似の表現か。
- 173 イヤツシヨク: 不詳。*i=atu sok(?)「吐露したのだった(?)」。atu「吐く」(自動詞)。「shiyok 悲シム」(久保寺辞書稿 306)。「Shiok, シオク, 悲シキ. n. Sorrow. Trouble.」(バチラー辞書 461)などと関係があるか。
- 177 ツイカシケ: tuykasike「そうしながら」。tuyka は「その上(で)」だが、ここでは空間的な位置関係ではなく、「その状態で、そうしながら」という接続表現である。田村辞書の tuyka の項目にも次のような説明と例文が掲載されている。「②(動詞の後に置かれて)...している最中. onkamituyka/itak omare オンカミ トウイカ/イタコマレ 【雅】(その神は)拜礼(伝統的な形のあいさつ)をしながら言葉を言った。《W 神謡語り》tuyka ta トウイカ タ ...しながらしているときに」(田村辞書 745)。
- 178 イエタン子ヅカ: *ietanep(?) ka「刀(?)」。tanep「刀」に不定人称接辞 i=がついたか。音としてさらに-eが入っているようだが不詳。これは現代語では入らない。もしかすると 178-179 で 2 行にまたがっている*i=e-tanep-ka-tarap「私が(?)・刀の上で夢を見る<人称接辞・充当接辞・刀・上・夢見る」というような動詞なのかもしれない。ただこれも充当接辞 e の位置がおかしいように思われる。通常は*i=tanep-ka-e-tarap となりそうである。次行 179 の「タラバ」は rarpa「押し付ける」の聞き誤りで、*i=e-tanep-ka-rarpa「刀がかかけられている」というような語なのかもしれない。あるいはやはり原文カナ表記の通り「クラバ」がほぼ正しく、korap a であり、*i=e-tanep-ka-korap a 「私に・刀が落ちてきた」というような意味なのかもしれない。
- 179 クラバカン子: tarap a kanne「夢を見 た そして」。「ク」は「タ」の誤記か。あるいは korap a kanne「そこに落ちる」か。いずれにせよ前の 178 とのつながりが悪いように思われる。「タラバ」は rarpa「押し付ける」で 148 の i=etanep を受けるのかもしれない(178 解説を参照)。あるいは kur a=pa kanne「影を私は見つけて」か。にかほ本は「ク」を「タ」とする。

(47)			
180	イセラムゲシタ。	<u>isiramkesi(?) ta</u>	夜明け近くに (?)
181	ツ° ニハシイタフ。	<u>tu niwas itak</u>	2つの荒い言葉
182	イキエセレコウシカ。	<u>ieserkouska(?)</u>	の声ともに消えた (?)
(48)			
183	タンベヲツタ。	<u>tanpe otta</u>	そのことについて
184	イヤコツイマ。	i=yaykotuyma-	よくよく
185	コシラムシユイ。	-kosiramsuye	熟考した
(49)			
186	イ子ヲカイ。	<u>inne okay</u>	数多ある
187	イ子モンリノ。	<u>inne mosir no(?)</u>	大きな国々を (?)
188	チバヨカイ <u>デツ</u> 。	<u>ci=payokay tek</u>	歩き回ったが
(50)			
189	シユンツ° ミ。	<u>siyuntumi</u>	大いなる戦争
190	チアバシヤツカ。	<u>ci=apasakka</u>	私は味方がいない
191	イエガラカ。	<u>i=ekarka(r)</u>	のである
192	キークシリシユ。	<u>ki (h)i kus kusu</u>	それであるから
(51)			
193	ラムチシユウエ。	<u>ramu ci=suye</u>	よく考えも
194	イエガラカエ。	<u>i=ekarka(r h)awe</u>	したのだが
195	ヲガイヲツタ。	<u>okay (hi) otta</u>	そうして
(52)			
196	イモイレヤツカ。	<u>i=moyre yakka</u>	私は遅くなったが
197	アンノチツ° エ。	<u>anno ci=tuye</u>	すっかり切りつくした
198	ア子カラカワ。	<u>an=ekarka(r) wa</u>	のだった、そして
(53)			
199	アランマツクシユ。	<u>a ranma kusu(?)</u>	いつでも (?)
200	アムデムシ。	<u>a=mut emus</u>	私が身に帯びた刀
201	シヤンニツカシ。	<u>san nit kasi</u>	先に出る柄の上に
202	アノテツカイ。	<u>an=otekkaye</u>	手を伸ばした (?)

- 180 イセラムゲシタ:不詳。「シランケシ sirankes【動0】夜明け近くなる;< sir「あたり」an「夜」kes「～の下端」。(中川辞書 221)か。だとすれば i=(?)sirankes-e ta「その・翌日の(?)・夜明け近く に」というような意か。あるいは、「ram-kes (-e)下腹部; 腹の底 (6) ram-kes (-e)[らム ケシ][ram (胸腹腔) + kes (尻, 下端)]《ホロボツ》(知里辞典人間篇 324)のことが。だとすれば i=si(?)ramkes-e ta「彼の・自分の(?)・下腹 に」だが、文脈とは合わない。
- 181 ツ^ニニハシイタフ:tu niwas itak「2つの 荒々しい 言葉」。「niwash adj. 荒き／～itak 荒々しい言葉／niwash itak ye／tu niwash itak ye, ene okahi tu wenpa-kamui shiroatpa(たたきつける)」(久保寺辞書稿 204)。
- 182 イキエセレコウシカ:*i-e-ser-ko-uska「その声とともに消えた(?)」。行頭の「イキエ」と同じ表記が 146 などの「イキエガラカ」にみえて i-e-karkar と思われ、だとするとイキエはたんに i-e の音が長く発音されただけで、*i=esere-kouska という語形であろう。ただし「レ」は re もしくは r、「シ」は si もしくは s。「ウシカ」は uska「消す」(他動詞)か。無理に解釈すれば「不定人称に・返事させる・と同時に消した」というような意味になるか。もしくは「serkosanu ズブリとツツ音ガスル」(久保寺辞書稿 285)、「Sere-kosanu v.i. To creak (as in opening a door). To snap or make a noise (as in shaking a cloth). To sound (as when being broken or cut asunder). The sound made in tearing cloth. The clash of arms.」などから、ser-は音を表す形態素であり、i-(e)ser-kouska「その音とともに消した(?)」というような意味になるか。「エ」と「コ」の間の 2 文字が読み取りづらいが、にかほ本は明確に「セレ」と読める。
- 184-185 イヤコツイマ／コシラムシユイ:*i=yay-ko-tuyma／-ko-si-ram-suy。「私はじっくり考えた」。現代の叙事詩でもよくみられる 2 行 1 句。現代語では yaykosiramsuye「考える」が各地で記録されている。沙流方言などでは yaykotuymasiramsuye「ずうっと長い間考えている」(<一人で・遠く・自分・心・をゆらす) (自動詞、田村辞書)という語形がある。語末がイなのは y ではなく ye を表したのかもしれない(深澤美香 2017 など)。なお、yay がイヤと表記される例は 54「イヤケムイカ」にもみられる。句頭のイはも不定人称接辞 i=と思われる。「yaykotuyma siramsuye【自動】[人称変化は他動詞型][yayko-tuyma si-ram-suye 一人で・遠く・自分・心・をゆらす] [雅]ずうっと長い間考えている。」(田村辞書 858)、「ヤイコトウイマシラム スイエ yaykotuymasiramsuye【動1】(単)ヤイコトウイマシラム スイバ yaykotuymasiramsuypa (複)。考える。思いを巡らせる。<yay-「自分」ko-「～に対して」tuyma「遠く」si-「自分の」ram「心」suye「～をゆらす」(中川辞書 387)。
- 186 イ子ヲカイ:inne okay「たくさん ある」。「イ子」とあるが inne「多い、たくさんである」のことと思われる。
- 187 イ子モシリノ:inne mosir no「大人口の 国 の(?)」。最後の「ノ」は不詳。場所格か。
- 188 チバヨカイデツ:ci=payokay tek「歩き回って(?)」。
- 189 シユンツ^ミ:*siyun tumi(?)「大いなる戦争(?)」。後半「ツ^ミ」は tumi「戦争」。「シユン」は不詳だが文脈から見て「大きな(?)」というような語で語形は*siyun か。
- 190 チアバシヤツカ:*ciapasakka(?)「味方がいない(?)」。次行が「イエカラカ」つまり i=ekarka(r)「私はそうである」という代動詞句なのでこの行は人称接辞のない動詞句である。「chiapakore 加勢を与ふ」(久保寺辞書稿 37)、「Chiapakore, チアバコレ, 優待スル. v.t. To treat hospitably.」(パチラー辞書 72)から類推すると「味方がいない」の意か。語構成としては*ci-apa-sak ka で apa-sak「身内・がない」を ci=ka で挟んで同意としたものか。apa-sak については「apa-sak 親類もない。寄辺なき」(久保寺辞書稿 19)、また 066-098 にもみえる。
- 191 イエガラカ:i=ekarkar「のである」。にかほ本は 191～193 が脱落している。194 にも「イエガラカエ」があるため誤ったか。
- 192 キークシリシユ:ki (h)i kus kusu「したので それで」。リはクの誤記か。
- 193 ラムチシユウエ:*ramu cisuye「よく考える(?)」。ラムは ramu「心」。チシユウエをそのまま転写すれば*ci=siwwe となるが*siwwe は解釈できない。su-u-(y)e のように母音が伸ばされただけであり、行全体で*ramu ci-suye「心を 私は・揺らす」だと思われる。184-185 と同じような意味ではないか。「ラム/ラム スイエ ram(u) suye 【連他動】...をなぐさめる、(子ども)をあやす、...をなだめすかす」(田村辞書 557)は文脈に合致しないように思われる。
- 194 イエガラカエ:i=ekaraka(r h)awe「私がした様子」。にかほ本では「エイガラカウエ」とする。にかほ本のウはラの誤記かもしれない。形式名詞 hawe「～の様子」で終わっているのが、次行の「ヲガイオツタ」がそれを受ける。
- 195 ヲガイオツタ:*okay (h)i otta「そのときに」。現代沙流方言では、動詞+hi+oro ta もしくは動詞+hi+ta であり、この表現のような動詞+hi otta (<or ta) は韻文でもみられないが、解釈は可能である。なお、にかほ本はガをカとする。
- 196 イモイレヤツカ:*i=moyre yakka「私は遅くなったが」。にかほ本は「イモエヤツカ」とする。この i=は主格か。58 を参照。
- 197 アンノチツ^エ:anno ci=tuye「すっかり 切りつくした」。「anno すっかり／annotuipa すっかり打負かされる」(久保寺辞書稿 16)。
- 198 ア子カラカワ:an=ekarka(r) wa「私はして」。あるいはたんに「ワ」は「ラ」の誤記かもしれない。
- 199 アランマツクシユ:a(?) ranma kusu「いつでも(?)」。この行は解釈しにくい。韻文にしばしばある、人称接辞(ここでは a=)と動詞(次行の mut「佩く」)の間に副詞要素(ここでは ranma kusu「いつも」)を挿入する語法か。あるいは行頭の a は次行の a=が繰り返して先に置かれているだけなのかもしれない。あるいはたんに a=ramu wa kusu「私は考えたので」かもしれない。
- 200 アムデムシ:a=mut emus「私が・佩く・刀」。
- 201 シヤンニツカシ:san nit kasi「先に出る 柄 の上」。田村辞書に「サンニツ sannit【名】 [概] (所は sannici サンニチ) [san-nit 前へ出る・柄(え)] [雅] (次の合成語の後部要素として) op-sannit オ@ブサンニツ 槍の柄の後ろのほう。」(田村辞書 605)とある。
- 202 アノテツカイ:*an=otekkaye「私が手をかける」.*o-tek-kaye「そこに・手・を曲げる」か。ただしこのような用例は未出。

(54)

203	シヤヤシヤラカタ。	saya sara ka ta	鞆の端の上に
204	へツケムカ。	hetke muka(?)	飛び出す刃 (?)
205	コセ <u>ベツケ</u> 。	kosepekke(?)	刃が鳴り

(55)

206	シ <u>アツ</u> シヨイ子。	si asso ene	反対側の席に
207	タンレツペカ。	tan rek(?) peka	その喉のところに
208	アコタムシユイ。	a=kotamsuye	刀をふるった
209	ア子タメムコ。	an=etamemko-	刀の半分が
210	セプコシヤム。	-sepkosam	パタリと鳴った

(56)

211	ヲマイシヨカタ。	omay so ka ta	席にいた
212	カモイ子アング。	kamuy ne an ku(r)	神なる人の
213	ベンレグチ。	penrekuci	喉首
214	アンタメツ°イ。	an=tametuye	を掻っ切った
215	シロシマモイレ。	sirosma moyre	倒れて静かになった (?)

(57)

216	ユプケレチ。	yupke réra	強風に
217	アンコノイ。	an=konoye	もつれて
218	リコプイチヤ。	rikopuyca	天窓
219	コヤゝアチム。	koyayacimu(?)	の前で息が止まり (?)

(58)

220	アヤウエンヌカル。	a=eyaywennukar(?)	私は苦しくなって
221	ヲカダムゴテ。	oka(?) tam kote	そこにあつた (?) 刀をとり
222	ア子タメ <u>ドツカ</u> 。	an=etametukka	刀をふるった (?)
223	セフコシヤム。	sepkosam	パタリと音がして (?)

(59)

224	タシヤタメキレ。	tasa tamekire	彼は応戦して刀をふるい (?)
225	ヌイラヨチ子。	nuy rayoci ne	それは炎の虹のように
226	イヤラカムカ。	i=arkamka	私を覆った (襲った)

- 203 シヤヤシヤラカタ:saya sara ka ta「鞆の尾(?)の上に」。saya は日本語「鞆」の借用語。「saya【名】[概/所] [＜日本語] (刀などの刀物の)さや(鞆)。(田村辞書 613)。「サヤ【saya】鞆(さや):鞆のことはシリ カとも言うし、ケブシ ベトと言う場合もある」(萱野辞書 257)。
- 204 ヘツケムカ:hetke *muka「急に飛び出す 刃(?)」。ヘツケは hetke「急に飛び出す」。ムカは不詳だが muka は mukar「まさかり」か。「hetke【自動】[het-ke (擬態の語根)・(自動詞形成)](口からなど)急に飛び出す。」(田村辞書 187)。あるいは「Hekem, ヘケム, 引張ル.v.t. To draw. To drag.」(バチラー辞書 156)と関係あるか。
- 205 コセベツケ:*kosepepke「音がする(?)」。にかほ本ではベツに下線がないが、下線があるほうが正しいであろう。*sepep は擬音語か。「kosepepatki【自動】[ko-sepep-atki (擬音を導く)...が(擬音の重複)・(動詞接尾辞)](次のような慣用表現で)(雨などの音が)ザアーツと/パラパラパラと鳴る。」(田村辞書 339)。なお、田村辞書にみえる kosepepatki の-atki は自動詞形成接尾辞である。「-atki【接尾】(自動詞をつくる。限られた決まった語にのみ現われる。)」(田村辞書 33)。*sepep を擬音語由来の動詞語根とする、*ko-sepep-ke「音がする」という語構成も不自然ではないと思われる。
- 206 シアツシヨイ子:si asso ene「大きな 反対側の席 に」。si-ar という組み合わせは現代語でもみられる。
- 207 タンレツベカ:tan rek peka「その 喉 の場所を」。あるいは tan rep peka「その 炉 の場所を」か。「喉」のほうが文脈に合うが、peka は面的な場所を意味するので「炉(＜沖)」かもしれない。そうであれば、炉を挟んで反対側から刀をふるったということになろう。
- 208 アコタムシユイ:a=kotamsuye「私は・～に対して刀をふるった」。カナ表記は「シユイ」となっているが、自動詞 suy ではなく他動詞 suye と思われる。ye をイと書いていると思われる例は他の箇所でもみられる。つまり ye なのか・y なのかはカナ表記からは必ずしも判別できない。a=kotamsuye という語形は金成マツ(1961:188)にみられる。
- 209-210 ア子タメムコ/セブコシヤム:*a=e-tam-emko-/sepkosam(?)「私は・そこに・刀・の半分を/パタリと鳴る(?)」。*-sepkosamはその語形では未出だが、036「マツコサム」のように現代語で-sanu となる語尾の一部が「シヤヌ」ではなく「シヤム」となっている例があることから、現代語 serkosanu「音がする」と同義と思われる。「serkosanu ズブリとツ音ガスル」(久保寺辞書稿 285)「Sere-kosanu, セレコサヌ, 輾ル.v.i. To creak (as in opening a door). To snap or make a noise (as in shaking a cloth). To sound (as when being broken or cut asunder). The sound made in tearing cloth. The clash of arms.」(バチラー辞書 442)。
- 214 アンタメツイ:an=tam-e-tuy(e)「私は・刀・のところを・切る」。カナ表記は最後がイとなっているが、y ではなく ye と思われる。a=tametuye という語形は金成マツ(1965:253)にみられる。
- 215 シロシマモイレ:sirosma moyre「倒れて静かになった(?)」。moyre「遅れる」だが転じて「静かである」の意であろう。「シロシマ sirosma 【動1】 べたつと座る。座って動かなくなる。倒れる; < sir「大地」osma「～(場所)に突っ込む」。(中川辞書 227)。「sirosma【自動】[sir-osma 地・に突進する] 地に落ちる。」(田村辞書 657)。039も参照。
- 216 ユブケレチ:yupke réra「強い 風」。チはラの誤記と思われる。にかほ本はチをテとする。
- 217 アンコノイ:an=konoye「私は・(風に)もつれて」。an=は不定人称。「konoye 縋ふ /umau-konoye 相もつれる(mau 風)」(久保寺辞書稿 159)とある。語末はイと表記されているが y ではなく ye であろう。
- 218 リコプイチャ:rikopuyca「高い窓の口」。riko-(rik-o)は「上方にある」の意。puy「穴」、-ca「口」(ただし合成語中で)。「rikoma puy. =rikun puyar(樺)天窗」(久保寺辞書稿 268)とある。oma と o はこの場合はほぼ同義である。
- 219 コヤ>アチム:koyayasin(?)「息を止めた(?)」。この行は意味がとれない。「コヤ>」は ko-yay-「～に対して・自ら～」と思われるが、その後がわからない。語末の「ム」は mu「ふさぐ」などか。あるいは ci=mut「我々が・佩く」などか。バチラー辞書に「Yaiashin, ヤイアシン, 自カラ脱出スル.v.i. To come out by one's self.」(バチラー辞書 559)とある。だが「吹き出る」では文脈に合わなさそうである。後出の 295-296 と並べてみると文脈から「息を止めている」というような意味かもしれないが、人称形式が合わない。217-219 の 3 行で 1 単語かもしれない。
- 220 アヤウエンヌカル:a=e-yay-wen-nukar「私は・苦しくなつて」。「yaywennukar【自動】[yay-wen-nukar 自分・悪い・...を見る] 苦勞する、どうしようもなく困る、なんぎする、つらい(「せつない」)。(田村辞書 869)、「ヤイウエンヌカラ 【yaywennukar】苦しむ:肉体に痛みを感じる、つらい」(萱野辞書 438)、「koyaiwennukar tapan ruyampe~, ki shiri he an この暴風に得堪へざることあるべしや」(久保寺辞書稿 168)。220「アヤウエンヌカル」、227「アヤウエンヌガル」、293「アヤウエンヌカラ」、442「アヤウエンヌカル」の計 4 回出現するが、いずれもおそらく他動詞化接頭辞 e-が聞き落とされている。
- 221 ヲカダムゴテ:oka tam kote「」。oka「後ろ」tam「刀」kote「～をつなぐ」だが、oka に先行詞がないのが気になる。
- 222 ア子タメドツカ:an=e-tam-etukka「私は・そこで・刀・を突きだした(?)」か。an=e-tam-etok-ka(?)「私は・そこで・刀・の先・の上(?)」か。次の「セフコシヤム」と合わせて「パタリと音を立てて～した」というような構成の 2 行 1 句かもしれない。
- 223 セフコシヤム:sepkosam(?)。210 を参照。「パタリと音がする」くらいの意か。
- 224 タシヤタメイキレ:tasa *tameykire「お返しに 刀で切った(?)」。タシヤは副詞 tasa であろう。「タサ tasa2【副】 お返しに。反対に。」(中川辞書 244)。タメイキレは*tam-e-iki-re「刀・～で・する・させる」あるいは*tam-e-kere「刀・で・触る」というような語か。「tamkirune 刀ヲ返シザマニ、返ス刀ニ」(久保寺辞書稿 318)、金成マツの tasa tamkuri「返す太刀影」(1964:289、第 5 巻 290)などと類似の表現か。
- 225 スイラヨチ子:nuy rayoci ne「炎の 虹のごとく」か。
- 226 イヤラカムカ:*i=ar-kamu-ka「私を・全く・被さる・させる」か。現代の沙流・千歳方言などでは「kamure【複他動】「kamu-re ...にかぶさる・させる」...に...をかぶせる。」(田村辞書 270)など、使役語尾-re が用いられるが、ここでは他動詞化語尾-ka が用いられている。

(60)

227	アヤイウエンヌガル。	<u>a=eyaywennukar(?)</u>	私は苦しくなって
228	ヲマイシヨカタ。	<u>omay so ka ta</u>	寝床の上で
229	チヤノウラゝマウ子。	<u>cano úrar maw ne</u>	薄い霞の風のように
230	アンツ° イコシヤヌ。	<u>an=tuyekosanu</u>	私は (刀で) 切った

(61)

231	クン子シヨシヤムメ。	<u>kunne-sosam-e-(?)</u>	黒い壁際に (?)
232	チカフレウセレ。	<u>-cikap-rewsire</u>	鳥が止まっている
233	アイシコバヤラ。	<u>ay=sikopayar</u>	かのごとく
234	シタフカヘカ。	<u>sitapka peka</u>	肩の上で
235	チカフヲグレマ。	<u>cikap okisma</u>	鳥の尾をつかんだ (?)

(62)

236	アンコシキル。	<u>an=kosikiru</u>	私は振り向き
237	アニンガラクシユ。	<u>an=oinkar kusu(?)</u>	そちらを見ると (?)
238	センラムゴラ。	<u>senram kor a</u>	先刻通りに
239	ヲマイシヨガタ。	<u>omay so ka ta</u>	寝床の上に

(63)

240	カムイ子アング。	<u>kamuy ne an kur</u>	神なる人
241	ツマムヌシテ。	<u>tumamu noske</u>	胴体の真ん中を
242	ア子ツ° イカ。	<u>an=etuyka(?)</u>	私は切った

(64)

243	モコルベホツケ。	<u>mokor pe hotke</u>	眠った者は横たわった (?)
244	子カンナユカ。	<u>ne kanna yuka(?)</u>	かのようなであり
245	ア子アコシंगा。	<u>an=eyaykosinka-</u>	私は疲労困憊しながら (?)
246	子チウガン子。	<u>-neciw(?) kanne</u>	そうでありながらも (?)

(65)

247	ケウベンラム。	<u>kew penramu</u>	その体の胸元を
248	アムコアンバ。	<u>a=mutkoanpa(?)</u>	私は抱きかかえ (?)
249	シヨイゴバケ。	<u>soy kopak(k)e</u>	戸口近くまで
250	アイシラエ。	<u>ay=siraye</u>	行った

(66)

251	キロゝブデ子。	<u>kiroroptene(?)</u>	全力で (?)
252	アシヲトゝ。	<u>a=siwototo</u>	並べて置いた (?)

- 227 アヤイウエンヌガル: a=eyaywennukar(?)「私は苦しくなって」。220を参照。
- 229 チヤノウラマウ子: can úrar maw ne「薄い・霞・の風・のごとく」か。「チヤノウラ」という表記は /tʃanurar/ を表記しようとしたものか、あるいは can ではなく can-no という語形があったか。
- 230 アンツ^o イコシヤヌ: *an=tuye-kosanu「私が・切る・さつとする」か。
- 231-232 クン子シヨシヤムメ/チカフレウセラ: *kunne-so-sam-e /-cikap-rewsi-re「黒い・座・のそば・そこに/鳥・をとまる・させる」というような表現か。あるいは「シヨシヤムメ」は「sosamotpe【名】[so-sam-ot-pe 座・のそば・にある・もの]壁に掛かっている刀。」(田村辞書 677)の類似表現で、例えば *so-sam-un-pe「壁にあるもの」か。あるいはひょっとすると 231 の最後のメはンの誤記であり、kunne so sam un「黒い・座・のそば・にいる」の意かもしれない。
- 233 アイシコバヤラ: ay=sikopayar「私は・そうするかのごとく。助動詞として 231-232 の動詞を受ける。「シコバヤラ sikopayar【動2】〜のごとくである。〜のようである;< si-「自分」kopa〜と間違える-yar「〜させる」。(中川辞書 211)
- 235 チカフヲゲレマ: cikap okisma「鳥の尾をつかむ」か。「ゲレマ」のレはシの誤記で kisma「〜をつかむ」(他動詞)と思われる。先行するヲは「尾」を表す語彙的接辞 o もしくは ho-か。にかほ本ではゲをケとする。
- 237 アンガラクシユ: an=oinkar kusu「そちらを見ると」か。音形からは *an=inkar「見る」(自動詞)としたいところだが、人称接辞 an=が前接するのはおかしい。=an として後接するはずである。したがって oinkar「〜の方を見る」であろう。「オインカラ oinkar【動2】①〜の方を見る。②(カムイが)〜を見守る;(参照)コインカラ koinkar。< o-「〜の方を」inkar「見る」。(中川辞書 111)。「koninkar kusu【副】[ko-n-inkar kusu] それに(?)・(挿入子音)・見る(?)・ために][?] [雅](これから話を始めようとするときに相手の注意を求める言葉。)よく聞いて下さい。」(田村辞書 327)、「koninkarkusu さても、いざとよ、さてとや、いざや」(久保寺辞書稿 159)にみられる koninkar kusu と同系統の類語か。koninkar kusu は現代の叙事詩にも頻出する。にかほ本ではガをカとする。
- 238 センラムゴラ: senram kor a「以前の通り(?)」。「senram sektor【副】いつものことだが。」(田村辞書 616)の類語か。バチラー辞書には「Senram korashiu, センラムコラシユイウ, 前ノ通, 従前ノ如ク, ph. As before. As usual.」とある。これは senram kor a suy であろう(siw は suy の音位転倒)から、senram kor a は「前の通り」であろう。
- 239 ラマイシヨガタ: omay so ka ta「寝床の上に」。にかほ本はシヨをシヨとする。より正確である。
- 241 ツمامヌシテ: tumamu noske「その胴体の 真ん中」。ヌはノの母音の誤り、テはケの誤記か。
- 242 ア子ツイカ: an=etuyka(?)「私は・そこで切った(?)」か。tuy「切れる」の他動詞形は tuy-e だが、*tuy-ka という語形があったのかもしれない。
- 243 モコルベホツケ: mokor pe hotke「眠った 者が 横たわった」か。これは死んで倒れたことを表しているのか。
- 244 子カンナユカ: n, ekannayuka(r)「あたかも〜のようである」か。最初の n は虚辞のようなものではないか。あるいは「子カンナシユカ」の誤記で、ne kanna su(y) ka「もう再びも」というような意味か。
- 245 ア子アコシンガ: an=e-yay-ko-sinka(?)「私は疲れた(?)」(<私は・そのことについて・自ら・に対して・疲れる)か。あるいは 256 「ア子アヨレンカ」の誤記で、an=e-yay-renka「私はそのことで喜んだ」か。あるいはレのみシの誤記で、an=e-yay-korenka「私は納得した(?)」(<私は・そのことについて・自ら・に承知する)というような意味か。あるいは「うれしい, 喜ぶ/yayko'arenka; 'uminare」(方言辞典 162 美幌)の類語かもしれない。
- 246 子チウガン子: neciw(?) kanne「こそを(?) ながら」。か neciw は nesi のような強調詞か。
- 247 ケウペンラム: kew penramu「体(遺体)の胸」。現代語では kewe penramu のように両語とも所属形になりそうに思われる。
- 248 アムコアンバ: a=mutkoanpa(?)「私は・運んだ(?)」か。「ウコアンパ ukoanpa【動2】〜を一緒に持つ」(中川辞書 58)。あるいは an=ukoanpa(カナ表記であれば「アヌコアンバ」)の誤りか。
- 249 シヨイゴバケ: soy kopak(k)e「外」の近く」。にかほ本は「バ」を「ハ」とする。
- 250 アイシラエ: ay=siraye「私は寄った」。「シライエ【si- raye】寄る」(萱野辞書 272)は自動詞なので、前行の最後に場所格助詞 ta などが欲しいところである。
- 251 キロブデ子: kiroro yupte(k) ne「全力で(?)」か。「Kiroro-yuptek-no, キロロユブテクノ, 力強く. adv. Powerfully.」(バチラー辞書 255)。
- 252 アシヲト: a=siwototo(?)「(私は)並べて置いた(?)」。バチラー辞書に「Aishiwototo, アイシウオトト, 並べて置く v.i. Set in orderly array. Syn: Anshiwototo.」(バチラー辞書 23)とある。語頭は不定人称接辞 an=(s の前で n>y)。

(67)

253	ヲロワカイキ	orowa <u>kayki</u>	それから
254	アウコハケ。	aw(?) <u>kopake</u>	隣の方 (?)
255	アノシライハ。	an= <u>osiraypa</u>	へ出た (行った)

(68)

256	ア子アヨレンカ。	an= <u>eyayrenka</u>	私はほっとして (?)
257	子イレカン子。	neire <u>kanne</u>	何かと (?)
258	ヤイノワシ。	yaynu= <u>as</u>	考えた

(69)

259	子モシリウンベ。	ne mosir un pe	この国の者
260	アンコロコタン。	an= <u>kor kotan</u>	私の村
261	アラバシヤキ子。	arapasakne	身寄りのない者
262	アンキマノクシユ。	an= <u>ki manu kusu</u>	で私はあるから

(70)

263	ツ° ミアニ。	tumi ani	戦争で
264	チラメイラト。	cirameirara	私を馬鹿にした (?)
265	イエガラカ。	<u>i=ekarka(r)</u>	ことをした
266	キイロキケ。	<u>ki rok ike</u>	そうしたものだから
267	チアンノツ° イ。	<u>sianno tuye</u>	本当に切って
268	ア子ガラカ。	an= <u>ekarka(r)</u>	しまった

(71)

269	クホロワノ。	tap orowano	これから
270	イ子イ子カ。	enene ka	このように
271	子フチシヤシユルカ。	nep cis= <u>as korka</u>	何を泣いたところで
272	チアラキン <u>テツ</u> カ。	ciarkintek ka	美しい (?)
273	イキコロカイキ。	iki korokay ki	としても

(72)

274	ヘン子子一タ。	henne ney ta	決してどこに
275	ツカイグルー。	okay kur	いる者でも (?)
276	ヘン子シロマノ。	henne siromano	決して静かに
277	ヲカイケ (※)	okayke	暮らしておらず (?)

(※) 句点脱落

- 254 アウコハケ:*aw-kopake「家・の方」。「コパク, ーツケ kopak, -ke【位名】〜の方。〜近く;コパク サム kopaksam も同義。」(中川辞書 188)。田村すゞ子は「kopak コパク【位名】...の方(方面、方向)。(田村辞書 330)、「kopaki コパキ【位名】[所](概は kopak コパク)その方向にあつて近く。」(田村辞書 331)、「コパツケ kopakke【位名】[所](概は kopak コパク)[kopak-ke の方・の所]...の方(方面、方向)、...の近くのところ。」(田村辞書 331)とし、所属形を kopaki, kopakke の 2 種あげている。カナ表記をそのままローマ字化すれば *kopake となり、どちらとも一致しない。ただし、バチラー辞書は kopake, kopakke の 2 種をあげ、1 種は一致する。「Kopake, コパケ, 側ニテ. adv. By the side of. Near to. Syn : Samata.」(バチラー辞書 267)「Kopakke, コパツケ, 側ニテ. adv. By the side of. Near to. Syn : Samata.」(バチラー辞書 267)。久保寺は「kopak(-e) 「方」の関係を表はす格類の形式 (散文的) / ~sam(a) / kopak(-ta) 方(に) / kopaki(-ta) その方(に)」(久保寺辞書稿 160)とあり一致する。
- 255 アノシライハ:an=osiraypa「私は・外へ出た」。「osiraypa オシライパ【他動】[複](単は osiraye オシライエ)(二人以上が/神が)...に行く/来る/入る/出る。」(田村辞書 486)。
- 256 ア子ヨレンカ:an=eyayrenka「私は・ほっとして(?)」。「ヤイレンカ yayrenka【動1】声をあげて喜ぶ。」(中川辞書)。にかほ本はレをシとする。an=e-os-inkar
- 257 子イレカン子:*nére kanne「何かと(?)」。「カン子」は強調の kanne か。子イレは neera「どのように、何」(樺太方言)と同系の語か。語頭にアクセントがある *nére というような語形か。
- 258 ヤイノシ:aynu=as「(私は)考えた」。にかほ本はイをエとする。aynu-uwasi ではなく yaynu=as か。人称形式は as より an にそろっているべきなので、シはンの誤記かもしれない。
- 261 アラバシヤキ子:*ar-apa-sak (h)ine「全く・親戚・欠く して」。ここでのキは k ではなく ki と思われる。066, 098 も参照。
- 264 チラメイラ:*ci-ram-e-irara(?)「不定人称・心・で・軽んじる」(?)。e-irara は未出だが、自動詞 irara「軽んじる」に e がつくのは不自然ではない。なお、次行の i=ekaraka(r)が実際の人称形式として 1 人称目的格「私のことを」を表している。
- 267 チアンノツイ:sianno(?) tuye「本当に 切った」。cianno は sianno「本当に」の聞き誤りか。あるいは実際にそのような発音だったのかもしれない。語末の「イ」は y でではなく ye であろう。
- 269 クホロワノ:tap orowano「それから」。クはタの誤記と思われる。
- 270 イ子イ子カ:enene ka「このように(?)」。「にかほ本はイ子カとする。つまり ineineka もしくは ineneka という語形が想定できる。enene「enene エネネ【副】[ene-ne このように・(重複)](ene エネ の強調形)」(田村辞書 99)。「Ene-neika, エネネイカ, 其ノ通り. adv. In that way. So. Thus. As :—Ene neika shomo ahi, "it has never been so before.」(バチラー辞書 118)。
- 271 子フチシヤシユルカ:nep cis=as korka「何を 私が泣いた としても」。ユはコノ誤記と思われる。
- 272 チアラキンテツカ:*ciar kis tek ka「美しい(?)」。「047「チアラゲシテツカ」と同じであろう。047 に付された傍訳では「女神」とある。
- 274 ヘンネ:henne「決して」。henne は senne などと同じ否定副詞であろう。
- 275 ツカイグルー:okay kur「いる者」。ツはヲの誤記か。
- 276 シロマノ:siroma no「静かに(?)」。「シロマ siroma【動1】立派である。ちゃんとしている。」(中川辞書 227)。「Shiroma-no, シロマノ, 平和ニ. adj. Peaceably.」(バチラー辞書 469)。
- 277 ヲカイケ:okayke<okay (h)ike「暮らしている」。この行は「。」が脱落している。

(73)

278	ケシナシヤンタ。	<u>kes na san ta(?)</u>	毎日 (?)
279	ホダシノケウツ° ム。	<u>hotasnu kewtum</u>	不安な気持ちを
280	アヤイコレワ。	<u>a=yaykore wa</u>	感じながら
281	ヲカヤン。	<u>okay=an</u>	暮らしていた

(74)

282	タンシ子アニ。	<u>tan sineani</u>	そんなある日
283	アヌンチャシ。	<u>an=un cási</u>	私がいる館
284	チャシフカ。	<u>cási poka</u>	館のあたりに
285	ケウコシヤン。	<u>kewkosanu</u>	大きな音がして

(75)

286	カンカムイ (※)。	<u>kannakamuy</u>	カンナカムイが
287	ツ° ニウエンフミ。	<u>tu niwen humi</u>	おそろしい音を立てて
288	イヲシリボソ。	<u>iosirposo</u>	空中をつらぬき

(※「ンカ」の右隣に「ナ」と追加してある)

(76)

289	リコフイチャタ。	<u>riko puyca ta</u>	天窓に
290	ツ° カイタンメレ。	<u>tu kay tan meri</u>	2つの折れ曲がるこの光 (?)
291	イコツ° イマ。	<u>i=kotuyma-</u>	私に対して遠く (?)
292	ウカイリ。	<u>-ukairi</u>	互いにしわが寄り (?)

(77)

293	アヤウエンヌカラ。	<u>a=eyaywennukar(?)</u>	私は苦しくなって
294	タン子シヨシヤ。	<u>tanne sosa(?)</u>	長い敷物の先で (?)
295	アンコヤトチム。	<u>an=koyayacimu(?)</u>	息を止めて (?)
296	イヨカイ子。	<u>iy=oka ene(?)</u>	その後ろから (?)

(78)

297	カムイタメキレ。	<u>kamuytamekire</u>	神刀をふるい
298	アンコトマセ。	<u>an=kotomase</u>	力が漲り
299	イワンルグン子。	<u>iwan ru kunne</u>	6筋の切り込みに
300	アヌコツイ。	<u>an=kotuye</u>	切り刻んだ

(79)

301	インガラアンコ。	<u>inkar=an ko</u>	見てみると
302	ヲマイシヨカタ。	<u>omay so ka ta</u>	目の前に
303	アイヌヘ子ワ。	<u>aynu he ne wa</u>	人間だろうか
304	アシポガイキ。	<u>as poka iki</u>	立っている

- 278 ケシナシヤンタ:*kesna san ta(?)「毎日(?)」。あるいはナはタの誤記で前半部は kesta「毎日」か。だが後続の san ta も不詳。あるいは樺太方言 kesto asin koh「毎日」と関係があるか。
- 279 ホダシノケツム:hotasnu kewtum「不安な 気持ち」。「hotasnu ホタシヌ【自動】(...のことは)不安である、非常な危険を感じる。」(田村辞書 205)。
- 283 アヌンチャシ:an=un cási「私が・いる 館」。029 参照。
- 284 チャシフカ:cási poka「館だけでも」。にかほ本はチャーシフカとする。「チャー」と引き棒が付されているのは高アクセントを表記したものか(これについては、佐藤知己 2009 を参照されたい)。4 音節しかないので cási の á を実際に長くも発音したと思われる。なお、「フカ」は音形が完全には一致しない。poka「だけでも」ではなく、pok ka「近くにも」、peka「のあたり」などの可能性もあるか。
- 286 カンカムイ:kannakamuy「雷の神」。「ンカ」の右隣に「ナ」が追加されている。つまり「カンナカムイ」ということであろう。にかほ本は明確に「カンナカムイ」とする。
- 288 イヲシリポソ:i·o·sir·poso(?)「あたりをつらぬき」。「oshirposo ぬけ出る」(久保寺辞書稿 227)。「o·nis·poso「空をつらぬく」の類語か。「オニシポソ onisposo 【動1】 空から落ちる;<o-「~の尻が」nis「空」poso「~を通り抜ける」」(中川辞書 113)、「onisposo オニシポソ【自動】 [o·nis·poso その尻が・空・をつきぬける] (雷、星が)落ちる。」(田村辞書 470)。
- 290 ツカイタンメレ:tu kay tan meri(?)「2つの 折れる この 光」(?)。
- 291-292 イコツ イマノウカイリ:i=ko·tuyma- / -ukay·re(?)「私の方に向かって落ちる (<私に・対して・遠く／しわがよる・させる)」。にかほ本はウカイリをウカエリとする。
- 293 アヤウエンヌカラ:a=e·yay·wennukar「私はそれで苦しくなって」。220 を参照。
- 294 タン子シヨシヤ:tanne so sa(?)「長い敷物の先(?)」。so「敷物、席」を tanne「長い」と形容するのは見慣れない表現だが、この 294-295「タン子シヨシヤ アンコヤムチム(tanne sosa koyayacim(u))と並行的な表現の 218-219「リコプイチャ コヤムアチム rikopuyca koyaya(a)cim(u)」を考えると、tanne sosa は rikopuyca「天窗」のような何らかの場所を表すと思われる。ということはやはり tanne so sa「長い敷物の先」という解釈ができそうである。あるいは、そうではなく「sosamotpe【名】[so·sam·ot·pe 座・のそば・にある・もの]壁に掛かっている刀」(田村辞書 677)と関係があるのかもしれない。231-232 も参照。
- 295 アンコヤムチム:an=koyayacimu(?)「私は息を止めて(?)」。この行は意味がとれない。219 コヤムアチムと同語と思われる。ただし、あるいは 295-296 が 1 単語で、アンコヤムチム / イヨカイ子:an=ko·yaya(n)·cimu(t) / -i=yok(o)·ayne(?)「私は・ただの刀を / 構えて (<私は・へへ・ただの・刀・私に・狙い・して) (?)」というような語構成なのかもしれない。だとすると 219 の解釈も再考が必要となる。
- 297 カムイタメキレ:kamuy·tamekire「神の刀をふるい」。224 タシヤタメキレを参照。396 カムイタメキリという表記もみられる。
- 298 アンコトマセ:an=kotumasi(?)「私は・力いっぱい」(?)。tumasi は tum·asi「力を立てる」転じて「力が強い」というような意味か。前行と合わせて「神刀をふるうことを / 力いっぱいにした」。

(80)			
305	イヲシリガシユ。	i=osirkasiw(?)	その人は立っていた (?)
306	ツ° <u>ヘゲツチュツキ</u> 。	tu peket cupki	2つの明るい光
307	チュツキツ° ム。	cupki tumu	その光の中に
308	アヌラボガ。	an rapok ka(?)	あったのだが
(81)			
309	イウエノガン子。	i=raye <u>kanne</u> (?)	私に襲いかかり (?)
310	イ子シレカタ。	in= <u>esirekatta</u>	私を地面に引き倒した
(82)			
311	カ子コソテ。	<u>kane kosote</u>	金の小袖を
312	ツ° イベレベ。	<u>tu pe re pe</u>	2つも3つも
313	アルボゲチユ。	<u>arpokeciw</u>	着ていた
(83)			
314	ヤラギボキタ。	yarke poki ta	わきの下に
315	クン子シヤヤ。	kunne saya	黒い鞆
316	イウ子イムシ。	i un emus	に入った刀
317	ヤイツ° ンバヲ。	yaytunpao-	鏢にはまって
318	ビウエガン子。	-piwe kanne	押し出して
(84)			
319	イムシニ子ツガシ。	<u>emus nip nit kasi</u>	刀の柄である棒の上に
320	子プカムイノカ。	<u>nep kamuy noka</u>	何の神の姿か
321	チアライデツカ。	ciar itekka(?)	美しい (?)
(85)			
322	キムイガシケタ。	<u>kimuy kasike ta</u>	頭の上に
323	レタラバイガシヤ。	retar <u>paykasa</u>	白い笠を
324	ヤイケムイガ。	<u>yaykimuyka</u>	自分の頭上に
325	ラレカン子。	<u>rari kanne</u>	被って
(86)			
326	ヲシマガワ。	<u>osi maka wa</u>	後ろに (後から入って?)
327	ロシケアンベ。	<u>roski an pe</u>	立っているもの
328	アンコ <u>シツ</u> キライ。	an= <u>kosikkiray</u> (?)	私は横目で見た (?)
329	アコンラム。	<u>a=kon ramu</u>	私の心は
330	ライゴシヤン。	<u>raykosan(u)</u>	気が遠くなった

- 305 イヲシリガシユ:i=ō-sir-ka-siw(?)「立っている(?)<その・先が・地面に・刺さっている」。*siw は他動詞 ciw「刺す」の聞き誤りか。「カチウ kaciw【動2】～を突き刺す」(中川辞書 142)、「osirkaociw オシリ カオチウ【自動】[ō-sir-ka-o-ciw その尻が・地・の上・に・ささる] 下につかえる。」(田村辞書 486)。
- 308 アヌラボガ:an rapok ka(?)「いた その間 も(?)」。ka「～も」が用いられている理由はよくわからない。
- 309 イウエノカン子:i=rawe kanne(?)「私を(あるいは彼を)殺そうとして(?)」。にかほ本は「/」を「ン」とする。「ウ」を「ラ」の誤記とみなし、にかほ本にしたがえば i=rawen kanne となるか。「rawe ラウエ【他動】...を楽しみにしている。」(田村辞書 565)は文脈に合わない。むしろ「raye【他動】[ray-e 死ぬ・(他動詞形成)死なせる、殺す、皆殺しにする(?)」。(田村辞書 567)かもしれない。あるいは樺太方言の「勝つ/ ruy; wenkara」(方言辞典 75 樺太)と関係があるか。i=wenkar ne「私に勝つて」か。その場合 ne は不詳だが no と同じような用法か。
- 310 イ子シレカタ:in=esirekatta「私を・地面に引き倒した(?)」。シレカタ sirekatta 【動2】～を地面に引き倒す;< sir「地面」 ekatta「～を～(場所)にぐいっと引っ張る」。ただしここで他動詞化接辞 e がついているのは解せない。
- 311 カ子コソテ:káne kosote「黄金の小袖」。049 では「コソツツ」kosontu という語形で登場している。現代語では、北海道諸方言で kosonte、樺太方言で kosonto である。いずれも日本語「kosode 小袖」からの借用語である。ここにみられる kosote という語形は現在では用いられなくなったどこかの方言形だろうか。*kosote>kosonte という変化は考えにくい。この時代には元の日本語形の有声子音 d が保たれて kosode と発音されていたのかもしれない。
- 312 ツ イベレベ:tu pe re pe「2つも3つも」。050「ツ ーベレベ」と同じであろう。ただし、原文カナをそのままとれば、tuye perpe(r)「切り裂いた(切って 破った)かもしれない。その場合「ツ イ」は tuye ではなく tuye であろう。「破る/peré; p érapa; pérper(障子に手をつこんだ場合等)」(方言辞典 135 八雲)。
- 313 アルボゲチユ:arpok-eciw「わきの下・に差した」。現代語では yarpok だが、バチラー辞書には arpok という語形もみられる。「Arapok, アラボク, 腋下ニ. adv. Under one side. Under the arm.」(バチラー辞書 48)。
- 314 ヤラギボキタ:yarke poki ta「わき(?) の下 に」。よくわからないが、yarke pok は yar pok と同じく「わきの下」ではないか。つまり 311-314 は 049-051 と同じ「金の小袖を/2 枚も 3 枚も/着ていた」という定型表現であろう。あるいはそうでないなら yarke poki ta「破れた下に」なのかもしれないが、そうなると文意が大きく異なる。
- 315 クン子シヤヤ:kunne saya「黒い 鞆」。シヤヤは saya「鞆」(日本語からの借用語)であろう。「saya サヤ【名】[概/所] [<日本語] (刀などの刀物の)さや(鞆)」(田村辞書 613)、「sayaha サヤハ【名】[所]...のさや(鞆)」(田村辞書 613)。「Saya, サヤ, 鞆. n. A sword or knife sheath.」(バチラー辞書 439)。「サヤ[saya]鞆(さや):鞆のことはシリ カとも言うし、ケブシ ペと言う場合もある。」(萱野辞書 257)。
- 316 イウ子イムシ:i un emus「(虚辞?)～に入った 刀」。un emus では 3 音節で短いので母音 i が虚辞として挿入され、また emus の語頭母音 e が伸ばされて「ei」のように発音されたか。現在では虚辞の多くは u, ip, ep などである。あるいは i は接頭辞かもしれないが不詳。なお、語形からは「Iyun-emuspo 一番の宝刀」(久保寺辞書稿 129)も考えられるが、前行の kunne saya とつながりが悪いように思われる。
- 317-318 ヤイツンバヲ/ヒウエガン子:*yay-tunpa-o-/piwe kanne「鑿をつけてく自ら・鑿を・に・/・押す して」。2 行にまたがる句と思われる。「kopiwe v I(i) に向かって押す」(久保寺辞書稿 161)、「piwe (piupa) 押す. kopiwe (に向かって押す I i) / ~kane 刀ヲグット 差ス」(久保寺辞書稿 248)、「Piwe ピウエ, 押す. vt. To push. Syn: Oputuye.」(バチラー辞書 396)。
- 319 イムシニ子ツガシ:emus nip nit kasi「刀 の柄 棒 の上」。にかほ本は 2 文字目に「ラ」が挿入され「イラムシ子ツガシ」となっている。書写の際に「エラムシンネ eramusinne 【動2】安心する。」(中川辞書 104)、「eramusinne エラムシンネ【他動】[e-ramu-sir-ne ... で・その心・地面・だ] ...のことで安心する、...のことでほっとする(気になっていた仕事がかたづいて等)」(田村辞書 116)などと混同したか。なお、nip と nit が続くのは他では見ない。
- 320 子ブカムイノカ:nep kamuy noka「何の神の姿か」。にかほ本はブをフとする。
- 321 チアライデツカ:ciar'itekka(?)「美しい(?)」。47 チアラゲシデツカ、272 チアラキンデツカ、476 チアラギシデツカ、と同じ語と思われるが、ここではなぜ子音 k がないのかはよくわからない。にかほ本では、イをエとし、さらに語末に㊦(oで囲んだ「シ」)を付し、「チアラエデツカ㊦」とする。最後に si シが付された語形が存在するとすれば、語末要素は ka/kasi「上」なのかもしれない。
- 323 レトラバイガシヤ:retar paykasa「白い パイカサ」。「帽子/konci《頭巾》、paykasa[物語]《笠》」(方言辞典 87 美幌)とある。にかほ本はイをエとする。
- 326 ラシマガワ:osi maka「後から (戸を)開ける」か。あるいはたんに osmake wa「後から」がそのように発音されただけかもしれない。
- 328 アンコシツクライ:an=kosikkiray(?)「私は・横目で見た(?)」。よくわからない語形。sikiru「振り向く」(自動詞)、kosikuru「の方を振り向く」(他動詞)だが、「shik-kiruru 横目を使ふ」(久保寺辞書稿 290)という語形もあるようである。なお kiru は他動詞「向ける」なので、*sikkiru「目を向ける」という語はありうる。「キル kiru【動2】～の向きを変える。」(中川辞書 160)、「kiru【他動】①(向きを持っているものを) (どちらかの方向へ) 向ける、...の向きを変える。」(田村辞書 310)。カナ原文の語末が「キル」kiru でなく「クライ」kiray である理由は不明。
- 329 アコンラム:a=konramu「私・の心」。「konram コンラム【名】[kor-ram 持つ・心]その心。」(田村辞書 328)とある。
- 330 ライゴシヤン:raykosan(u)「気を失った」。*kosanu* は「さつと～する」という意味を付加する動詞接辞。ここでは前行の a=konramu「私の心」が主語となっているか。「Raikosanu ライコサヌ, 死ヌ 気ヲ失フ. vi. To die. To faint.」(バチラー辞書 406)、「raikosanu 呟ト鳴ル(raikosampa)さつと蒼ザメル」(久保寺辞書稿 256)。

(87)

331	モシケアフンベ。	<u>oske eahun</u> pe	開けて入ってきた者
332	キノ <u>タツ</u> アレ。	ki notakare	刃を置いて (?)
333	インカラクニ。	inkar kuni	見るべく
334	ポンルウエシナ。	<u>pon ruwe sina</u>	小さな道を縛り (?)

(88)

335	カムイケシヨラ。	kamuy kes ora	「神の子孫から (?)
336	<u>シユツ</u> ° イシヤムノ。	sutu isam no	理由もなしに
337	カムイツ° ミ。	kamuy tumi	神の戦いが
338	イコヤングニ。	i= <u>koyan kuni</u>	私にふりかかろうとして

(89)

339	ウラゝモシリ。	Úrarmosir	ウララモシリ (霞の国) は
340	キフセヌイゲシ。	kip(i)hi(?) nuykes	(私に?) 助太刀
341	イキガラカラリシユ。	i= <u>ekarkar</u> kusu(?)	しようとした (?)
342	イキヤコロカ。	iki a <u>korka</u>	のだけれども

(90)

343	バナツイセウラ	Panatuysé Ura(n)(?)	パナトゥイセのウララの (?)
344	ノシブルカムイ。	sinupur kamuy	まことに強い神
345	イヤキゴロガ。	iki a <u>korka</u>	ではあったが

(91)

346	イコロモシリ。	i=kor mosir	彼らの島
347	タヤウンモシリ。	ta(y) Yaunmosir	この本島 (北海道島) の
348	モシンラボキ。	mosin rapoki	島の手
349	チワレワクテ。	<u>ci[w]arewakte</u> (?)	に居を定めた (?)
350	イキカラガラ。	i= <u>ekarkar</u>	のである

(92)

351	タンベクシユ。	tan pe <u>kusu</u>	それゆえに
352	カムイツ° ミ。	<u>kamuy tumi</u>	神の戦いが
353	ア子ホアシ。	an= <u>ehoasi</u> (?)	起こったのだ

(93)

354	ツ° ニアツパケ。	tumi <u>atpake</u>	戦いの当初は
355	ア子コユブ。	<u>an=ekoyupu</u>	厳しかった (?)
356	タンベクシユ。	<u>tan pe kusu</u>	そのために

- 331 モンケアフンベ:oske(?) ahun pe「後から(?) 入った 者」。モはヲの誤写か。oske「中」に助詞がなく自動詞 ahun「入る」が直接後置されているのはおかしいので、*e-ahun「～に入る」か。「Eahun, エアフン, 入ル, ハイル. vi. To go into. To enter into.」(バチラー辞書 98)。ただし現代語では通常は他動詞化接辞 o-を用いて oahun「～に入る」になると思われる。「オアフン oahun【動2】～(場所)に入る;→アフン ahun.」(中川辞書 109)、「oahun オアフン【他動】[o-ahun (そこに)入る] ...に入る。」(田村辞書 451)。
- 332 キノタツアレ:ki notak are「刃を置いて(?)」。行頭の「キ」は不詳だが、もしかすると「キ」の誤写で、母音 i が虚辞として挿入されているだけかもしれない。316も参照。
- 334 ポンルウエシナ:pon ruwe sina「小さな 道を 縛った(?)」。意味はよくわからない。次の 335 からは台詞になるようである。
- 335 カムイケシヨラ:kamuy kes ora「神 の子孫 から(?)」。「オラ」は orowa「～から」の短縮形か。あるいは「ケシヨラ」は空想上の鳥 kesorap「ケソラ」の語末子音 p が聞き落されたものかもしれない。「ケソラ kesorap【名】伝説上の鳥。白沢氏によると、尾の長いえらいカムイで、めったに人の目にふれないという。他地方での記述ではクジャクだという説がある。」(中川辞書 172)、「kesorap ケソラ【名】【動物】キジ(?), ヤマドリ(?) kesorap kamuy ケソラ@プ カムイ キジ(?)の神。kesorap tonon ケソラ トノ キジ(?)の殿(=神様)。[知分類 p.217 伝説中の鳥(たぶん孔雀)](田村辞書 298)。「kes(h)-o-rap 孔雀?(斑紋ある鳥)」(久保寺辞書稿 145)、「kesorap 霊鳥(孔雀?)」(久保寺辞書稿 145) (久保寺 1977:657 では「斑文鳥」と訳している)。
- 336 シュツ° イシヤムノ:sutu(?) isam no「理由なく根(?) がない で」。sut は「根」。「木の根」を「理由」に転用する例は見られず、また sut の所属形は現代語では suci だが、文脈上は ikkew sakno や e-moto-sakno など「理由もなしに」と同じような意味ではないか。
- 338 イコヤングニ:i=koyan kuni「私に・ふりかかる だろう」。
- 339 ウラモシリ:*Úrar-mosir「霞の国」。úrar ウララ「霞」。にかほ本は「ララ」を「ノ」とする。現在の地名かどうかは不明。「ウララ, ーリ úrar, i【名】もや。霞;巫力の強いものは、これを自分の回りにかけて自分の姿を見えなくすることができる。また、戦争などが起こっているところには、それを知らせるもやがかかっているものだとされる。」(中川辞書 69)、「ウララ úrar【名】霧(「ガス」, かすみ, もや, 白い雲。)(田村辞書 779)。
- 340 キフセヌイゲン:kip(i)hi(?) nuykes「助ける(?)」。nuykes は niwkes の音位転倒で宗谷方言にみられる語形。「ニウケン niwkes【動2】【助動】～をしかねる。～しようと思ってもしきれない;能力の限界でできない。」(中川辞書 294)。「助ける(救助) / kip(i)hi nuykes: 'otúsmak(薬で)」(方言辞典 76 宗谷)。kipse は kipihi の聞き誤りか。
- 341 イキガカラリシユ:i=ekarkar kusu(?)「私に・する のだ」。「リ」は「ク」の誤記か。次行 iki と合わせ kusu iki「するだろう」の意か。
- 342 イキヤコロカ:iki a korka「のだけれども(した のだった けれども)」。行頭の iki は前行末の kusu と合わせて樺太方言におけるような kusu iki という意志未来形になっているのではないか。現代北海道諸方言では kusu ne a korka となるであろう。
- 343 パナツイセウラ:*Panatuyse Ura(n)(?)「パナトウイセのウララ(?)」.*Panatuyse は不詳だが地名か。Pana-atuy-so「下手(しもて)の・海・原」とでもいうような意味か。「ウラ」は Úrar の語末が次行の noske の語頭の n によって n に音韻交替した上で聞き落されたか。
- 344 ノシブルカムイ:sinupur kamuy「まことに強い神」。「ノシ」は「シノ」の誤りか。あるいは「プ」は「グ」の誤りで noske or u(n) kamuy 「真ん中 にいる 神」か。
- 345 イヤキゴロガ:iki a korka「だったのだが」。「ヤキ」は「キヤ」の誤記か。
- 346 イコロモシリ:i=kor mosir「彼の 島(?)」。i=は不定人称ではなく 3 人称か。
- 347 タヤウンモシリ:tay Yaunmosir「この 本島」。tay < tan「この」。Yaunmosir ヤウンモシリ は「本島」の意。北海道島のこと。
- 348 モシンラボキ:mosin rapoki「島 下手(?)」。mosin < mosir「島」。347-348 の tan Yaun-mosir mosin rapoki「この本島の間 <この 本島 の島 の間」のように、関係詞の代わりに名詞(ここでは mosir)を2つ重ねる関係修飾は現代まで叙事詩で多用される。現代の叙事詩でも rapok を空間描写に用いることがある。「rapokkari ラポッカリ【自動】[ra-pok-kari 下の方・の下・を通る][雅](田村辞書 562)など。つまりここでは mosir pok「島の下手(=島の西)」のことであろう。Pana-と関係ある神が-pok(i)方面に下った、という方角の対比が重要か。「Moshiri-pok, モシリボク, 西方 n. The west. Syn : Ahun-chuppok. Moshiri-chuppok.」(バチラー辞書 304)。
- 349 チワレワタテ:*ciwarewakte(?)「～に居を定めた(?)」.*ci-ar-ewak-te「そこに居る」。前行から続けて Yaunmosir mosin rapoki *ciarewakte i=ekarkar「北海道の島の下手に居ることに彼らはなった」というような意味か。なお、「chiaiwakte(chiaewakte?)我行きて」(久保寺辞書稿 37)、「riwakte 帰ラス」(久保寺辞書稿 270)などは文脈に合わない。
- 350 イキカラガラ:i=ekarkar「彼らは・そうした」。にかほ本は「キ」を「エ」とする。
- 351 タンバクシユ:tan pe kusu「そのために」。それが原因となって、の意。「パナツイセウラノシブルカムイ」(343-344)という神が北海道島を自分の居地と定めたため、神々同士で島の奪い合いになったということか。当然、島の人々もその戦いに巻き込まれたのであろう。
- 353 ア子ホアシ:an=ehoasi(?)「人々は起こしたのだ」。oasi は他動詞「～を始める」。あるいは「ア」は「タ」の誤記で、374「タ子ボアシ」と同じく tanepo oasi「今まさに始まる」か。
- 354 ツ° ニアツパケ:tumi atpake「戦いの当初」。「ニ」は「ミ」の誤記か。
- 355 ア子コユブ:an=ekoyupu(?)。不詳だが「厳しい」というような意味か。「koyupu【動詞構成要素】用例数: 32 語構成: ko2-yupu (合成動詞のなかで「～を～に締める」の意味で用いられる)」(奥田語彙集 76)とある。
- 356 イコロコタン:i=kor kotan「彼らの 村」。にかほ本は「コ」を「ゴ」とする。

(9 4)			
357	イコロコタン。	i=kor kotan	彼らの村
358	タンルエシヤニ。	tan Ruwesani	このルエサニ村
359	セコアツ° イコル。	ekoatuykor	まで航海を
360	ア子イガラカ。	an=eikarka(r)	私はしたのだ
(9 5)			
361	アンコロコタン。	an=kor kotan	私の村
362	レーペタフ子。	rehe tap ne	名前はそれである
(9 6)			
363	バイウシヤアツ° イ。	paye usa atuy	いくつもの海 (?)
364	アツイラボキ。	atuy rapoki	海の下手を
365	ヤイヌブンデ。	yaynupunte	保護を (?)
366	アヲヤコロカ。	a=ki a korka	私たちはしたのだが (?)
(9 7)			
367	ルウエシヤニウングル。	Ruwesani un kur	ルウェサニ村の人は
368	ツ° ムグルカムイ。	tumkor kamuy	強い神が
369	ツ° ミアニ。	tumi ani	戦いをもって
370	アツタムシユイ。	attamsuye	刀をふるうのも
371	イシラボツカリーレ。	isirapokkarire	彼らには劣る
372	ンベㇿケリ。	npepeker	との噂が
373	アスワクシユ。	as wa kusu	たったので
(9 8)			
374	タ子ボアシ。	tanepo oasi	今まさに始まらんとする
375	ツ° ミアリ。	tumi ari(?)	戦いのために (?)
376	チアイコトムカ。	ciyaykotomka	私は戦装束を着た
377	ア子カラカラクシユ。	an=ekarkar kusu	のであったが
(9 9)			
378	ツアツイカ。	tu atuy ka	いくつもの海の上を
379	チエコヲマナン。	ciekooman =an	私は進んだ
380	ア子カラガ。	an=ekarka(r)	そうしたのだ
(1 0 0)			
381	タンベヲツタ。	tan pe otta	今回、
382	イツガツシヤム。	i=tukassam	私たちの前に
383	ヲシマヤツキ子。	osma yakne	彼らが行って見たら (?)
384	タンルウエシヤニ。	tan Ruwesani	このルウェサニ村は
385	ア子コタンコラ。	an=ekotankor a	私の (?) 村であった

- 359 セコアツ イコル: *ekoatuykor「～のために～まで航海をした」。セガエの誤記か。*e-ko-atuykor「そのことでルエサニ村まで航海する」という意味になるか。
- 360 ア子イガラカ: an=e-i-karkar「私たちは・それを・した」。にかほ本は「イ」を「エ」とする。
- 362 レーペタフ子: rehe tap ne「名前はこちらである(?)」。なぜ「へ」ではなく「べ」なのかよくわからない。にかほ本は「べ」を「べ」とする。
- 95 参照。
- 363 バイウシヤアツ°イ: paye(?) usa atuy「行く(?) いくつもの 海」か。
- 364 アツイラボキ: atuy rapoki「海の下手(しもて)」。にかほ本は「イ」を「エ」とする。
- 365 ヤイヌブンデ: yay-e-nupun-te「保護する(?) <自ら・それで・強く・させる」。にかほ本は「ヤ」を「ア」とする。
- 366 アヲヤコロカ: a=ki a korka「私たちはしたのだが(?)」。「ヲ」は「キ」の誤記か。あるいは a=o-ya(p) korka, a=o-ya(n) korka「私たちはそこに上陸したのだが」だとすると、前の 365 と合わないようと思われる。
- 367 ルウエシヤニウングル: Ruwesani un kur「ルウエサニ の 人」。ここで、...-un-kur「～の人」という表現を用いていることから、Ruwesani が地名であると考えられる。この行以下 367-373 は 7 行で 1 つの詩連をなしているようである。「ルウエサニの人々は神々よりも強いという噂を聞いたので」という内容である。意味的には副詞句であり、日常会話体であれば、この後にとりたて詞の anak, anakne もしくは sekor an pe「というもの」などがあってもよいであろう。064 も参照。
- 368 ツ°ムグルカムイ: tumkor kamuy「強い 神が」。この行は 370-371 アツタムシユイ/イシラボツカリーレ: attamsuye/isirapokkarire「刀をふるうのも彼らには劣る」の主語になっている。
- 369 ツ°ミアニ: tumi ani「戦いを もって(?)」。戦いにおいて、の意味か。
- 370 アツタムシユイ: attamsuye < ar-tam-suye「刀を振り回す」か。行末の「イ」は y ではなく ye であろう。
- 371 イシラボツカリーレ: *i=sirapokkarire「彼ら・より劣っている」。にかほ本は「シ」を「ン」とする。「ラボツカリ rapokkari【自動】[rapok-kari 下の方・の下・を通る][雅] inan okay pe/rapokkari/ki kane hi/koysamnopo イナノカイペ/ラボツカリ/キ カネ ヒ/コイサム ノボ[雅]いずれもまさり劣りすることもまるでなく。《S ユーカラ》(田村辞書 562)。
- 372 ンベムケリ: npepeker「散文説話、噂話」か。文脈から見ると日高などの諸方言の uwepeker「散文説話」(ジャンル名)と同系統語か。ただし語形的には「尋ねる/pisi: 'upépekennu《質問する》;nú(方言辞典 57 帯広)、「尋ねる/ínú; 'upépekenu《ものを尋ねる》(方言辞典 57 宗谷)に近い。085 参照。
- 373 アスワクシユ: as wa kusu「立ったので」。as「立つ」は前の 372「ンベムケリ: npepeker」を as で受けたもので、asur as「噂が立つ」と同じような表現か。にかほ本は「ス」を「ヌ」とする。その場合は nu「聞く」でやはり前行を受ける。
- 374 タ子ボアシ: tanepo oasi「今まさに 始まる」。
- 375 ツ°ミアリ: tumi ari「戦いのために(?)」。ari は「～で」。現代語ではこのような理由を表す接続詞としての用法は見られないようと思われる。
- 376 チアイコトムカ: *ci=eyaykotomka「私は・装束で身を固めた < ci=e-yay-kotomka (私は・自らをそれで飾った)」。コトムカ【kotom-ka】似合うようにする, 飾る, 美しくする。 < コ=それに対して トム=光る カ=させる(萱野辞書 243)、「Kotomka, コトムカ, 飾ル, 美シクスル. v.t. To embellish. Syn: Etomka.」(バチラー辞書 275)。
- 377 ツアツイカ: tu atuy ka「いくつもの海の上(<2つの海の上)」。にかほ本は「イカ」を「カイ」とする。tu～「2つの～」は数が多いことを表す。通常は tu ～、re ～「2つの～、3つの～」のように対句表現となるが tu～だけで用いられることもある。
- 379 チエコナマナン: *cieko'oman=an「私は進んだ」。にかほ本は後半「マナン」を「ナマナン」とするがおそらく写し誤りであろう。
- 380 ア子カラガ: an=ekarka(r)「私は・そうした」。にかほ本は「カラガ」を「ガラカ」とする。
- 381 タンベヲツタ: tan pe otta「今回は」。「tanpe タンベ【名】[tan-pe この・もの] (=tan pe タン ペ)これ. tanpe or ta タンペ オッタ 現在、この場合、今回は」(田村辞書 696)。
- 382 イツガツシヤム: i=tukassam(?)「私・の前に(?) < i=tukari-sam (私・の前・のそば)か。にかほ本は「イ」を「エ」とする。
- 383 ヲシマヤツキ子: osma yakne「(彼らが) 入る ならば」。にかほ本は「ツ」を小文字の「ッ」とする。またにかほ本では「キ」の下に濁点のようなものが添えられている。yakne, yakun は現代語では
- 385 ア子コタンコラ: *an=ekotankor a「私の村であった」。ekotankor は e-kotan-kor「～でもって・村・を持つ」つまり「～を我が村として持つ」の意。前の 384 タンルウエシヤニ tan Ruwesani「このルウエサニ村」を受ける。「ekotankor エコタンコロ【他動】[e-kotan-kor (そこ)で・村・を持つ] ...の村おさである、...を治める」(田村辞書 93)。

(101)

386	子一ワガイキ。	ne wa kayki	しかしながら
387	チコノクリ。	<u>cikonukuri</u>	「私は気が進まない
388	アニエカラガラ。	an=iekarkar	のである
389	キーナシコンナ。	<u>ki nankon na</u>	という次第であろうよ」

(102)

390	イタカン <u>テツ</u> 。	itak=an tek	私がそういうと
391	ムテムシ。	mut emus	彼は刀の
392	シヤンニツチカン。	<u>san nici kan</u>	先に出る柄も
393	ヲテツキライ。	<u>otekkiray-</u>	指の櫛で
394	シアリキボ。	<u>-siarikipo(?)</u>	自分の脇の下の (?)
395	コダメタイ。	<u>-kotametaye</u>	刀を抜き

(103)

396	カムイタメキリ。	kamuytamekire(?)	神の刀をふるい (?)
397	イヤラカムカ。	i=arkam ka	私の肉の上から
398	ホシケルイノ。	<u>hoskiruyno</u>	先に
399	イツイグニカン	<u>i=tuye kuni kan</u>	私を切ってしまうおうとする

(104)

400	ツ° ライラム。	<u>tu ray ramu</u>	そうはさせじと (?)
401	ア子コデ。	<u>an=ekote</u>	私は全力を尽くし
402	ムツルチャボ。	<u>mutrucapo(?)</u>	刀のある先に (?)
403	ア <u>テツ</u> カリレ。	<u>a=tekkarire</u>	私は手を回して

(105)

404	アムデムシ。	a=mut emus	私の刀
405	シヤンニツチカン。	san nici kan(?)	先に出る柄も (?)
406	アノデツライ。	an=otekraye(?)	私は手を走らせ (?)

(106)

407	センラムコラ。	senram kor a	いつもの通り
408	カムイコロベ。	kamuy kor pe	神の持ち物
409	タシベシヤムカ。	tas pe sam ka	の傍に
410	マツナダラ。	maknatara	輝く

(107)

411	タンチャラボキ。	<u>tan carpoki(?)</u>	そのそばに
412	アンタムツ° ラン。	<u>an tam tura n</u>	ある刀とともに
413	カムイ子アंक。	<u>kamuy ne an ku(r)</u>	神なる者

- 386 子ーワガイキ: ne wa kayki「だが」。
- 387 チコノクリ: ci=konukuri「私は・気が進まない」。現代語で nukuri は他動詞である。「ヌクリ nukuri 【動2】【助動】(体などが動かなくて)〜できない。大儀で〜したくない。」(中川辞書 302)、「nukuri ヌクリ【他動】(疲れて/体調が悪くて/年取って体の自由がきかなくて/おっくうで)…できない、..する気になれない。」(田村辞書 439)など。なぜさらに他動詞化接辞 ko-がついているのかは不詳。
- 389 キーナシコンナ: ki nankon na「という次第であろう」。「シ」は「ン」の誤記か。
- 390 イタカンテツ: itak=an tek「私がさういう」。沙流方言などでは tek は「さつと〜する」というような意味の助動詞だが、tek (teh) は樺太方言では「〜すると」というような接続詞用法がある。話したのは主人公であり、次行以下で刀を抜いて襲ってきたのは敵である。
- 392 シヤンニツチカン: san nici kan「先に出る 柄 も」。201 を参照。あるいは「ン」は「シ」の誤記で kan「〜も」ではなく kasi「上」かもしれない。
- 393-395 ヲテツキライ・シアリキボ・コダメタイ: *otekkiray-siarpoki-kotametay(e)「指の櫛・で自分の脇の下の・刀を抜き」か。3 行で 1 つの動詞句。394「シアリキボ」の「キボ」は「ボキ」の誤記か。395 の最後の「イ」は y ではなく ye か。「テツキライ【tek-kiray】指櫛」(萱野辞書 323)。「コダメタイエ kotametaye【動2】〜に向かって刀を抜く;→タメタイエ tametaye。」(中川辞書 183)。
- 396 カムイタメキリ: *kamuytamekire「神の刀をふるい(?)」か。224「タシヤタメイキレ」を参照。297 カムイタメキレという表記もみられる。
- 397 イヤラカムカ: i=*arkam ka「私の肉の上」。ar-は強調表現。3 音節句を避けるため、1 音節増やし 4 音節にしているだけであろう。
- 398 ホシケルイノ: hoskiruyno「先に」。「ホシキ ルイノ【hoski ruy no】先に」(萱野辞書 410)、「hoshki-ruino いや先に 705」(久保寺辞書稿 99)。ruy「激しい」を動詞に後置して助動詞的に用いる用法が樺太方言にある。ここでは hoski だけの 2 音節句を避けるために付したのであろう。
- 399 イツイグニカン: i=tuye kuni kan「私を・切ろうとする」。「イ」は y ではなく ye であろう。にかほ本は「イツイ」を「イツエ」とする。「。」が脱落しているが、ちょうど原本の行末にあたっており、他の行より文字数が多くスペースが足りなかったためかもしれない。
- 400 ツライラム: tu ray ramu「二つの心」。次行「ア子コデ」と 2 行で一連の表現になっている。
- 401 ア子コデ: an=ekote「私は・くつつける」。前行「ツライラム」と 2 行で一連の表現になっている。tu ray ramu an=ekote「私は二つの心をくつつけた」。久保寺は辞書稿例文に「otu raisampa aekote kar = senturaisam @ekotekar さうはさせじと全力を尽して張合ふ。何々させじと懸命になる」(久保寺辞書稿 232)をあげている。にかほ本は「デ」を「テ」とし◎を付す。
- 402 ムツルチャボ: *mutrucapo(?)「刀のある先に(?)」<mut-ru-sa-po(佩く・道・先・指小辞)」。にかほ本は「チ」を「シ」とする。
- 403 アテツカリレ: a=*tekkarire「私は・手を回した」。にかほ本は「テツ」に下線がない。
- 405 シヤンニツチカン: san nici kan「先に出る 柄 も」。201、392 を参照。
- 406 アノデツライ: an=*otekraye(?)「私は 手を走らせ(?)」。「raye1 ライエ【他動】【単】(複は raypa ライバ)(合成語・派生語の中で)(ある方向へ)やる、行かせる、移動させる。」(田村辞書 567)、「ライエ【raye】歩を運ぶ。」(萱野辞書 456)。
- 407 センラムコラ: senram kora「いつもの通り(?)」。238 を参照。
- 409 タシベシヤムカ: tan pe sam ka「これの上にくこの 物 のそば の上(?)」。「シ」は「ン」の誤記か。あるいは「tas(i) pessam ka 「断崖の上」か。この場合「断崖」は宝物の列を指すか。
- 410 マツナダラ: maknatara「輝いている」。にかほ本は「ツ」を「チ」とする。現代沙流方言などでは matnatara ではなく maknatara である。「maknatara マク ナダラ【自動】[mak-natara (明るさや開放を表す語根)・...した状態が続いている] あかあかと明るい(田村辞書 376)。
- 411 タンチャラボキ: tan carpoki「その風下に(?)」。carpok は parpok と同系語か。「parpok【位名】[par-pok ロ・の下] ...の出入口の所、...のすぐそば。inawcipa イノウチパ パラ ポク 幣場(御幣を立ててある所)の入口、幣場のすぐそば。」(田村辞書 326)。語末の「キ」は k ではなく ki ではないか。k だと行全体が 3 音節で短くなってしまふからである。
- 412 アンタムツラン: an tam tura n「ある 刀 とともに」。n は調子を整えるために挿入した子音か。
- 413 カムイアンク: kamuy ne an ku(r)「神なる者<神 で ある 者」。kur の語末子音 r が脱落しているか。

(108)

414	タンルウエトツタ。	<u>tan ruwe etok ta</u>	その道の先に
415	チャヌラマウ子。	<u>can úrar maw ne</u>	薄い霞の風となり
416	シヨウチムツル。	sotem utur	両手の間で
417	イラツコシヤヌ。	<u>irakkosanu(?)</u>	ぱたりと音がして静かになった

(109)

418	ホントモタ。	<u>hontomo ta</u>	その途中で
419	タモシマフンガ。	<u>tam osma hum ka</u>	刀が入った音が
420	セフコシヤム。	<u>sepkosam</u>	ぱたりと音がした

(110)

421	イヤツシヨイ子。	<u>iasso ene</u>	向かい側に (?)
422	トベンラムカ。	<u>to(?) penram ka</u>	胸の上で (?)
423	イワシヤモヲシマ。	<u>i=kutcam(?) osma</u>	話すことには (?)

(111)

424	マクアアシヤツ。	mak aahak(?)	深い奥から (?)
425	キイタカゼ。	ki itak katu(?)	言ったこと
426	ヤイガン子。	ayykanne(?)	のように思われた

(112)

427	ヤンモシリカ。	<u>ya(u)nmosir ka</u>	「ヤウンモシリの上で
428	ヲヤイレシケ。	<u>oyayreske</u>	育った
429	ポナイノシヤニ。	<u>pon aynu sani</u>	小さなアイヌの子孫
430	チヌクルガシユレ。	<u>cinukarkasure</u>	大切に見守って (?)
431	イエガラガラ。	<u>i=ekarkar</u>	もらっていたのだった

(113)

432	キーアノクシユ。	<u>ki i an kusu</u>	そうしていたから
433	アビリガイケ。	a pirka ike	よくよく
434	イコヲケレ。	i=kookere	成長
435	キプ子クシユ。	<u>ki p ne kusu</u>	したのであるから

(114)

436	タ子アナキ子。	<u>tane anakne</u>	今は
437	チコヤイヤム。	<u>cikoyayeyamu(?)</u>	自分で自愛を (?)
438	ア子ガラガラガンナ。	<u>an=ekarkar kanna(?)</u>	私はするものだ。」そしてまた

- 416 ショウチムツル:so tem utur「両手の間を」。「チ」は「テ」の誤記か。「soteme wenkur:tapkar スル時ニアマリ手ヲ広ゲルモノヲ卑メテイフ称。cf. sorutu wenkur < teme 手ヲ広ゲテ物ヲハカル」(久保寺辞書稿 313)。
- 417 イラツコシヤヌ:i-rapkosanu「ぱたりと音がして静かになった」。「rapkosanu 一度ニハタト黙ス。寂トシテ黙ス」(久保寺辞書稿 261)。「ratkosanu 落チタ様ニ消エテナクナル。スート姿ヲ消シカクス」(久保寺辞書稿 264)。
- 420 セフコシヤム:*sepkosam(?)「バタリと音がする」(?)。210を参照。
- 421 イヤツシヨイ子:i-asso ene「その向かい側」に」(?)。asso は arso か。あるいは「asso 壁 < ash-so 立つ壁」(久保寺辞書稿 28)。「Asso, アツ, 家ノ内壁。n. The inside walls of a house.」(バチラー辞書 58)。
- 422 トベンラムカ:to(?) penram ka「胸の 上に」(?)。to は不詳。
- 423 イワシヤモヲシマ: i=kutcam osma「声がする」(?)<私の・喉 に入る」。「ワ」は「ク」の誤記か。「kutcam クツチャム【名】[概] (所は kutcama クツチャム)[kut-sam のど・(< そば)] 声、こわね(声音)、声の音色」(田村辞書 369)。i-*u-ramuosma「彼らは・お互いに同意した」(?)。あるいは*i-asam-osma「その・底・に落ちる」か。
- 424 マクアアシヤツ:mak aahak(?)「奥から」(?)。「マク」は mak「どのように」。「アアシヤツ」は aahak「浅い」、合わせて「何を浅いものか=深い」という反語表現か。よくわからないが、418-420 で受けた傷が深いということか。
- 425 キイタカゼ:ki itak katu(?)「いった言葉のさま」(?)。「ゼ」は「ト」の誤りか。そのままのカナ表記からは-itakatce<itakat-se などの語形が想定できるが、うまく語形が推定できない。
- 426 ヤイガン子:yaykanne(?)「のように思われた<yay-kar ne」(?)。yaykar は現代語では「変身する」の意だが文脈に合わない。次の427以下が登場人物の発話になっているように思われる。現代語の ene an hi「次のようであった」に似た役割ではないか。参考:「yaykar ヤイカラ【自動】[yay-kar 自分・をつくる] ①自分をつくる、変身する。」(田村辞書 852)。「ヤイカラ yaykar 【動1】化ける」(中川辞書 386)。
- 427 ヤンモシリカ:Yaunmosir ka「ヤウンモシリ の上」。ヤンモシリは Yaunmosir つまり北海道島のことだと思われる。
- 428 ラヤイレシケ:*oyayreske「〜で育った」。にかほ本は「ヲ」を「ナ」とする。「みなしご/yáyreska《一人暮らし》」(方言辞典 41 宗谷)。
- 429 ポナイノシヤニ:pon aynu sani「小さなアイヌの子孫」。にかほ本は「ボ」を「ポ」とする。pon「小さい」が付くのは「少年」であることを表現したものか。現代叙事詩の主人公のあだ名 pon yaunpe ポンヤウンペ「小さな・北海道人」と同系統の表現と思われる。
- 430 チヌクルガシユレ:*ci-nukar-kasu-re「大切に見守る」(?)。にかほ本は「ガ」を「カ」とする。ヌクルは nukar のことか。あるいは「ク」は「カ」の誤記か。
- 432 キーアノクシユ:ki i an kusu(?)「そうしていたから」(?)。にかほ本は「キー」を「キ」にする。アノクシユは an kusu か an a kusu かのいずれかであろう。母音が a ではなく o となっている理由は不明。あるいはひょっとして、現代であれば an=ki kusu であるところが、ki=an kusu となっているのだろうか。
- 433 アビリガイケ:a pirka ike(?)「私はよく成長すると」(?)。行頭の a は不詳。不定人称接辞 a=/=an とも考えられるが、pirka は自動詞なので少なくとも現代語では a=pirka ではなく pirka=an となるはずである。「ピ」は濁点が小さいので、「ビ」かもしれない。
- 434 イコラケレ:*i=kookere「私はし終わった」(?)。少なくとも現代語では okere「〜を終える」は助動詞として用いられる他動詞であり、ko-は不要である。
- 435 キプ子クシユ:ki p ne kusu「したのであるから」。この行は 432 と音形がそろえられているのであろう。
- 437 チコヤイヤム:*ci-ko-yay-eyam(?)「自分を大切ににする」(?)<私は・に対して・自ら・大事にする」。「ヤイエヤム yayeyam【動1】自愛する。自分の体に気をつける;→エヤム eyam」(中川辞書 385)、ciko-はいわゆる「中相」。田村辞書には副詞形成接尾辞-no が付いた形が収録されている。「yayeyamno ヤイエヤムノ【副】[yay-eyam-no 自分・を大切ににする・(副詞形成)] 気をつけて、お大事に」(田村辞書 848)
- 438 ア子ガラガラガンナ:an=ekarkar kanna「私はするぞ。そしてまた」。kanna は「また」であろうが、やや不自然である。にかほ本は「ア子ガラガラガンナ」とする。その場合は、an=ekarkar na「私はしたぞ」であろう。

(115)

439	イタガンデ。	itak=an tek	私はそう語ると
440	ツ° コブイシヤ。	tu kopyusa	槍の先を (?)
441	コヤゝチユ。	koyayaciw	自分に刺した (?)

(116)

442	アヤイウエンヌカル。	a=eyaywennukar(?)	私は苦しくて
443	モナツガン子。	monak kanne	目を覚まし
444	イガツロツペ。	ikasi rok pe	上に座り (?)
445	チャツシヤヲツカレ。	cassaotkare	逃げ出した
446	イエガラガラ。	i=ekarkar	のであった

(117)

447	ハンイツ° イマ。	han ituyma	遠くないところで
448	アニコヌヤツ。	an=ikonu yak	聞いてみると
449	セテツカヨ子。	setek kay onne	起き上がることも (?)
450	アニヨグニ。	an=iyokuni(?)	私は入れることも (?)
451	アヤイノイケシテ。	a=yaynuykeste	私は出来なくて

(118)

452	リコシマクリ。	rikosmakur	飛び上がった影に
453	ア子タンカリレ。	an=etankarire	刀を回して
454	ア子タメムコ。	an=etamemko-	刀の半分
455	セプコシヤヌ。	-sepkosanu	ぱたりと音がして

(119)

456	イヤツシコヘ子。	i[y]assikop(?) hene	生きているものを (?)
457	チト° イゲヌカ。	ci=tuye kemnuka	私が血塗れにしたもの
458	イウシヤモヲシマ。	i=usam osma	そのそばに行き
459	ア子アヨヲシंगा。	an=eyayoosinka	言うも難く (?)
460	イチウカ子。	i=ciw kane	突き刺し

(120)

461	チツ° イバケウエ。	ci=tuyipa kewe	私が切った死体を
462	アヌコアンバ。	an=ukoanpa	私は共に持って
463	ソイコバケ。	soy kopake	外の方へ
464	アノシライ。	an=osiraye	私は行った

- 439 イタガンデ: itak=an tek「私はそう語ると」。語末子音 k は表記されていない。あるいは itak ante「(彼は)言葉を置いた」というような語句かもしれない。だとすると 427-439 は主人公に殺された敵の台詞ということになる。
- 440 ツ°コブイシヤ: tuk upun sa(?)「突き出す 吹雪 の先」(?). この行は意味不詳だが、刀をふるうさまを表したものか。
- 441 コヤ>チュ: *ko-yay-aciw(?)「自分に刺す」(?). *yay-ko-aciw の構成要素の順が入り替わったものか。ただしこの順になるのは少なくとも現代語では不規則なので、あくまで一案である。「aciw アチウ【自動】槍などを投げて目標物に刺す」(田村辞書 3)。
- 442 アヤイウエンヌカル: a=e-yay-wen-nukar「私は苦しくなって」。にかほ本では「エ」が脱落。220 を参照。
- 443 モナツガン子: monak kanne「目を覚まして」。「モナツ」は monak「目が覚めている」であろう。「カン子」は kane もしくは kanne「～して」。「モナク monak【動1】目覚めている」(参照)モシ mos「(中川辞書 382)、『mónak1 モナク【自動】目が覚めている。☆参考 覚めている状態を言う。眠っている状態から目が覚めることは mos モシ」(田村辞書 392)。あるいは「monak2 モナク【副】ただでさえ、そうでなくでも」(田村辞書 392)、「monak-ka サラデダニ」(久保寺辞書稿 185)などと関係がある慣用的な表現なのかもしれない。
- 444 イガツロツペ: i=kasi rok pe「その上に座り」(?). 「ツ」は「シ」の誤記か。にかほ本は「ペ」を「ベ」とする。
- 445 チヤツシヤヲツカレ: *cassaotkare < ci-ar-sa(w)ot-ka-re(?)「逃げる」(?). 「サウオツ sawot【動2】～から逃げる」(中川辞書 196)、「sawot サウオツ【他動】[sa-w-ot 前(外)・(母音連続をさける挿入音)・...につく/現れる/いる]...をさける、...から逃げる、...のいない所へ行く、...を置き去りにして逃げる。」(田村辞書 612)。
- 446 イエガラガラ: i=ekarkar「私はした」。にかほ本は「イ」が脱落。
- 447 ハンイツ イマ: hanke(?) tuyma「近くの遠く」(?). 「イ」は「ケ」の誤記か。tuyma「遠くより少し近い場所を hanke tuyma「近くの遠く」と表現したものか。あるいは誤記ではなく han *etuyma「遠くない」というような句か。
- 448 アニコヌヤツ: an=ikonu yak「噂を聞いてみると」。「ikonu【動 2】用例数:4 語構成: i-ko2-nu [噂]を人について聞く」(奥田語集 46)。
- 449 セテツカヨ子: *setesu(?) kay onne「起き上がることも」(?). setesu は他方言の hetesu か。「hetesu 頭を抬げる, 起上る, 起きる」(久保寺辞書稿 92)。なお「セ」表記は se ではなく he を表している可能性がある(佐藤知己 1990, 1995)。
- 450 アニヨグニ: *an=iyokuni(?)「私は・驚いた」。iyokuni(?)は iyokunure～iyokunnure「驚く」と同系語か。「iyokunure イヨクヌレ【自動】[i-y-okunure ものごと・(挿入音)にあきれる]あきれる、びっくりする(「たまげる」)」(田村辞書 261)。
- 451 アヤイノイケシテ: *ay=yay-nuykes-te「私は・できずに」。nuykes は他方言 niwkes の音位転倒か。にかほ本は「ノイ」を「ノエ」とする。「yainiukeshte 自身能はざらしむ(645), 出来ない様にする」(久保寺辞書稿 375)。「yayesinniwkes ヤイエシニウケシ【自動】[yay-e-sir-niwkes 自分・について・あたり・をしそこなう] 何もできない、何をすべきもわからない、だらしがない」(田村辞書 847)。「助ける[救助] / kipi(hi) nuykes; 'otúsmak (薬で)」(方言辞典 76 宗谷)。
- 452 リコシマクリ: rik-osma-kur-i(?)「飛び上がった影」(?). 「リコシマ rikosma【動1】上へ飛び上がる; <rik「高所」osma「～(場所)に突っ込む」」(中川辞書 414)。
- 453 ア子タンカリレ: *an=e-tam-kari-re(?)「私は・刀を回した」(?). 403「アテツカリレ」にも・karire「～を回させる」(?)という語尾がみられる。
- 454-455 ア子タメムコ・セブコシヤヌ: *an=e-tam-emko-sep-kosanu「私は・それで・刀・の半分・パタリと・鳴らした」。2行1句。209-210に同じ表現がある。
- 456 イヤツシコヘ子: *iyassiko(p)(?) hene < i-ar-siko(p) hene「生きているものも」(?). 語頭に i-は不要に思われる。もしかすると行の音節数を整える(5音節を6音節にする)ための虚辞なのかもしれない。
- 457 チト°イゲヌカ: ci=tuye *kemnuka(?) < ci=tuye kem-nu-ka「私が血塗れにした」(?). これらの ci=は1人称というより不定人称と思われるが、文脈上は「私」が行ったことである。なお kemnu には「血が出る(自動詞)」「気の毒に思う(他動詞)」の2つがある。ここではおそらく前者であろう。「ケムヌ 1 kemnu【自動】[kem-nu 血・を持つ] 血が出る」(田村辞書 294)、「ケムヌ kemnu【動2】～をあわれに思う」(中川辞書 174)、「ケムヌ 2 kemnu【他動】...を気の毒に思う、...をかわいそうに思う」(田村辞書 294)。
- 458 イウシヤモヲシマ: *i=u-sama-osma「私のそばに来て」(?). 後半部「シヤモヲシマ」は明らかに sam/sama「そば」と osma「～に入る」から構成されているが、行頭部の i-u-という接辞群がよくわからない。不定人称接辞 i=と、相互性を表す u-はどちらか片方だけでよいはずであり、両方付いているのは不自然である。-u-は音節数を整える(5音節を6音節に)ために挿入されただけかもしれない。
- 459 ア子アヨヲシガ: an=*eyayoosinka < an=e-yay-o-o-sinka(?)「私は」(?)できずに<私は・そこに・自分を・入れる・ことについて・疲れる」(?). この行は意味がとれないが、何かできずにいる様子を表したものと思われる。もしかしたら「何も言わずに」というような意味かもしれない。現代語では sinki「疲れる」は北海道方言形、sinka「疲れる」は樺太方言形である。
- 460 イチウカ子: i=ciw kane「彼を刺して」。文脈からはこの i=は1人称ではなく3人称と思われる。
- 461 チツ°イバケウエ: ci=tuypa-kewe「私が・ずたずたに切った・遺体」。
- 462 アヌコアンパ: an=uko-anpa「私は・共に・持つて」。同一文章内なのに、461は ci=(1人称複数 exclusive 除外形)、462は an=(1人称複数 inclusive 包括形)で語られている。このような組み合わせがよくみられる。
- 464 アノシライ: an=o-siray(e)「私は・そこへ・行った」。語末はイと表記されているが y ではなく ye と思われる。

(1 2 1)

465	アコロコタン。	a= <u>kor kotan</u>	私の村
466	シヤンジハシカシ。	sanciwasi kasi(?)	下る流れを (?)
467	アンコシユエ。	an=kosuye-	私は下って
468	オトボガイキ。	- <u>otopo kayki</u>	帰ったが

(1 2 2)

469	アヌンチヤシ。	an= <u>un cási</u>	私の砦
470	アウゴバケ。	<u>aw kopake</u>	内の方へ
471	アノシラエ。	<u>an=osiraye</u>	私は行った

(1 2 3)

472	タゝランバ。	tata ranpa(ra)	切ったヤナギを (?)
473	アカイアンコロカ。	a=kaye aan korka	私は折ったのだが
474	子一子ガイキ。	ne ene kayki	どこでも
475	子バシコルゲセ。	nep askor kese	どんな酒の残りも (?)
476	チアラギシデツカ。	ciarkistekka	美しくて (?)
477	ヲカイアナイ子。	okay=an ayn e	暮らしていたがやがて

(1 2 4)

478	タンシ子ト。	tan sine to	ある日
479	チエシヤムガリ。	ci(s)e sam kari	家の周りに
480	カムイ子ワ。	kamuy ne wa	神でも
481	イツコドンノ。	ek kotom no	来たようで

(1 2 5)

482	カーニポーレフン。	kani pore(?) hum	金属のような音 (?)
483	シツラレ。	siturare	とともに
484	アバコバケ。	<u>apa kopake</u>	戸口の方に
485	ヤイツ° イバレ。	<u>yaytuypare</u>	進んでくる
486	アウコバケ。	<u>aw kopake</u>	屋内の方に
487	ヲシライ。	osiraye	行った

(1 2 6)

488	アニエカンホ。	an=iekanhok-	私は出迎えて
489	シツチウバレ。	-sitciwpare	迎え入れた (?)

(1 2 7)

490	インガラアングシユ。	inkar=an kusu	見てみれば
491	タンベヘタ。	tanpe <u>he ta</u>	これは
492	メノコ子ヤ。	menoko <u>ne ya</u>	女性であるか

- 465 アコロコタン: a=kor kotan「私・の・村」。自分の属している村、出身地のことであろう。
- 466 シヤンジハシカシ: san ciwas kasi「下る・波・の上」。ハは ha ではなく wa のことであろう。「sanciwash 下ル水流」(久保寺辞書稿 279)
- 467-468 アンコシユエ・オトボガイキ: *an=kosuye-otopo(?) kayki「私は下って帰ったが(?)」。「Koshuye, コシユイエ, 何処....ニ行く,カラ行く. vi. To go away to. To leave a place.」(バチラー辞書 260)、「Hotopo, ホトボ, 再ビ帰ヘル. adv. Back again. Syn: Hetopo.」(バチラー辞書 170)。にかほ本は「オ」を「ホ」とする。2行1句。
- 469 アヌンチャシ: an=un cási「私の・砦」。029 参照。
- 470 アウコパケ: aw kopake「内側・の方向」。
- 472 タランバ: tata ranpa(ra)(?)「刻んだ ヤナギ(?)」。「§316.ケシヨオヤナギ *Chosenia bracteosa* Nakai 辞書に、Rambara、Rambara susu、Ranpara susu とある。詳表 (A, p.19) に *Salix* sp. エゾノクロヤナギ Rambara (十勝・上川)、とある。」(知里辞典植物篇 186)。「Rambara, ラムバラ, 柳ノ種類. n A kind of willow. *Chosenia bracteosa* Nakai.」「Rambara susu, ラムバラスス/Ranpara susu, ランバラスス, エゾノクロヤナギ. *Chosenia bracteosa*, Nakai. A kind of willow. Rampara menas spread out.」(バチラー辞書 408)。おそらく ranpara の語末の ra が脱落(聞き落しか、発音が脱落したか不明)したものか。473 と合わせてイナウのことではないかと思われる。
- 473 アカイアンコロカ: a=kaye aan korka「私は・折った のだった のだが」。現在では kaye「折る」ではなく tuye「切る」のほうが自然ではないかと思われる。
- 474 子ー子ガイキ: ne ene kayki「どこにおいても」。
- 475 子バシコルゲセ: nep askor kese「どんな酒の残り(も)」。「アシコロ askor【名】酒(どぶろく);カムイ アシコロ kamuy askor という」(中川辞書7)
- 476 チアラギシデツカ: ciarkistekka「美しくして(?)」。047、272、321 を参照。
- 477 ヲカイアナイ子: okay='an ayne「暮らしていたがやがて」。にかほ本は「アナイ子」を「アナエ子」とする。
- 478 タイシント: tay sine to「ある日」。Pilsudski (1912:13) に tay sineto okay=an という表現がみられる。tay は tan「この」か。
- 479 チエシヤムガリ: c(is)e sam kari「家の周りに」。「エ」は「セ」の誤記か。あるいは誤記ではなく「チエ」だとしたら、樺太方言にしばしばみられるように、cise の母音 i の脱落と子音 c と s がほぼ同時に発音されるようになり、ce に近い音声になったか。ただし sam kari という表現はやや不自然。
- 480 カムイ子ワ: kamuy ne wa「神でも(?)」。ここの ne wa「であって」はやや不自然である。
- 481 イツコドンノ: ek kotom no「来たようで」。「イツ」は ek であろう。
- 482 カーニポーレフン: káni *pore(?) hum「金属を(?)する音」。*pore は不詳。「カーニ」の引き棒「ー」は ka が高アクセントであることを表したものか。だとすると「ポーレ」も *póre という語形が想定できるがよくわからない。
- 483 シツラレ: siturare「〜とともに」。前行 482 の hum「音」を伴って、ということであろう。「siturare シツラレ【他動】[si-tura-re 自分・に同伴する・させる] ...を自分と一緒に来させる」(田村辞書 667)
- 485 ヤイツ イバレ: yaytuypare「〜に進んでくる」。にかほ本は「ツ°イ」を「ツ°エ」とする。「yaytuypare ヤイトウイバレ【他動】[yaytuypa-re 自分・を切る(複)・させる][雅] (の方へ)へ進んで行く」(田村辞書 868)。
- 487 ヲシライ: osiraye「〜へ行く」。語末のイは y ではなく ye であろう。
- 488 アニエカンホ: an=i=ekanhok「私は・その人を・出迎えた」。「出迎える/ 'ekánhok; 'ekarí 'omán」(方言辞典 70 八雲)。「ekanok エカノク【他動】...を迎える/出迎える」(田村辞書 86)。原文カナ表記では語末子音 k が脱落している。
- 489 シツチウバレ: sitciwpare「迎え入れた(?)」。「shitchiu 到着ク」(久保寺辞書稿 304)、「shitchiure 到着ケル」(久保寺辞書稿 304)。人称接辞がついていないが、3人称形なのではなく、おそらく 488 の動詞と一種の合成動詞になっているために人称接辞は不要なのであろう。そういう意味では 488-489 は 2行1句ともいえるであろう。
- 490 インガラアングシユ: inkar=an kusu「見てみたところ」。にかほ本は「イ」を「エ」とする。
- 491 タンベヘタ: tanpe he ta「これこそは」。he ta という語形はやや不自然と思われるが、492 と合わせて一種の感嘆表現か。

(128)

493	ナンニゲプカ。	nan n <u>ikep ka</u>	顔の輝きも
494	リコンチプタへ子。	rikun <u>cup ta</u> hene	太陽のように
495	マツナタラ。	maknatara	輝いている

(129)

496	ラツ <u>チュ</u> タラ。	ratcutara	穏やかに(?)
497	アヘツ° イシヤム。	ape <u>tuysam</u>	火の回りに
498	ヲシライバ。	<u>osiraypa</u>	座って行く

(130)

499	ウルガイガン子。	<u>urukay kanne</u>	しばらくの間こそ
500	ヲカイアango。	<u>okay=an ko</u>	暮らしていて
501	ホブンバイケ。	<u>hopunpa ike</u>	(彼らは) 起き上がると

(131)

502	アノイベシユ。	<u>an=oype su</u>	私たちの鍋
503	ツ° ヘイチクベ。	<u>tupe ikikpe(?)</u>	結んだ(?)
504	カラバレホ。	karpare po	そうしておいた
505	ヲツ <u>ペツ</u> ° イガ。	<u>uwokpe tuyka</u>	結び目(?) の上に
506	イシユバカ。	<u>isupa(?) ka</u>	煮もして

(132)

507	ヒリカシユケ。	pirka suke	美味しい料理を
508	コシモイワ。	kosimoy wa	用意して
509	シヤプテイケ。	sapte ike	出して

(133)

510	ヒリカイ <u>メツ</u> 。	pirka imek	良い分け前
511	イコボンバ。	i=kopunpa	私に配膳した

(134)

512	ツイガシケ。	tuykasike	そうしながら
513	イタコマレ。	itakomare	(彼女は) 語った

(135)

514	シヤシプツ° ンタ。	Sanput un ta	「サンプツ村で
515	ユイレカウエ。	i=uytek (h)awe	私が伝言を託されたのは
516	イ子ヲカイ。	ene oka i	このようである

- 494 リコンチプタへ子:rik un cup ta hene「太陽のように高く・にある・太陽・こそ・などであるか」。rikun が rikon、cup が cip など母音が誤って表記されている。なぜかはわからない。聞き誤りか。
- 495 マツナタラ:maknatara「輝いている」。「maknatara マク ナタラ【自動】[mak-natara (明るさや開放を表す語根)・...した状態が続いている] あかあかと明るい」(田村辞書 376)。
- 496 ラツチュタラ:ratecitara「おだやかに」と同じか。
- 499 ウルガイガン子:urukay kanne「しばらくの間こそ」。北海道方言では irukay だが、樺太方言では urukay。「イルカ(イ)iruka(y)【副】ちよつとの間;イルカ、イルカイ、どちらの形も用いられる。沙流方言ではイルカ、その他の多くの方言ではイルカイという」(中川辞書 48)。「iruka イルカ【副】短い間、ちよつとの間。」(田村辞書 245)、「ちよつと[少しの間]／urukay(30分位); ponnoponno(10分位)」(方言辞典 257 樺太)。
- 500 ヲカイアング:okay='an ko「暮らして」。にかほ本は「イ」を「エ」とする。
- 503 ツヘイチクベ:tupe ikik pe(?)「結んだものを作り(?)」。この 503 以下 3 行の意味はよくわからない。tupe「結ぶ」。中川辞書「トウベ tupe 【動2】～を結ぶ。～を縛る」。チはキの誤記か。あるいは cik「液体が垂れる」(自動詞)か。いずれせよ、前の 500 で言及されている鍋に関する描写であり、おそらくは料理用の鍋を用意しているのだろうと思われる。
- 504 カラバレホ:karpape po(?)「作らせて(?)」。前の 503 を受けて「～してから」というような意味になっていると思われるが、よくわからない。
- 505 ヲツベツ イガ:uwokpe tuyka「結び目(?)の上に」。「Uwok, ウウオク, 結ブ. v.t. To fasten. To wrestle.」(バチラー辞書 534)、「oxpe 炉鉤」(久保寺辞書稿 233)。
- 506 イシユバカ:*isupa ka「煮もして」。「シユバ」は súpa「煮る」か。「スパ súpa【動2】(複)～を煮る;→スウェ suwe」(中川辞書 231)。「súpa スパ【他動】[複] (単は suwe スウェ) (二人以上が/二つ以上)を煮る」(田村辞書 685)。語頭の「イ」は自動詞化接辞 i=か。なお「シユバ」は suypa もしくは*siwpa というような語形かもしれない。「煮る[方言:たく]／suyé(単); súypa[複]」(方言辞典 97 帯広)。にかほ本は「イシユエバカ」とするが、その場合は suypa と解釈したほうがよいかもしれない。
- 507 ヒリカシユケ:pirka suke「美味しい料理」。suke「料理する」は自動詞だが、ここでは「料理」という名詞として用いているのであろう。
- 508 コシモイワ:*kosimoye wa「用意して」。前行の pirka suke「美味しい料理」を受ける。「simoye シモイエ【自動】[si-moye 自分を動かす]働く」(田村辞書 636)。
- 509 シヤブテイケ:sapte ike「(料理を)出して」。ここでは料理を出していることになるが、やや不自然である。もしも鍋に関する描写だとすると、sanke(単数形) sapte(複数形)「(浜に)下ろす」はどこかに片づけてある鍋を出してくることであり、火にかかっている鍋を下ろすことは yanke(単数形) yapte(複数形)「(岸に)上げる」を用いるはずである。にかほ本は「シユヤブテイケ」つまり su yapte ike「鍋を下ろして」としており文脈によく合致する。なお、複数形になっているのは動作主の複数性ではなく、動作の多回性を示しているのかもしれない。
- 511 イコボンバ:i=kopunpa「私に配膳した」。「コプニ kopuni【動3】(単) コブンパ kopunpa(複)。～に～を(食事として盛って)差し出す」(中川辞書 189)。「kopuni コプニ【複他動】[単](複は kopunpa コブンパ) [ko-puni ...に対して...を持ち上げる]...(食べもの)を供する/出してあげる(持って行ってあげるときも一緒に食べるときも)」(田村辞書 189)。にかほ本は「バ」を「ハ」とする。
- 512 ツイガシケ:tuykasike「そうしながら」。177 を参照。
- 514 シヤシブツンタ:Sanput un ta「サンブツ村で」。あるいは Sanputu ta であって n は挿入子音のようなものか。「シヤシ」は「シヤン」の誤記であろう。地名 Sanput サンブツは 109「シヤンブツンク」、114「シヤンブツング」に「Sanput の人」という表現でも登場している。
- 515 ユイレカウエ:i=uytek (h)awe「私が伝言を託されたのは」。「レ」は「テ」の聞き誤りか。uytek は伝言の使者として派遣することである(方言辞典 116 八雲・幌別・帯広・美幌・旭川・名寄)。「使う／e'iwánke; 'úytek(人を)」(方言辞典 116 八雲)など。
- 516 イ子ヲカイ:ene oka (h)i「次のようなことである」。

(136)

517	タ子アナキ子。	tane anakne	「今こそは
518	アツ° イバイ子。	atuy pa (h)ene	海の上手と
519	アツイゲセ子。	atuy kes (h)ene	海の下手と
520	アンコヤイトバレ。	an=koyaytupare-	私は心配する
521	イシヤムグ <u>ホツ</u> 。	-isam-kohok	ことなく交易する
522	アンラムクシユ。	an=ramu kusu	私はそう思ったので

(137)

523	ルエシヤヌング。	Ruwesanunku(r)	ルウェサニの人
524	キレトコ。	kir etoko	の膝元に
525	アンツ° レシ。	<u>an=turesi</u>	私の妹を
526	アノライナ。	<u>an=oraye na</u>	私は押しやるのである

(138)

527	タプ子ア <u>ナツ</u> 。	tap ne anak	そうしてこれが
528	シモシリバ。	simosirpa	本島の上手(?)と
529	イチンケウシヤンケ。	<u>i=cinkew-sanke</u>	親戚になる(?)
530	ケハ子キ子。	<u>ki wa ne (ya)k ne</u>	のであれば(?)
531	ピリカグシタバン。	<u>pirka kus tapan</u>	幸いです」

(139)

532	アリアイシヨク。	<u>ari ay sonko</u>	という知らせを
533	イメツ° クイカ。	<u>imetu ku i ka(?)</u>	宴の残り酒を(?)
534	ヲマレカン子。	<u>omare kanne</u>	入れて
535	イコイブニ。	<u>i=koypuni</u>	私にくれた

(140)

536	セベライ <u>メツ</u> 。	sepera imek	川上におすそわけを
537	アंकシウムシカ。	an=kus(h)umuska(?)	私は送り伝言した(?)

(141)

538	タホロワノ。	<u>taporowano</u>	それから
539	シヤンブツンマ。	<u>Sanputunmat</u>	サンプトゥンマツ姫
540	シヲゲシヨロ。	<u>siokes oro</u>	を下座に
541	アンカリレ。	an=karire	座らせ(?)
542	キコロカイキ。	<u>ki kor kayki</u>	などしながら

- 518 アツ^oイバイ子: atuy pa (h)ene「海の上手(<pa 頭)も」。地域名称か。次の 519 と対句になっている。知里真志保は「アど^oイバ atuypa 海のかみのはずれ。地方によって方角が違う。ホロベツでは海の東方(トカチ、クシロ方面)を指す」(地名小辞典 11 著作集 348)。519 も参照。
- 519 アツイゲセ子: atuy kese (he)ne「海の下手(<kese 尾)も」。地域名称か。前の 518 と対句になっている。知里真志保は「アど^oイケシ atuy-kese, e/i 海の下のはずれ。地方によって方角が違う。ホロベツでは海の西方(ハコダテ方面)を指す」(地名小辞典 11 著作集 348) とする。518 も参照。
- 520-521 アンコヤイトバレ/イサムグホツ: an=*koyayitupare-isam-kohok「私は・心配する・ことなく・交易する(?)」。現代では未出と思われるが、おそらく 2 行にまたがる句である。にかほ本は「ト」を「ド」とする。「ヤイトウバレ yaitupare 【動1】 気をつける; アクセントの位置が、yáyitupare ではなく、yáitupare であることに注意」(中川辞書 390)、「yayitupare ヤイトウバレ【自動】 気をつける。☆発音 yi i の部分を高く発音する」(田村辞書 851)。「コホク 【ko-hok】(〜から) 買う。<コ=それ(人)に対して ホク = 買う」(萱野辞書 246)。
- 523 ルエシヤヌング: Ruwesan-un-ku(r)「ルウェサニ村の人」。064 を参照。
- 524 キレトコ: kir etoko「膝元」。「ひざもと (膝許) kiretox (k-o) [kir (足) +etok (先)]《S.》【雅】」(知里辞典人間篇 334)。知里辞典で《S.》とあるのは樺太方言のこと。ただし kir「足」という単語は北海道方言にもあり、kir etoko という表現も北海道方言にあるかもしれない。
- 526 アノライナ: an=oray(e) na「私は押しやるのである」。oraye は「押しやる」だが、モノや人を行かせることにも用いられる。ここでは妹を「行かせる」つまり「結婚させる」という意味で用いられているのであろう。「イ」は y ではなく ye を表したものであろう。「オライエ oraye【動2】 ~を押しやる」(中川辞書 132)、「oraye オライエ【複他動】[o-ray-e (そこに)・行く/来る・(他動詞化)]...を...の方へ寄せる」(田村辞書 479)。
- 527 タプ子アナツ: tapne anak「このことは」。にかほ本は「プ」を「フ」とする。
- 528 シモシリバ: si-mosir-pa「本島の上手<大きな島・島の上手(<pa 頭)」。mosirpa は地域あるいは方角(多くの地域で東)を指す語であるが、ここは simosir-pa「大きな島・の上手」、si-mosirpa「真東」のどちらともれそうである。「mosirpa モシリ パ【位名】[mosir-pa 国土・の上(かみ)の方] 国の上(かみ)=東の方」(田村辞書 395)、「モシリ パウンサラ Mosirpaunsar【国名】モシリパウンサラ。ウエベケレ 中に出てくる地名。そこからウラユシナイ Urayusnay までトパツウミ topattumi に来るという話がある」(中川辞書 381)、「Moshiripa, モシリパ, 東. n. The east. Syn: Chupka. Moshiri etok.」(バチラー辞書 304)。「モレルパ mosir - pa 国のかみて。—北見のシャリではシレトコ岬の方、クシヤロではシャリおよびシレトコ方面、目高の東ズブナイでは東のクシロ方面をさす」(地名小辞典 61 著作集 379-380)。
- 529 イチンケウシヤンケ: *i=cinkew-sanke「私たちと親戚になる(?)」。cinkew は「腰」だが、樺太方言では「両親」である。この行は言葉通りには「私に・腰を出す」だが文意が通じない。「親戚になる」ことを意味したか。「親 cinkew, -ehe (また"親元"【父母・祖父母の総称; 'o'usi《"親元"】)、「cinke'utarikehe 先祖」(村崎 1976: 122)、「みなしご/ecinkewsahpe」(方言辞典 41 樺太)。138, 158 も参照。
- 530 ケハ子キ子: ki wa ne (ya)k ne「したならば」。ただし「キワ子ヤキ子」が 5 回、「キワ子ヤツキ子」が 1 回あり、「ケハ子キ子」という表記はこの 1 回のみである。
- 532 アリアイシヨク: ari ay sonko「と いう 知らせ」。ay<an。
- 533 イメツクイカ: imetu kuyka(?)「おすそ分けの・酒を(?)」。「Emetup, エメツプ, 祭ノ時女ニ与ヘル酒. n. A portion of wine given to women at a feast. Syn: Chimetup.」(バチラー辞書 115)「Imetu, イメツ, 宴席ノ時呑残タ酒. n. Drink left over at a feast.」(バチラー辞書 189)。kuyka は不詳。何かの上に、と言っているのか。あるいは imek tuku i ka「分け前を出すことも」と言っているのか。前の行である 532 が「という知らせ」、後の 534 が「入れて」という文脈からは「という知らせ・を言いながら酒を・入れて」となりそうである。
- 536 セベライメツ: hepera imek「川上に・おすそ分けを」。「へペラ hepera 【副】 川上へ」(中川辞書 348)、「へペラ hepera【副】 [he-pe-ra 頭を・川上・(?)] 川上の方へ」(田村辞書 184)。「イメク imek【動1】(とくに食料を) 分け与える」(中川辞書 45)、「imek イメク【自動】 食べ物を分け与える、食べ物をおぜんを運ぶ」(田村辞書 230)。セが he を表記した可能性については佐藤知己(1990: 160-161、1995: 13)を参照。
- 537 アンクシウムシカ: an=kus'(h)umuska(?)「私は・人を送り伝言した(?)」。意味がよく分からないが kus「〜を通る」と humus「音がする」に関するか。「クシ kus 1【動2】〜(場所)を通る」(中川辞書 162)、「kus1 クシ【他動】(場所)を通る」(田村辞書 367)。「humush 音あり」(久保寺辞書稿 101)。**humuska* は「音をさせる」という意味になるか。あるいは an=ko-**sihumuska* であり、sihumnyar, simusiska などと同じく来訪を告げる動作のことか。「シフムヌヤラ sihumnyar【動1】他人の家を訪れたとき、自分の存在を知らせるために、戸口で身の回りのものを叩いたり、足踏みをして雪を落としたりして音を立てる; <si-「自分の」hum「音」nu「〜を聞く」-yar「させる」」(中川辞書 220)、「simusiska シムシカ【自動】[si-musis-ka 自分・咳払いする・させる] 来訪を告げるために入口の外で咳払いをする」(田村辞書 636)。
- 539 シヤンプツンマ: Sanputunmat「サンブツ村の女性」。Sanput 出身の女性であることを意味する。Sanput サンブツは現代の叙事詩の多くで主人公側の Sínutapuka 村の味方の勢力として登場する。
- 540 シラゲシヨロ: siokes oro「自分の下座に」。okes は位置名詞なので少なくとも現代語であれば oro(もしくは or)は不要である。
- 541 アンカリレ: an=karire「私は座らせた(?)」。「カリレ【kari-re】回す」(萱野辞書 202)。「廻す/sikánnatkire; sikárire; kárire; 'okúste《上下ひっくり返す》」(方言辞典 34 帯広)。kari は旋回すること、道を回っていくことの両方を指す。「カリ kari 2【格助】〜を通して。〜から; 経由する地点を表わす。(場所)を要求しない」(中川辞書 150)。男性が座る場所から上手は男性の管轄であり、女性が座る場所から下手(入口方向)は女性の管轄である。つまり妻の座に座らせて妻の仕事を任せた、ということであろう。にかほ本は「レ」を「ン」とする。

(1 4 2)

543	子一子カイキ。	nene kayki	どこでも
544	子フトリヲロシベカ。	nep tori oruspe ka	何の噂も
545	イシヤムノボ。	<u>isam</u> no po	聞かない
546	シラヌワヲカイアン終。	<u>siran</u> wa okay=an	で私たちは暮らした

- 543 子一子カイキ:nene kayki「どこからも」。「どちらへ／nene」(方言辞典 314 美幌)。にかほ本は「カイキ」を「カエモ」とする。音の音源は奪格(wa「～から」)ではなく向格(un「～へ向かって」)で表現する。nene も向格であり「どこからも話を聞かない」という意味に合致する。
- 544 子フトリヲロシベカ:nep tori oruspeka「何の噂も」。tori「鳥」であろう。tori oruspe あるいは cikap oruspe「鳥の話」というのは「噂」を意味する慣用句であろう。「(4) cikap oro-peka an-nu 《北蝦夷古謡 p.41》日本語で‘風の便りに聞く’ ということをアイヌでは‘鳥の便りに聞く’ という。cikap oro-peka i-nu《シラウラ古謡 X.53》」(知里辞典動物篇 220)。
- 545 イシヤムノボ:isam no po「無しに」。「聞かないで」の意。にかほ本は「イ」を「エ」とする。
- 546 シラヌワヲカイアン終:siran wa okay='an「様子で私たちは暮らしていた」。なおここで「終」とある。

丹菊 逸治（たんぎく いつじ）

アイヌ・先住民研究センター准教授。
専門は口承文芸論、アイヌ語アイヌ文
学、ニヴフ語ニヴフ文学。

18th-Century Ainu Verse
Alliteration and Rhyming in The Epic Story of Ruwesaniunkur

Ainu and Indigenous Language Archive Project Report 2020

Published on March 25, 2021

Written by Itsuji TANGIKU

Published by Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University

Kita 8-jo Nishi 6-chome, Kita-ku, Sapporo, Hokkaido 060-0808, Japan

Printed and bound by Hakuyo Printing

2020 年度アイヌ・先住民言語アーカイヴプロジェクト報告書

18世紀アイヌ押韻文

ルウェサニウングル 叙事詩その頭脚韻と不完全韻

2021年 3月25日 発行

著者 丹菊逸治

発行 〒060-0808 札幌市北区北8条西6丁目

北海道大学アイヌ・先住民研究センター

印刷・製本 柏楊印刷株式会社
